三重県埋蔵文化財調査報告180-2

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-1

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第４次）
～中世以前編～

2005（平成17）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

県中央部に位置する三重県松阪市嬉野天花寺町の一帯は、雲出川がもたらす肥沃な土壌によって、古くから人々の生活が連綿と営まれた地域です。

今回調査が実施されました天花寺城跡・小谷赤坂遺跡では、弥生時代の集落跡、古墳、中世墓、近世の経塚などを確認しました。本報告書は、そのうち、中世以前の調査結果をまとめたものです。

調査しました場所は、残念ながらすでに道路の整備事業のために消滅しました。地域振興のための道路整備も大変重要な事業ですが、過去の遺産を犠牲にした上でなりたっていることは、忘れてはならない事実です。消滅してしまう遺跡を記録保存という形で少しでも皆様方に知っていただき、文化財保護の大切さを知っていただければと願ってやみません。

文末となりましたが、協議から発掘調査にかけて多大なるご理解とご協力をいただきました県土整備部・嬉野町教育委員会（当時）・嬉野町（当時）在住の方々に感謝を申し上げます。

2005年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　吉　水　康　夫

例　　言

1．本書は三重県松阪市嬉野天花寺町（2004年12月までは一志郡嬉野町天花寺）字小谷・赤坂ほかに所在する天花寺城跡・小谷赤坂遺跡の第４次発掘調査のうち、中世以前の調査結果をまとめた報告書である。

2．第４次調査は、一般地方道天花寺一志嬉野インター線緊急地方道路整備改良事業に伴い、平成９年度に緊急発掘調査を実施したものである。

3．発掘調査及び報告書作成は、以下の体制で実施した。

〈平成９年度（発掘調査）〉

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹　吉水　康夫　　主査　前川　嘉宏

技師　原田恵理子　　水谷　　豊　　主事　川瀬　　聡　　松葉　和也

技術補助員　川崎　志乃　　研修員　城　　吉基

〈平成10～16年度（報告書作成）〉

三重県埋蔵文化財センター

主幹　泉　　雄二　　主査　森川　幸雄

技師　伊藤　裕偉　　穂積　裕昌　　原田恵理子

4．調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

5．発掘調査にあたっては、嬉野町（当時）在住の方々、嬉野町教育委員会（当時）、および県土整備部・津地方県民局久居建設部から多大な協力を受けたことを明記する。

6．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、赤塚次郎（㈶愛知県埋蔵文化財センター）、石黒立人（㈶愛知県埋蔵文化財センター）、伊勢野久好（一志町教育委員会）、伊藤克幸（鈴鹿市立合川小学校）、稲城信子（㈶元興寺文化財研究所）、井上洋一（東京国立博物館）、金子健一（㈶瀬戸市埋蔵文化財センター）、小玉道明（三重県史編纂専門委員）、小林　秀（三重県史編さん室）、佐原　眞（国立歴史民俗博物館）、鈴木とよ江（西尾市教育委員会）、鈴木正貴（愛知県埋蔵文化財センター）、関　秀夫（立正大学）、辻　登美雄（久居市教育委員会）、時枝　務（東京国立博物館）、春成秀爾（国立歴史民俗博物館）、藤澤典彦（大谷女子大学）、藤澤良祐（㈶瀬戸市埋蔵文化財センター）、藤田三郎（田原本町教育委員会）、山川公見子（立正大学考古学研究室）、和氣清章（嬉野町教育委員会）の各氏に有益なご教示をいただいた（所属は当時）。

7．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、調査研究Ⅰ・Ⅱグループが中心に行った。遺構と遺物の写真は調査担当者が撮影した。報告文の執筆は目次に記した。編集は、原田が行った。

凡　　例

〈地図類〉

１．本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1／25,000地形図、嬉野町都市計画図、天花寺丘陵東部測量図（三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』1996年所収）である。

２．これら地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地形による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

３．挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°40′、真北方位は西偏０°17′34″（平成10年）である。

〈遺構類〉

４．土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

５．土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄偏著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）を用いた。

６．当報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。

７．遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。

８．遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。

９．遺構番号の頭には、見た目の性格によって、凡そ以下の略記号を付けている。

ＳＢ……掘立柱建物　ＳＤ……溝・堀　ＳＨ……竪穴住居　ＳＫ……土坑

ＳＸ……墓　ＳＺ……土塁・落ち込み・不明遺構など　pit……ピット、柱穴

〈遺物類〉

10．当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

11．遺物実測図は、遺跡・調査次数毎でそれぞれまとめており、全体として通番ではない。

12．第４次調査の遺物実測図のうち、164～187、196～198、205・206は、三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ－２』2002（平成14）年で報告しているため、本書には掲載していない。

13．遺物観察表は、以下の要領で記載している。

報告書№…挿図掲載番号である。

実測№…実測段階の登録番号である。

器種…遺物の器種を示す。

器形…遺物の器形を示す。

グリッド…調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構№…遺物の出土した遺構や層名を記した。「ｐ」は土器、「ｓ」は石、「ｗ」は木の、それぞれ取り上げの際の区分記号である。

法量(㎝)…遺物の法量を示す。口径は口縁部径、底径は底部径、器高は遺物の高さを示す。欄内に記載された台は台部径、脚は脚部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や実測段階の「接地点」ではない。

調整・技法の特徴…主な特徴を内面（内：）・外面（外：）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示し、分子の数値のみ記した。６は約半分、全体が残っているものは完存と記した。口は口縁部、頸は頸部、底は底部、台は台部、脚は脚部、端は端部の各部位をそれぞれ示す。

特記事項…遺物の特徴となる事項を記した。

〈写真図版〉

14．挿図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図報告書番号と対応している。

15．遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査にかかる諸経過 ……原田 ‥(１)
　１　調査の経緯……(１)
　２　調査の経過と法的措置……(１)
　３　調査と記録の方法……(２)
　４　整理作業の方法……(２)
Ⅱ　層位と遺構 ……原田 ‥(５)
　１　調査区の基本層位……(５)
　２　検出した遺構……(５)
　　２－１　弥生時代……(５)
　　２－２　弥生時代～古墳時代……(18)
　　２－３　古墳時代……(19)
　　２－４　中世……(22)
Ⅲ　出土遺物……(42)
　１　縄文時代の土器 ……穂積 ‥(42)
　２　弥生時代の土器 ……原田 ‥(42)
　３　古墳時代・古代の土器 ……原田 ‥(46)
　４　中世の土器・陶器類 ……原田 ‥(47)
　５　金属製品 ……原田 ‥(47)
　６　石器・石製品 ……原田 ‥(52)
Ⅳ　まとめ ……原田 ‥(57)
　１　絵画土器について……(57)
　２　ＳＸ190の性格について ……(59)
　３　奈良時代の遺構について……(59)
　４　中世墓について……(59)

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺主要遺跡……（３）
第２図　調査区配置図……（４）
第３図　調査区北側土層図……（６）
第４図　遺構全体図……（７～８）
第５図　ＳＨ43平面図・断面図……（９）
第６図　ＳＨ45平面図・断面図……(10)
第７図　ＳＨ63平面図・土層断面図……(11)
第８図　ＳＨ114平面図・土層断面図……(12)
第９図　ＳＨ223平面図・土層断面図……(13)
第10図　ＳＨ244平面図・土層断面図……(14)
第11図　ＳＨ252平面図・土層断面図……(15)
第12図　ＳＨ269・270平面図・土層断面図……(16)
第13図　ＳＸ190平面図・土層断面図……(17)
第14図　ＳＸ24（小谷33号墳）平面図・断面図……(18)
第15図　ＳＸ39（小谷32号墳）平面図・断面図……(19)
第16図　ＳＸ140（小谷30号墳）平面図・土層断面図、埋葬施設平面図・立面図……(20)
第17図　ＳＸ139・ＳＸ186・ＳＸ250・ＳＸ255・ＳＸ257平面図・土層断面図・立面図……(21)
第18図　遺構全体図（中世）……(25～26)
第19図　ＳＸ113・ＳＸ117・ＳＸ125・ＳＸ129平面図・立面図……(27)
第20図　ＳＸ154・ＳＸ172平面図・立面図……(28)
第21図　集石５Ａ墓平面図・断面図……(28)
第22図　集石６付近平面図……(29)
第23図　集石７平面図……(30)
第24図　集石６Ａ墓・６Ｃ墓・７Ａ墓・７Ｂ墓・７Ｃ墓断面図……(31)
第25図　集石16平面図・土層断面図……(32)
第26図　集石22付近平面図……(33)
第27図　集石23平面図……(34)
第28図　集石22・23断面図……(35)
第29図　集石24Ａ墓平面図・断面図……(36)
第30図　集石28Ａ墓平面図・断面図……(36)
第31図　集石25・26・27・36付近平面図……(37)
第32図　集石31・33付近平面図……(38)
第33図　集石35付近平面図……(39)
第34図　集石25Ａ墓・27墓・31墓・33墓・35Ｃ墓断面図……(40)
第35図　ＳＤ41土層断面図……(40)
第36図　出土遺物実測図（縄文時代の土器）……(43)
第37図　出土遺物実測図（弥生時代の土器１）……(44)
第38図　出土遺物実測図（弥生時代の土器２）……(45)
第39図　出土遺物実測図（古墳時代・古代の土器）……(46)
第40図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類１）……(48)
第41図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類２）……(49)
第42図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類３）……(50)
第43図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類４）……(51)
第44図　出土遺物実測図（金属製品）……(52)
第45図　出土遺物実測図（石器・石製品１）……(53)
第46図　出土遺物実測図（石器・石製品２）……(54)
第47図　出土遺物実測図（石器・石製品３）……(55)
第48図　出土遺物実測図（石器・石製品４）……(56)

第49図　絵画土器画材配置図……(57)
第50図　中世墓変遷図……(60)
第51図　集石変遷模式図……(62)
第52図　集石分類図……(72)
付図１　天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第４次）中世墓（集石）平面図【北半部】
付図２　天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第４次）中世墓（集石）平面図【南半部】

表　目　次

第１表　中世墓変遷表……(63)
第２表　遺構一覧表１～６……(65～70)
第３表　集石一覧表１・２……(71・72)
第４表　遺物観察表（土器・陶器）１～７……(73～79)
第５表　遺物観察表（金属製品）……(79)
第６表　遺物観察表（銭貨）……(79)
第７表　遺物観察表（石器・石製品）……(80)

写　真　図　版

巻　頭　小谷赤坂遺跡と絵画土器（合成）
図版１　調査前風景（北東から）
　　調査区から北東方向を望む
図版２　調査区北半完掘状況（西から）
　　調査区南半完掘状況（西から）
図版３　調査区北半中世墓検出状況（南から）
　　調査区南半中世墓検出状況（西から）
図版４　縄文土器出土状況（西から）
　　ＳＨ45（東から）　ＳＨ63（北から）
　　ＳＨ114北西部遺物出土状況（西から）
　　ＳＨ114（北西から）
図版５　ＳＨ223（北から）
　　ＳＨ223北西主柱穴遺物出土状況（西から）
　　ＳＨ43（東から）　ＳＨ269（西から）
　　ＳＨ270（東から）
図版６　ＳＸ39（小谷32号墳）（北から）
　　ＳＸ140（小谷30号墳）埋葬施設（南西から）
　　ＳＸ250（西から）
　　ＳＸ257（西から）　ＳＸ186（北から）
図版７　ＳＸ117（南から）　ＳＸ113（南から）
　　ＳＸ125（南から）　ＳＸ129（南から）
　　ＳＸ154（西から）
図版８　集石５（西から）
　　集石６・７（東から）
図版９　集石６・７（北から）
　　集石６Ｃ断面（東から）
　　集石７Ｃ断面（西から）
　　集石12・13（東から）　ＳＸ181（東から）
図版10　集石16（北から）集石22（西から）
図版11　集石22（東から）集石22Ｂ墓（南から）
　　集石24Ａ墓（北から）
　　集石35Ａ・Ｂ墓（東から）
　　集石35内古銭出土状況（北から）
図版12　集石28（東から）　集石33（南から）
図版13　出土遺物（１）
図版14　出土遺物（２）
図版15　出土遺物（３）
図版16　出土遺物（４）
図版17　出土遺物（５）
図版18　出土遺物（６）
図版19　出土遺物（７）
図版20　出土遺物（８）
図版21　出土遺物（９）
図版22　出土遺物（10）
図版23　出土遺物（11）
図版24　出土遺物（12）
図版25　出土遺物（13）

Ⅰ　調査にかかる諸経過

１　調査の経緯

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡は近鉄中川駅から西方約1.5㎞の三重県松阪市嬉野天花寺町に所在し、天花寺丘陵上に立地する。この丘陵の東側裾部に沿って南北方向に県道松阪久居線（24号線）が通っている。この丘陵の北側を県道松阪一志線（58号線）が、また南側を県道嬉野美杉線（30号線）がそれぞれ東西方向に走り、朝夕の通勤時には北へ久居市、南へ松阪市、東進して国道23号を経由し津方面・伊勢方面へ向かう車で賑わっている。

しかし、県道24号線が県道58号線と県道30号線でほぼ直交する約2.5㎞の区間は、一部を除いて道路幅が非常に狭く、自動車が対向することが困難な程であった。にもかかわらず、周辺の幹線道路が混雑するに伴って、いわゆる「抜け道」としても利用され、交通量が増加し、非常に危険な状態であった。

また、平成８年３月、遺跡の西方約１㎞に一志嬉野インターチェンジが開通し、さらに交通量が増加し、その分危険度が増していた。

そこで、県道24号線と県道58号線の交わる宮古西交差点以南の道路幅の狭い個所、地形に沿って蛇行した個所を整備するとともに一志嬉野インターチェンジへの最短道の整備計画が挙げられた。

天花寺丘陵上及びその周辺には多数の遺跡・古墳が確認されている[1]（３ページ第１図参照)。当調査区付近でも詳細遺跡分布調査で小谷古墳群の墳丘や天花寺城跡に伴うと思われる土塁や堀などが確認されている[2]。第１次調査区の西側から北側にかけて嬉野町教育委員会による試掘調査が行われて遺構が確認されている[3]こと、第１次調査区で弥生時代から奈良時代の集落跡・古墳の周溝・中世墓・天花寺城に伴うと思われる遺構等が確認された[4]ことから、隣接する今回の調査区にも遺跡が広っていることが明白であったため、当調査区内では試掘調査は実施せず、そのまま発掘調査となった。

今回の調査区は県道松阪一志線と県道天花寺一志嬉野インター線の交差点にあたる個所であり、一般地方道天花寺一志嬉野インター線緊急地方道道路整備改良事業に伴う事前調査として、発掘調査を行った。

２　調査の経過と法的措置

今回の調査区は、平成７年度に行われた第１次調査区の西隣にあたる。第１次調査区で中近世の火葬墓や集石墓、集石群が確認されていた。また調査前の現地は木や竹が生茂る林であり、これらの木・竹を伐採すると、若干高くなっている個所や一部に拳大の礫の見られる個所があった。以上の状況から事前に中世墓の存在が想定された。また、現状として第１次調査で報告された土塁（ＳＺ１）の続きも確認していたため、中世墓想定部分と土塁を除いた約500㎡のみ小型の重機で表土掘削を行い、あとは人力での掘削を行った。平成９年５月下旬には重機による表土掘削が行われ、６月10日より作業員が入っての調査となった。

人力で表土の掘削にとりかかるとすぐに礫が顔を出し、約700㎡に渡って集石を確認した。当初は集石墓と捉え検出・実測を進めたが、調査途中で集石の一部に礫石経も含まれていたことが判明した。最終的には礫石経を埋納した土坑も53基確認し、日々図面作成・礫石経取り上げに追われ、調査は難航した。調査途中の10月18日には現地説明会を行い、地域の方々を中心に200人の参加を得た。集石墓・礫石経埋納土坑等の調査を終え、集石・礫石経を除去したのが、11月下旬である。

その後、引き続き遺構検出・掘削作業にとりかかった。

当初の調査期間は９月末までであったが、結果的には平成10年２月27日に調査終了となった。調査面積は集石部分700㎡、集石除去後2,800㎡で、計3,500㎡である。

さらに、平成10年１月20日には竪穴住居跡（ＳＨ224）で絵画土器を確認し、現地での調査終了後ではあるものの、同年３月12日～29日までの16日間、斎宮歴史博物館エントランスホールにて絵画土器の

展示公開を行った。

文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成７年８月10日付道建第825号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成９年５月６日付教文第952号（県教育長報告）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成10年３月30日付教文第６－114号（県教育長通知）

３　調査と記録の方法

ａ　土工部門の委託

調査をすすめるにあたり、調査への迅速な対応を可能にし、労務管理の軽減化を図るために土工部門を(財)三重県農業開発公社に委託した。

ｂ　小地区の設定

４m四方で地区を設定し、北から南へアルファベットのａ・ｂ・ｃ…、西から東へ数字の１・２・３…と地区名を付けている。本調査区は、第１次調査区と隣接するため、小地区の設定及び地区名を第１次調査と揃えている。なお、これらの小地区は国土座標軸とは無関係である。

ｃ　中世墓の遺構名について

中世墓の調査は、上部施設である集石の範囲確認後、区画が認められる箇所は埋葬施設の確認を行った。その後集石を除去した段階で再度検出を行ったところ、さらに多くの埋葬施設（墓壙）を確認した。そのため、集石と墓壙の関連が明確なものを「集石＊■墓」とし、集石の範囲を＊に数字で、一集石内でさらに区画が認められるものを■にアルファベットで表記した。また、集石除去後に検出し、集石と墓壙の関連が捉えられなかったものをＳＸとし、同時期の墓でありながら２種の表記方法となっている。

ｄ　図面の作成

基本的に手書き1/20で作成しているが、集石群の検出状況、遺物の出土状況図は1/10、古墳などのコンター図は1/50で作成した。

ｅ　写真の撮影

基本的には、35m/mのモノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルムを使用している。遺構全体の写真、一部の個別遺構写真については、併せて６×９サイズでの撮影を行っている。集石及び礫石経埋納土坑の検出状況の空中写真撮影は、(株)イビソクに委託し、平成９年10月７日に産業用ラジコンヘリで写真撮影を行った。

４　整理作業の方法

ａ　出土礫石経について

今回の調査で出土した礫石経埋納土坑は計53基、礫石経の総出土点数は35,047点にものぼった。これら礫石経の文字の解読を(財)元興寺文化財研究所に委託した[5]。そのうち、文字の記載が確認できなかった17,651点は、嬉野町教育委員会により天華寺の敷地内に設置された看板前に置かれている。

〔註〕

⑴　この周辺の歴史的環境については、本報告書には掲載しないが、以下の報告書に詳細に記述されている。これらの報告書を参照されたい。
ａ『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年
ｂ『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告～一志郡嬉野町天花寺所在、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡の調査～』　三重県埋蔵文化財センター　1996年
ｃ『天花寺北瀬古遺跡(第１次)薬師寺北裏遺跡発掘調査報告書－一志郡嬉野町天花寺・一志所在遺跡の調査－』　三重県埋蔵文化財センター　1999年
ｄ『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告～天花寺城跡・小谷赤坂遺跡(第５次)／清水谷遺跡(第３次)の調査～』　三重県埋蔵文化財センター　2000年
ｅ『天花寺北瀬古遺跡(第２次)発掘調査報告－三重県一志郡嬉野町－』　三重県埋蔵文化財センター　2001年

⑵　詳細遺跡分布調査は昭和62・63年度に実施され、『一志郡嬉野町嬉野町遺跡地図』　嬉野町教育委員会　1989年　で報告されている。さらに平成７年度の天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第１次）調査の前後に測量調査が行われ、詳細図面は前掲註⑴ｂに所収されている。

⑶　『嬉野町埋蔵文化財調査概要　平成元年度』嬉野町教育委員会　1990年

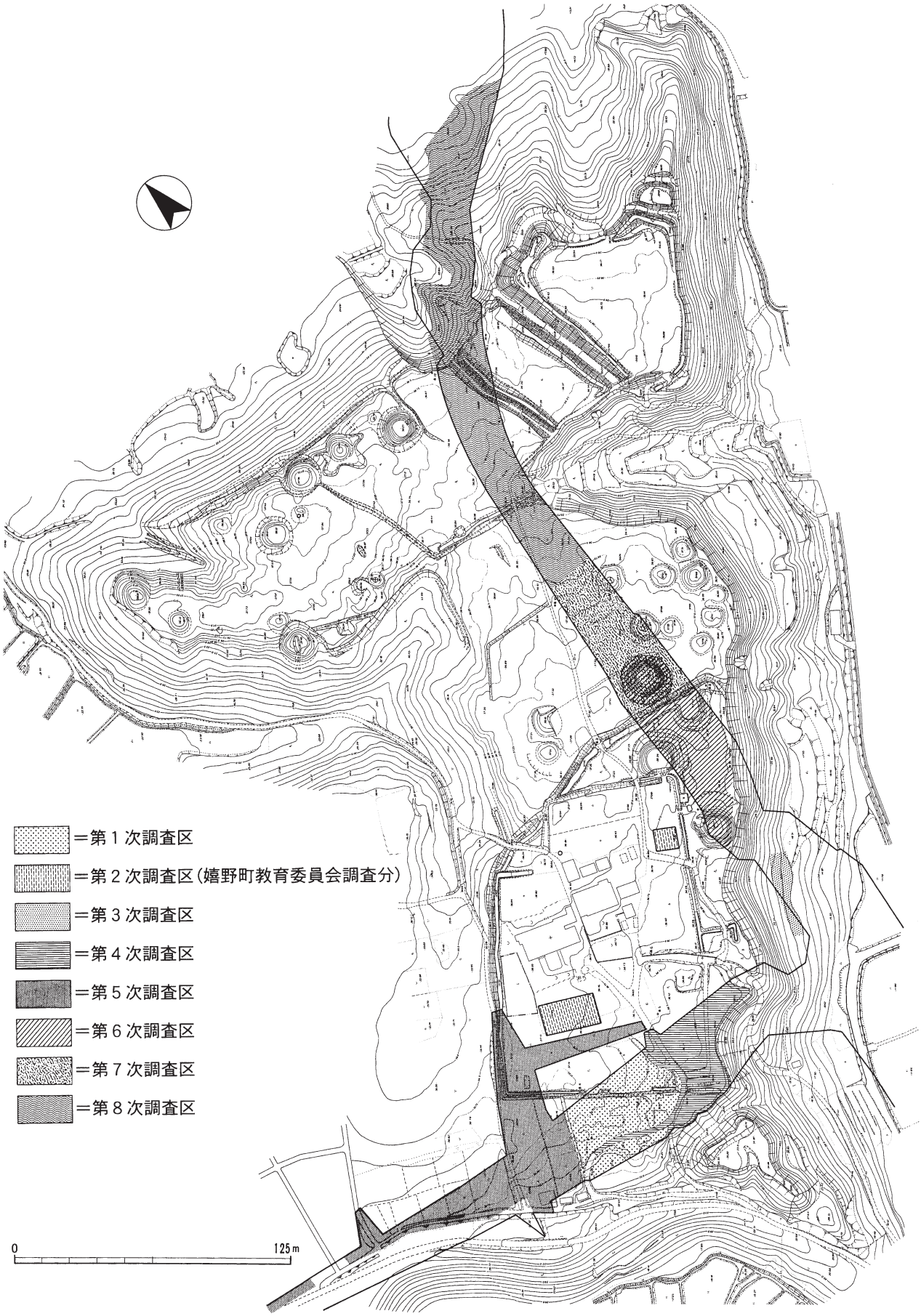
⑷　前掲註⑴ｂ

⑸　礫石経については、解読結果も含めて『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ－２　天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第４次）～近世・礫石経編～』三重県埋蔵文化財センター　2002年　に所収。なお、解読に基づいた考察を(財)元興寺文化財研究所　稲城信子氏より頂戴し、同報告書の付編に掲載しているので、詳細はこちらを参照されたい。

1．小谷赤坂遺跡　2．清水谷遺跡　3．馬ノ瀬遺跡　4．天花寺北瀬古遺跡　5．薬師寺北裏遺跡　6．蛇亀橋遺跡　7．焼野遺跡
8．天保遺跡　9．郡一遺跡　10．上野垣内遺跡　11．島田遺跡　12．井之上遺跡　13．閉垣内遺跡　14．弥五郎垣内遺跡
15．釜生田遺跡　16．天白遺跡　17．辻垣内瓦窯跡群　18．八田遺跡　19．堀之内遺跡　20．御所垣内遺跡　21．下之庄遺跡
22．中尾垣内遺跡　23．下之庄東方遺跡　24．嬉野遺跡　25．山神田遺跡　26．田村西瀬古遺跡　27．竜王野遺跡　28．高くね遺跡
29．荒野遺跡　30．松葉遺跡　31．天王垣内遺跡　32．庵ノ垣内遺跡　33．川北清水遺跡　34．片部遺跡　35．黒田遺跡
36．野田遺跡　37．貝蔵遺跡　38．五反田遺跡　39．六反田遺跡　40．針箱遺跡　41．一色垣内遺跡　42．里前遺跡　43．堀田遺跡
44．天花寺瓦窯跡　45．平生遺跡　46．片野遺跡　47．鳥居本遺跡　48．木造赤坂遺跡　49．貝鍋遺跡　50．唐木垣内遺跡
51．田尻上野遺跡　52．下名倉遺跡
A.西山１号墳　B.筒野１号墳　C.錆山古墳　D.上野１号墓　E.向山古墳　F.庵ノ門１号墳　G.片野池古墳群　H.西野古墳群
I.小山古墳群　J.中野山古墳群　K.西出山古墳群　L.ヒジリ谷古墳群　M.薬師谷古墳群　N.上野山古墳群　O.上野山狐塚古墳群
P.下名倉古墳群　Q.高寺廃寺　R.八太廃寺　S.天花寺廃寺　T.中谷廃寺　U.一志廃寺　V.上野廃寺　W.嬉野廃寺
a.天花寺城　b.八田城　c.釜生田城　d.森本城　e.滝之川城　f.須賀城および積善寺跡　g.木造城　h.川方城　i.八太城　j.小山城
k.長谷城　l.片野館跡

＝前方後方墳・前方後円形墳墓　　◉＝古代寺院跡　　■＝中世城館跡

第１図　調査地周辺主要遺跡（Ｓ＝1：50,000）（国土地理院　1：25,000「大仰」より）



第２図　調査区配置図（Ｓ＝１：2,500）（『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』付図１：1,000を一部改変）

Ⅱ　層位と遺構

１　調査区の基本層位

遺構検出面は明赤褐色系土で、部分的に礫を含む。その上面に黄褐色系土が10～20㎝程度堆積し、さらにその上へ表土が数㎝堆積する。

黄褐色系土の堆積状況は調査区中央西寄りで厚く、調査区南側（ＳＤ２以南）で薄い傾向にある。南側の堆積が薄い状況は、第１次調査区と同様であり、土塁ＳＺ１及び溝ＳＤ２の掘削に伴う南側の削平が推察される[1]。このことは程度差ではあるものの、南側でも集石墓の残存度が良好であった東側では若干厚く、ほとんど集石の残存していなかった西側では薄かったことからも窺える。

２　検出した遺構

２－１　弥生時代

竪穴住居ＳＨ43(第５図)　調査区南東部で検出した。第１次調査で確認した続きで、住居の北東部約1/4を調査し、完掘した。北東に位置する主柱穴も確認した。

竪穴住居ＳＨ45(第６図)　調査区西端で検出した。第１次調査で確認した続きで、住居の南西部約1/6を調査し、完掘した。規模は東西5.2m×南北4.9mである。住居の南辺ほぼ中央で貯蔵穴を確認した。貯蔵穴は、床面より約20㎝下がって一旦平面となってから更に約40㎝落ち込んでいる。南西隅の主柱穴は確認できなかった。また、住居の北辺から南へ約50㎝、壁周溝が突出していたのが確認されていたが、住居の南辺からはそれに対応するものは確認できなかった。

竪穴住居ＳＨ63(第７図)　調査区ほぼ中央で検出した。第１次調査で西半部が確認されており、今回の調査でその続きを検出した。規模は長辺4.8m、短辺４mである。住居跡南東隅は水道管で削平されているが、検出面から床面までの深さ約40㎝と残りは比較的良好であった。主柱穴は東西方向に２ヶ所、貯蔵穴は南側中央に確認した。床面は壁周溝がほぼ一周する。なお、主柱穴が２ヶ所のみで構成されるものは今までの調査を含めても、この１棟だけである。

竪穴住居ＳＨ114（第８図）　調査区南側で検出した。規模は長辺5.6m、短辺4.8mである。一部、中世の土壙墓で削平されるが、検出面から床面までの深さは約40㎝で残りは良好である。４基の主柱穴を確認し、その中央やや西よりに炉跡が位置する。東辺やや南よりに貯蔵穴に相当する土坑が位置するが、規模が小さく、中に大小の礫が詰まっており、他の住居跡の貯蔵穴とは様相が異なる。壁周溝はほぼ全周している。

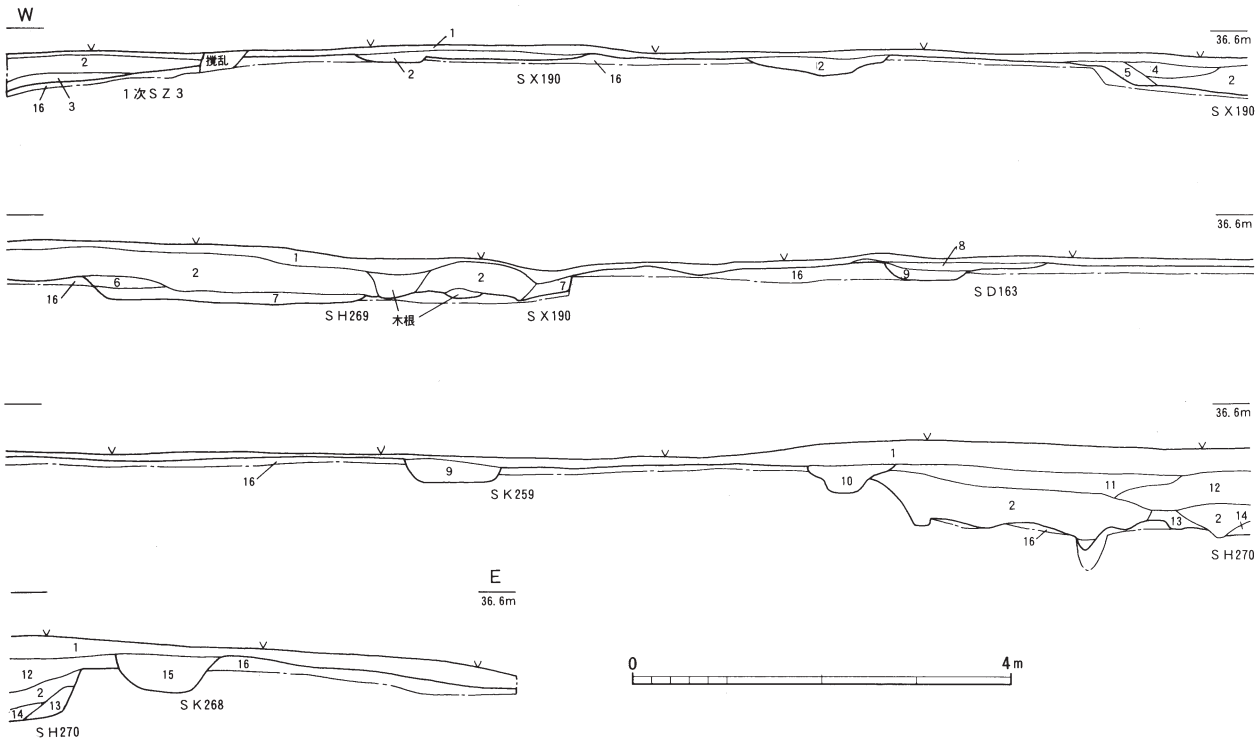
竪穴住居ＳＨ223（第９図）　調査区東側で検出した。規模は長辺5.5m、短辺4.8mで、検出面からの深さは約30㎝である。４基の主柱穴を確認し、南側中央部に貯蔵穴が位置する。炉跡は確認できなかった。壁周溝は南側で一部途切れるものの、ほぼ全周している。

竪穴住居ＳＨ244（第10図）　調査区中央やや北寄りで検出した。西半部はＳＸ190により削平を受け、主柱穴部分しか残存していない。主柱穴は４ヶ所確認し、さらに柱の並びから、南北方向に棟持柱を持つようである。しかし、方形のプランをもつ竪穴住居に棟持柱がつくものは類例をみない。南側中央部に貯蔵穴が位置している。炉跡は検出されなかったが、ＳＸ190によって削平された可能性がある。

竪穴住居ＳＨ252（第11図）　調査区中央やや北寄りで検出した。5.8m×5.8mの不定方形である。南側に壁周溝を確認しただけで、主柱穴・貯蔵穴・炉跡ともに検出されなかった。竪穴住居跡としたものの、他の竪穴住居跡との状況が異なるため、断定しかねる遺構である。

竪穴住居ＳＨ269（第12図）　調査区北辺で確認した。住居跡の南西部分のみ検出し、あとは調査区外へ広がっていた。主柱穴１ヶ所と貯蔵穴を確認した。主柱穴の位置から、４本柱であると推定される。壁周溝は西側と南側の一部で確認した。

竪穴住居ＳＨ270（第12図）　調査区北西側で確認し

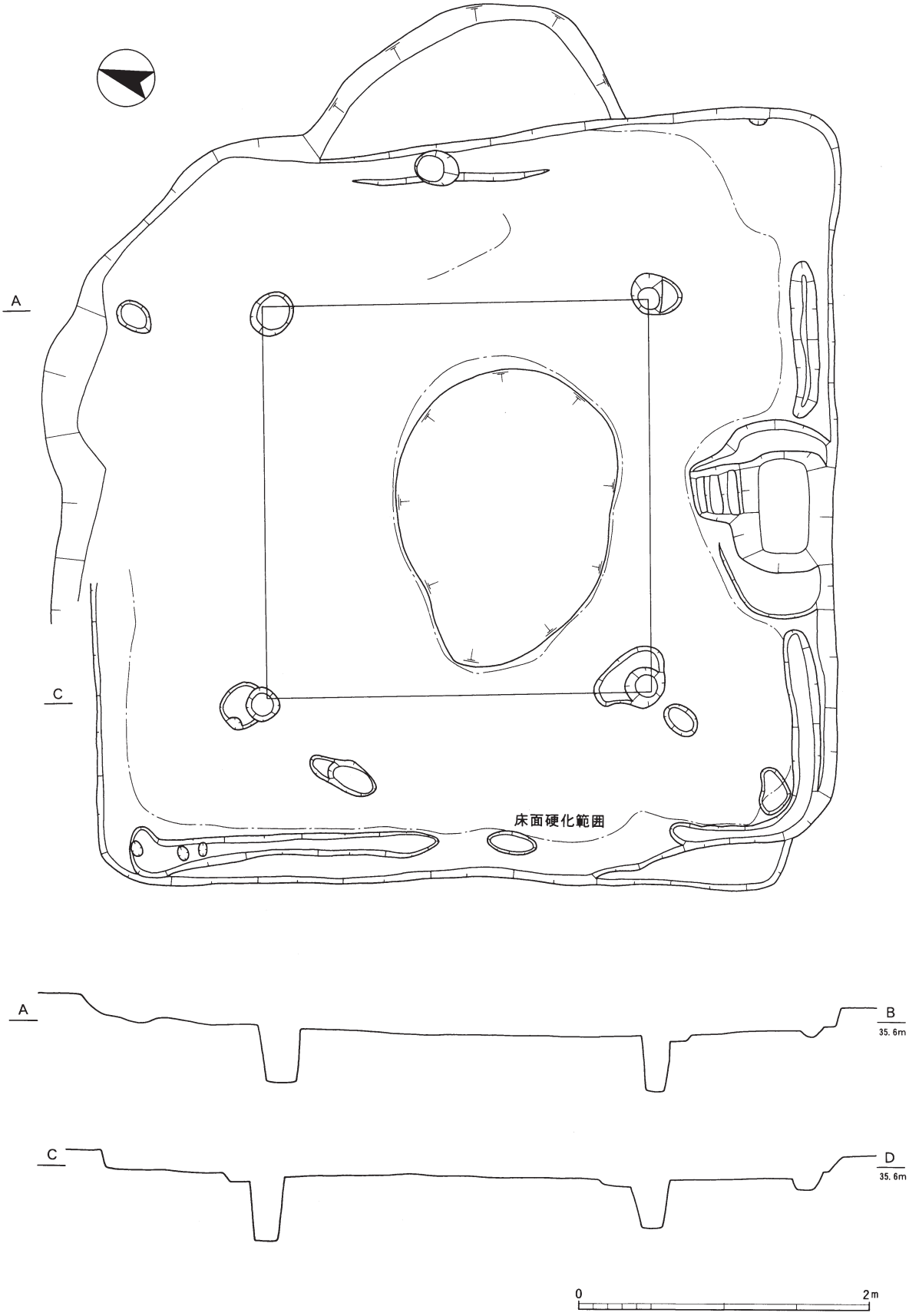


1　表土
2　黒褐色粘質土
3　明赤黄褐色粘質土に２が混入
4　黄褐色弱粘質土
5　暗黄褐色粘質土
6　淡黒褐色粘質土
7　黄褐色粘質土に細礫が混入
8　褐色粘質土
9　灰褐色粘質土
10　黄褐色粘質土
11　明褐色粘質土（色は12よりやや暗い）
12　明褐色弱粘質土
13　暗黄褐色粘質土
14　13に焼土が多く混入
15　明黄褐色粘質土
16　明赤灰褐色粘質土（地山）

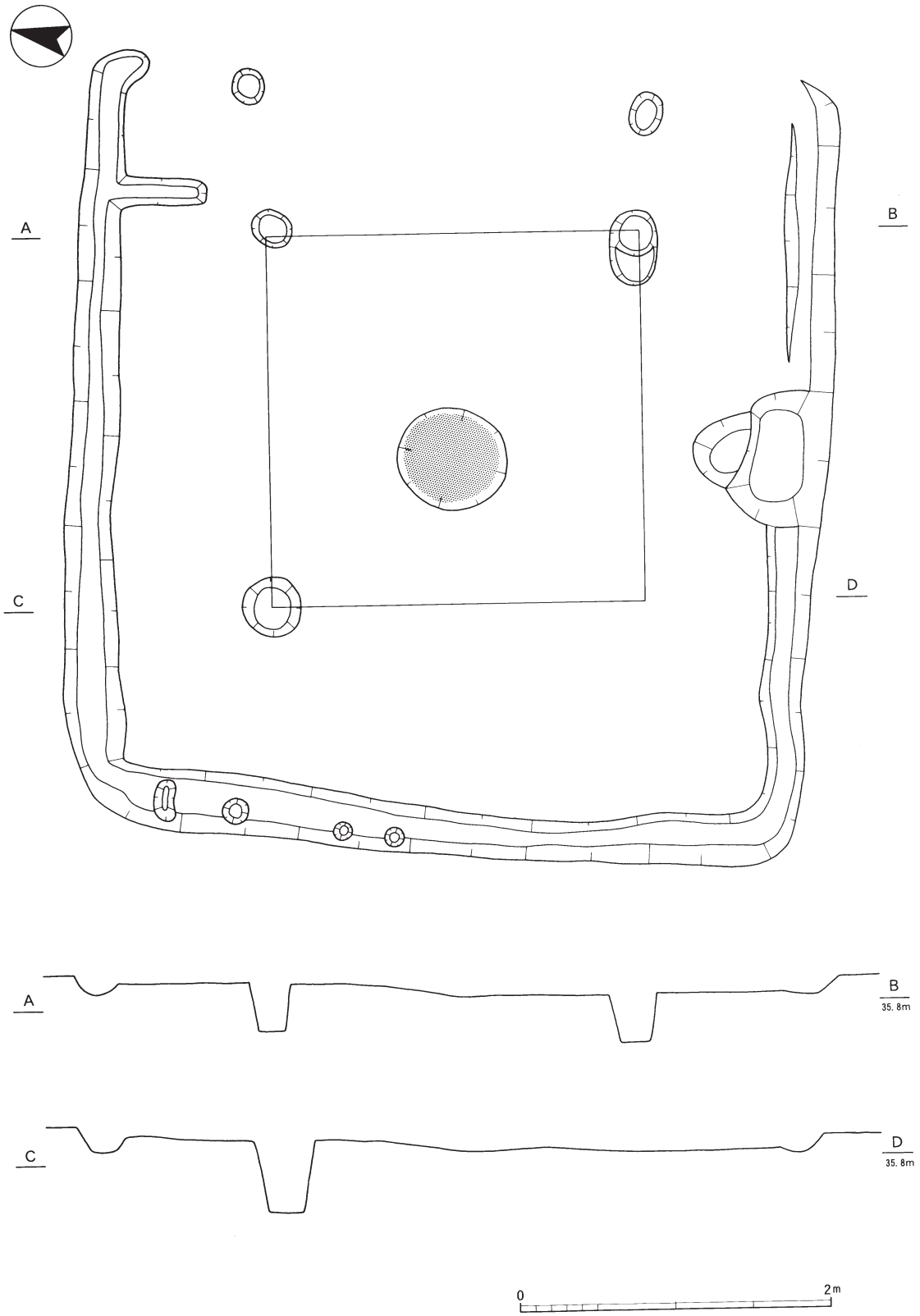
第３図　調査区北側土層図（Ｓ＝１：80）

※ 中世墓の遺構番号は25～26ページ第18図を参照。
※ ピット番号は数字のみ示した。

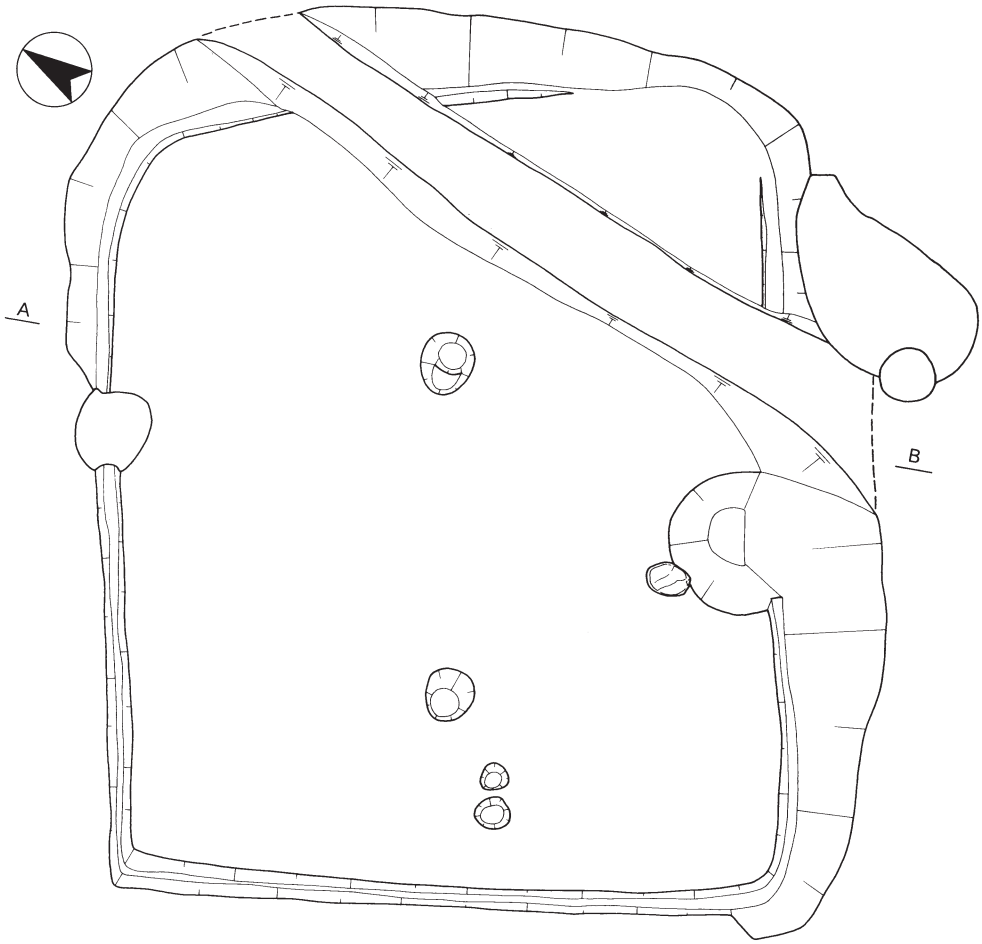
第４図　遺構全体図（Ｓ＝１：200）

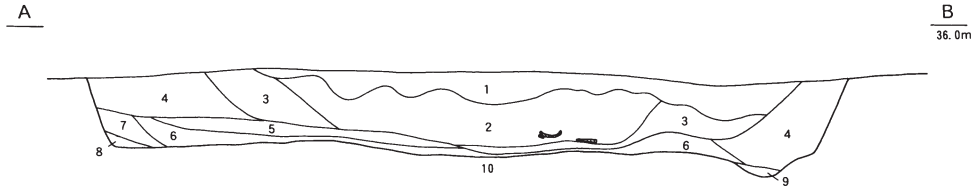


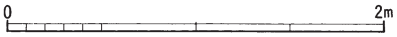
第５図　ＳＨ43平面図・断面図（Ｓ＝１：40）



第６図　ＳＨ45平面図・断面図（Ｓ＝１：40）

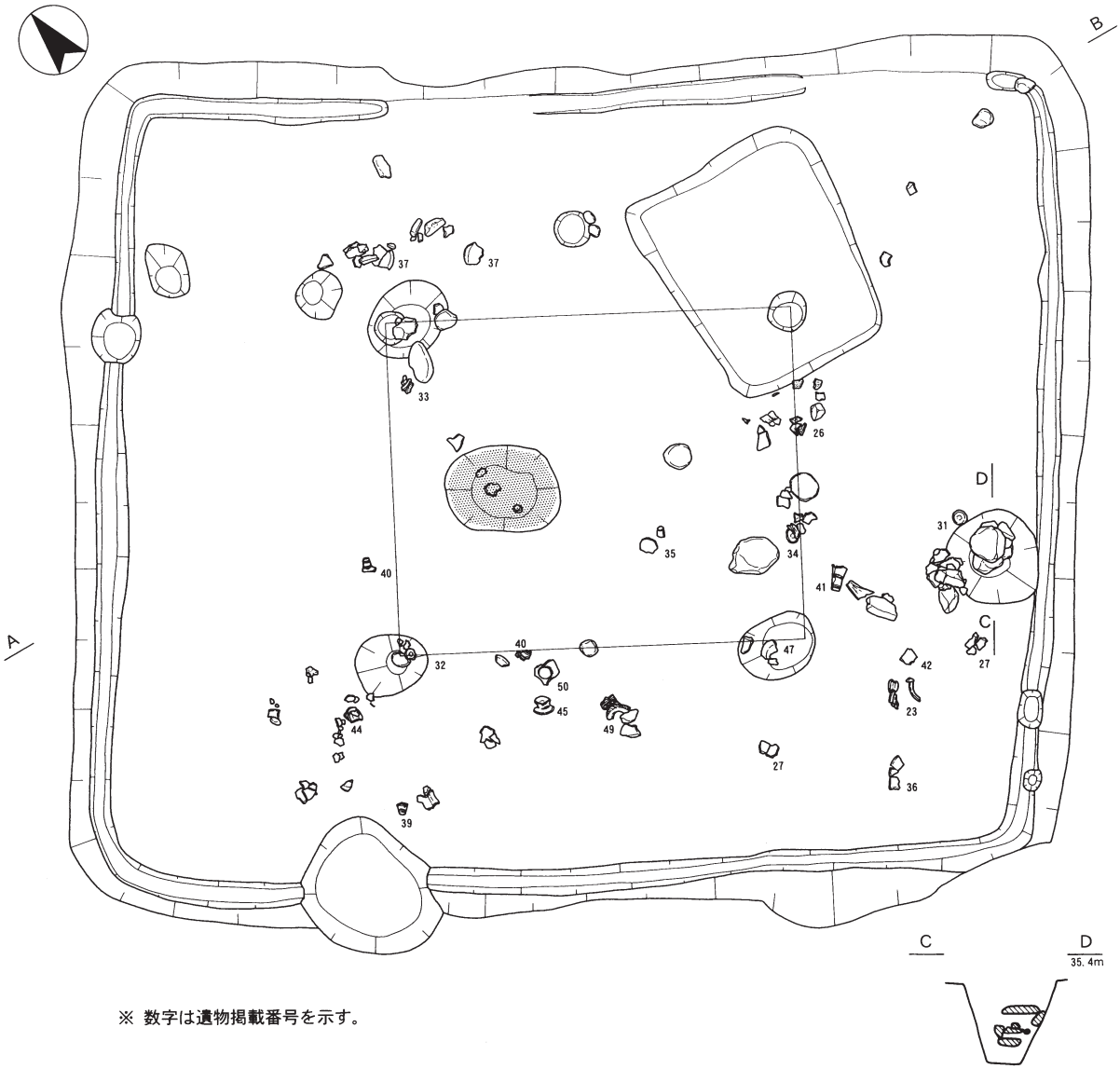




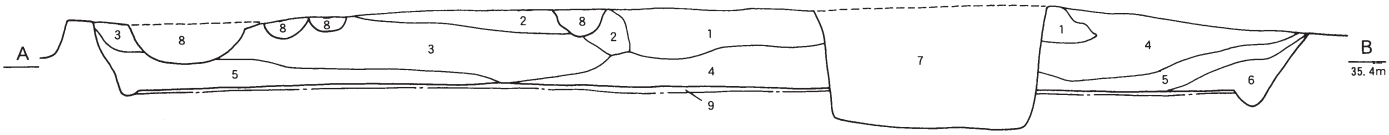


1　暗褐色粘質土
2　黒褐色粘質土（遺物片多く含む）
3　黒褐色粘質土に10地山土がわずかに混入
4　黒褐色粘質土に10地山土が多く混入
5　黒褐色粘質土に10の小ブロックが混入
6　黒褐色粘質土に10の中ブロックが混入
7　黒褐色粘質土に10地山土が少量混入
8　灰褐色粘質土
9　灰褐色粘質土に10地山土が多く混入
10　明黄灰色粘質土（地山）

第７図　ＳＨ63平面図・土層断面図（Ｓ＝１：40）

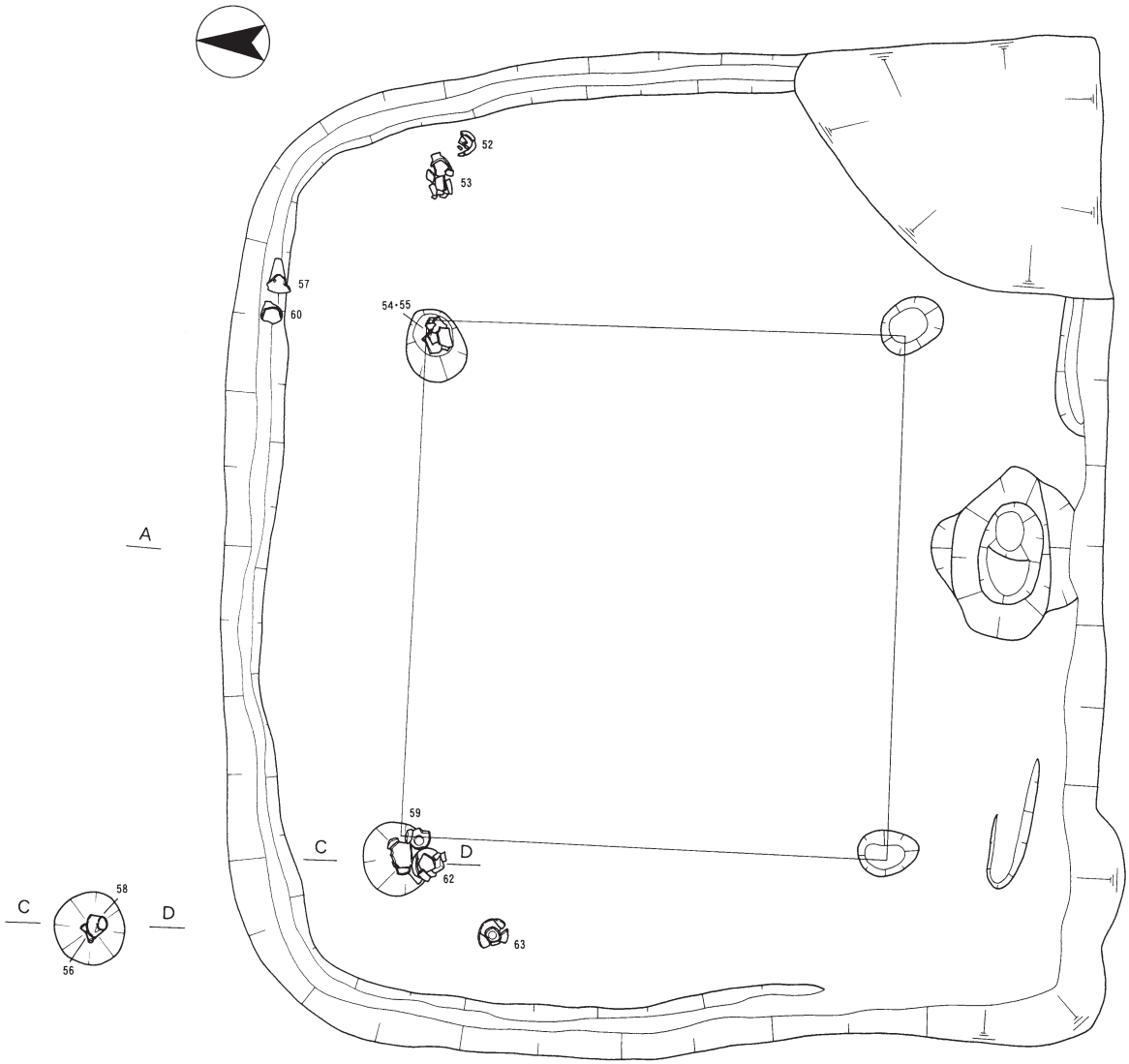


※ 数字は遺物掲載番号を示す。

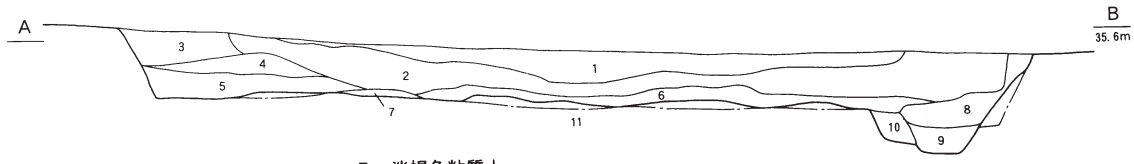


1　黒褐色粘質土に暗黄褐色粘質土が混入
2　暗褐色粘質土に暗黄褐色粘質土が混入
3　黒褐色粘質土
4　暗黄褐色粘質土
5　暗褐色粘質土に炭がわずかに混入
6　暗赤褐色粘質土
7　暗黄褐色粘質土に黒褐色粘質土が混入（ＳＸ117埋土）
8　明赤褐色粘質土（ＳＸ127埋土）
9　明黄灰色粘質土（地山）

第８図　ＳＨ114平面図・土層断面図（Ｓ＝１：40）

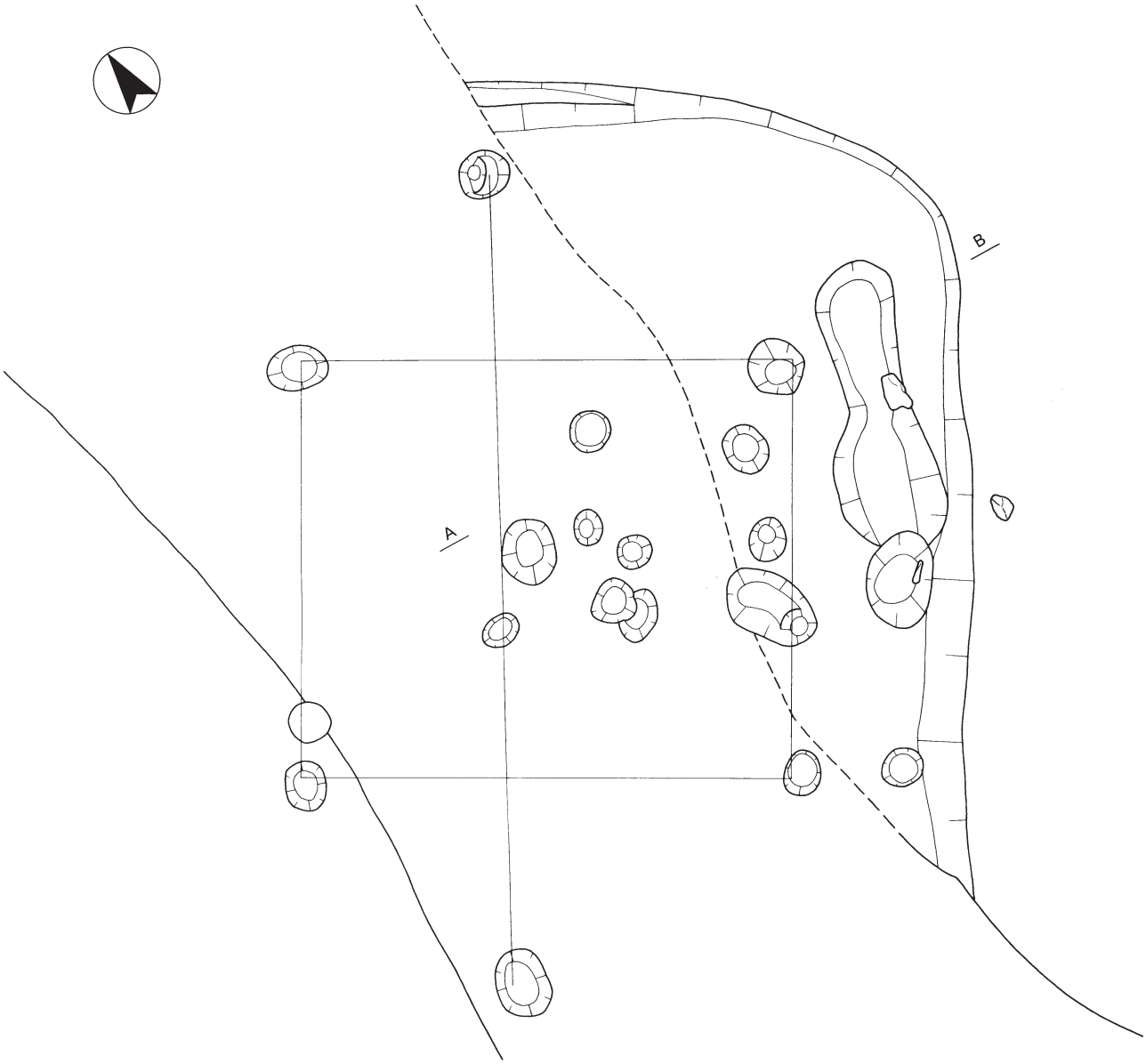


※ 数字は遺物掲載番号を示す。



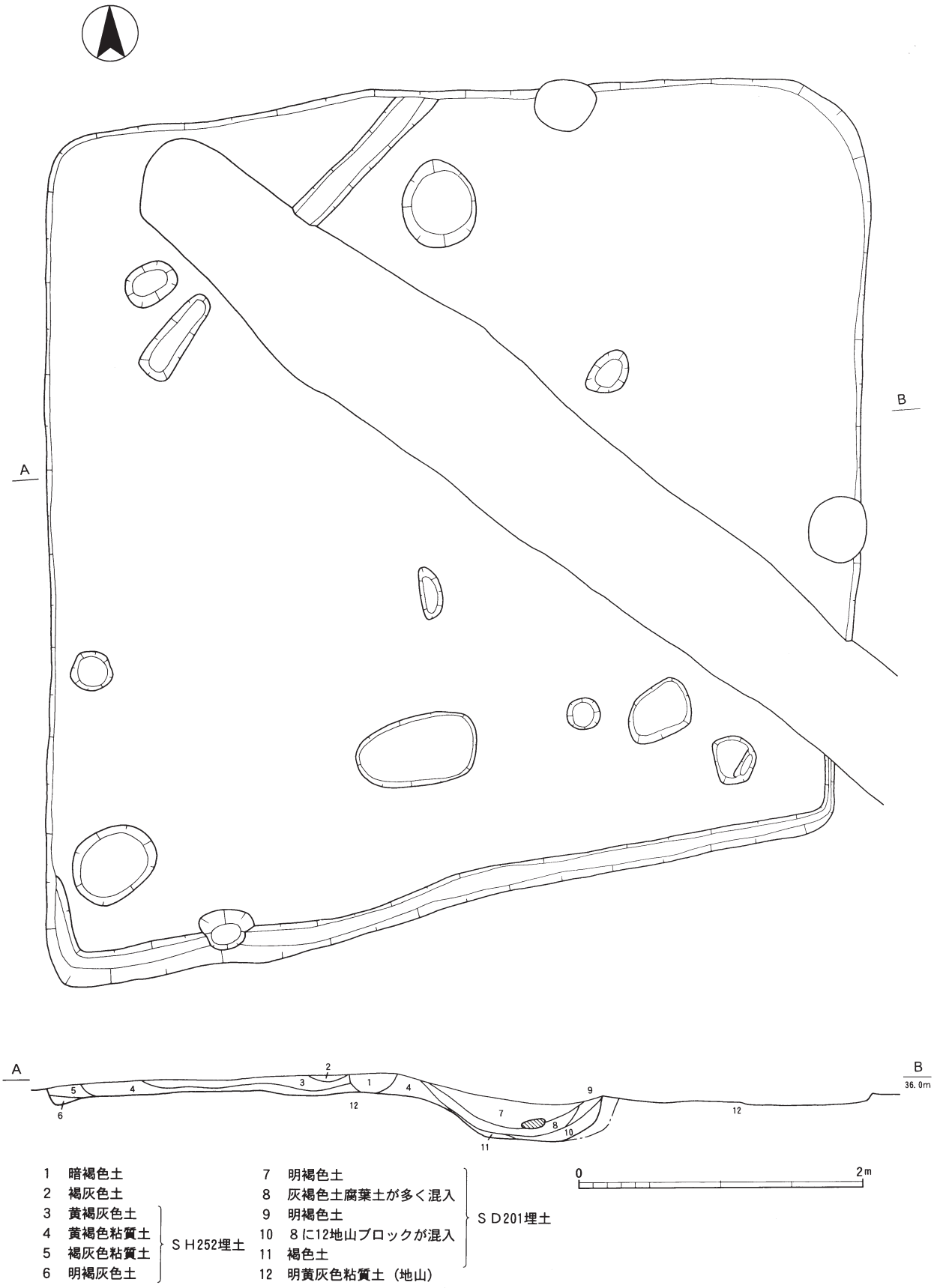
1　黒色粘質土
2　黒褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　暗褐色粘質土（3より暗い）
5　暗褐色粘質土
6　暗褐色粘質土（3より明るい）
7　淡褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　暗褐色粘質土
10　黒褐色粘質土
11　明黄灰色粘質土（地山）

第９図　ＳＨ223平面図・土層断面図（Ｓ＝１：40）



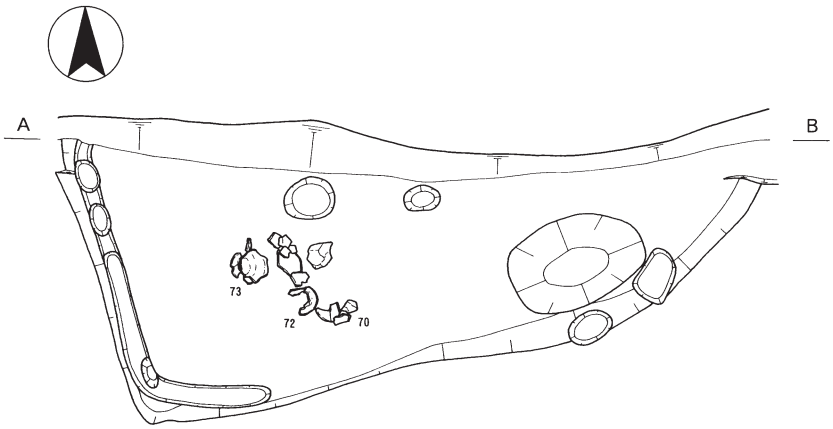
1　暗褐色粘質土
2　１に９地山ブロックが混入　｝ＳＸ190埋土
3　９に１が混入
4　９に１がわずかに混入
5　褐灰色粘質土
6　５に９が多く混入　｝ＳＨ244埋土
7　５に９地山ブロックが混入
8　９に６がわずかに混入
9　明黄灰色粘質土（地山）

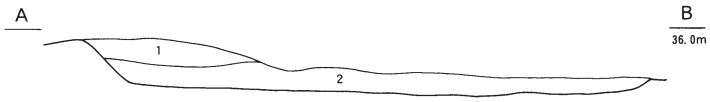
第10図　ＳＨ244平面図・土層断面図（Ｓ＝１：40）



第11図　ＳＨ252平面図・土層断面図（Ｓ＝１：40）

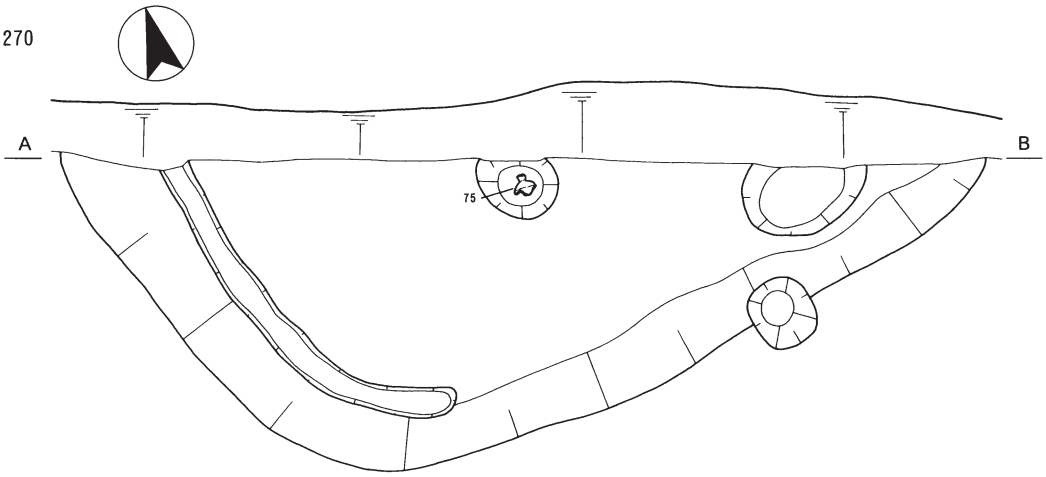
ＳＨ269

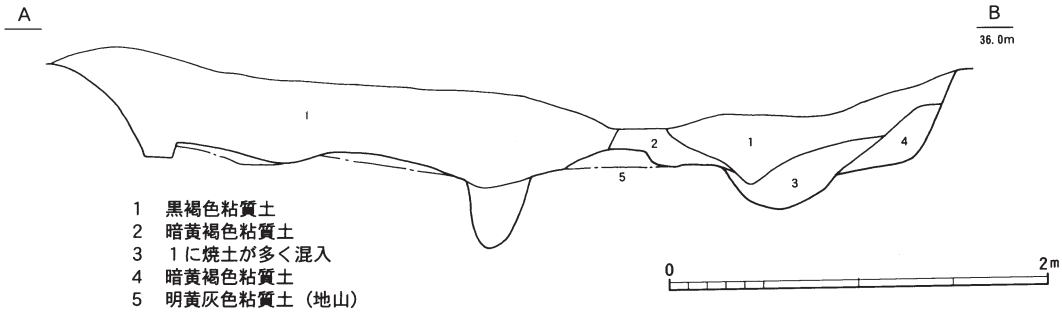




1　淡黒褐色粘質土
2　黄褐色粘質土に細礫が混入

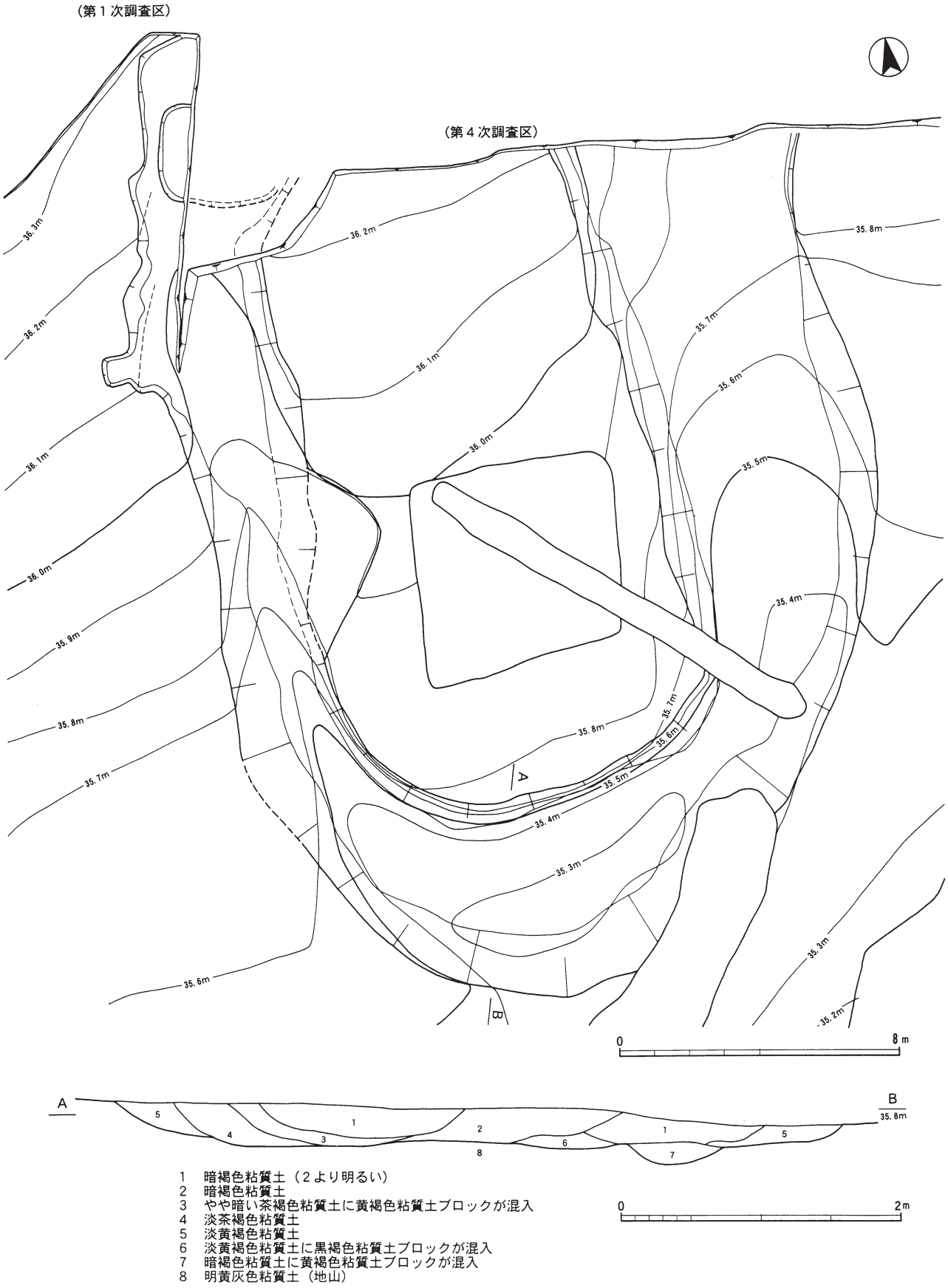
ＳＨ270



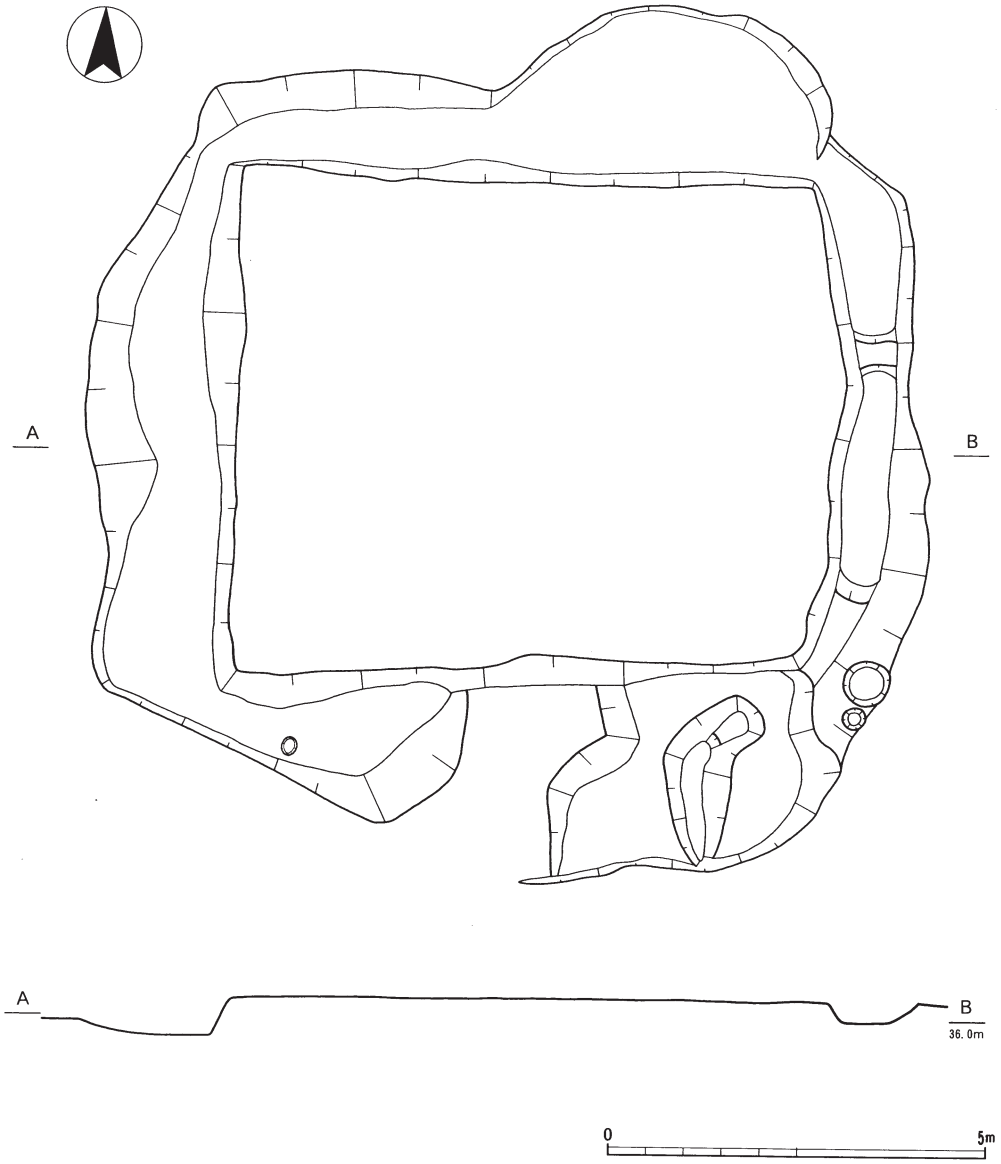


1　黒褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土
3　１に焼土が多く混入
4　暗黄褐色粘質土
5　明黄灰色粘質土（地山）

第12図　ＳＨ269・270平面図・土層断面図（Ｓ＝１：40）



第13図　ＳＸ190平面図（Ｓ＝１：160）・土層断面図（Ｓ＝１：40）



第14図　ＳＸ24（小谷33号墳）平面図・断面図（Ｓ＝１：100）

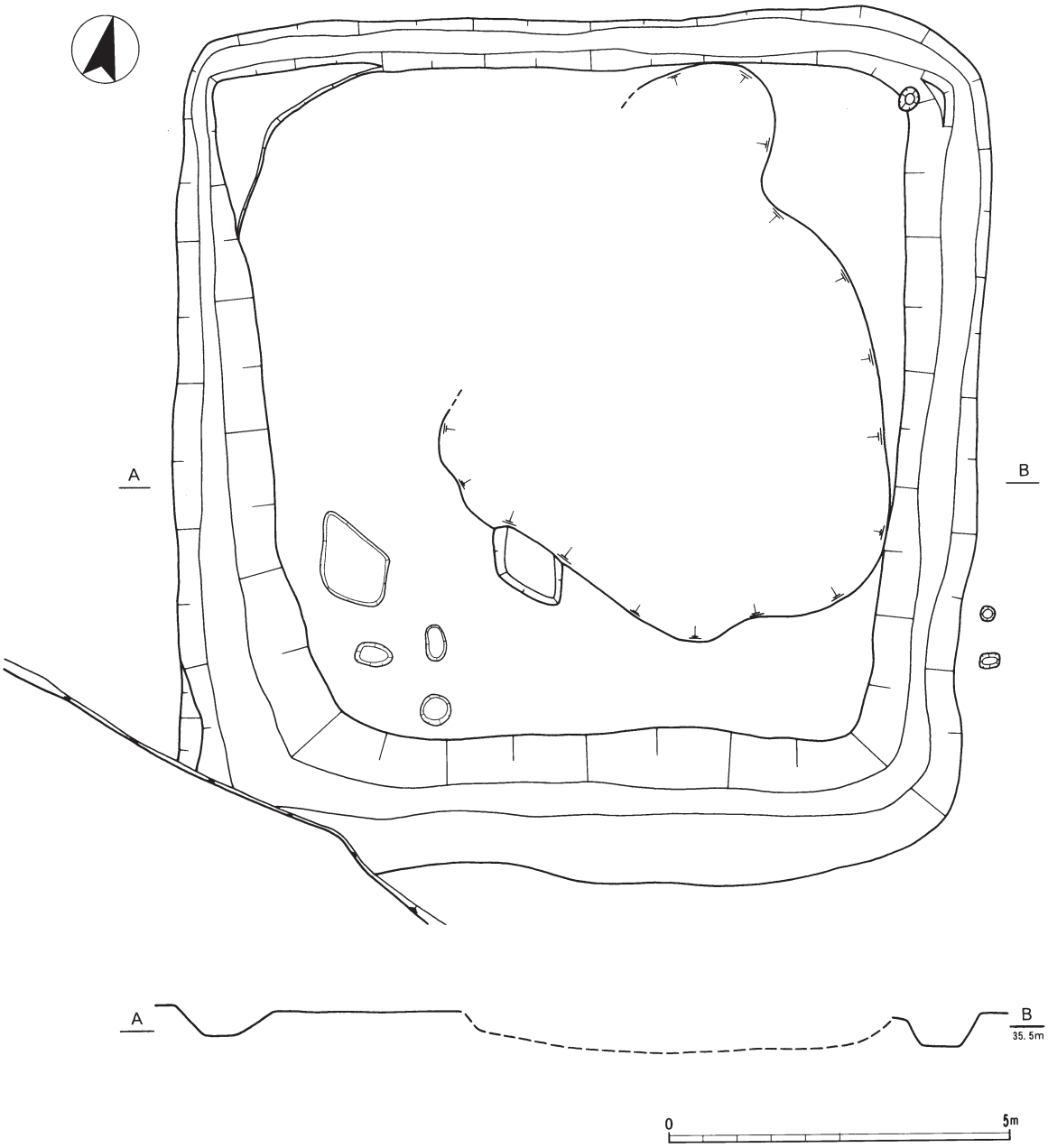
た。ＳＨ269と同様、大半が調査区外へ延びている。この住居跡も主柱穴は１ヶ所のみ確認したが、その位置から４本柱であると推定される。

東おちこみ　調査区の東端部分で確認した。埋土は黒褐色土であり、弥生時代後期の遺物が少量出土した。環濠の可能性も考えて、断面観察を行ったが、落ち込みのラインが確認できたのみで、明確な堀形ラインは確認できなかった。

２－２　弥生時代～古墳時代

周溝ＳＸ190（第13図）　調査区北半で検出し、北西部分で第１次調査区ＳＺ３と繋がる。工事施行予定範囲内でＳＸ190の北東部分を確認したところ、北から西へ向きを変えていること、近接する第５次調査区では、ＳＸ190に繋がる遺構は確認されなかったことから、方形に溝が巡ると考えられる。

幅は内法で東西約12m×南北19m以上、溝の幅まで入れると東西約19.5m×24.5m以上である。溝の断面形は内側が急で外側が緩やかになっていた。時期は遺構の切り合い関係から、弥生時代後期中葉の竪穴住居跡ＳＨ63・ＳＨ244・ＳＨ269より新しく、古墳時代終末期の土壙墓ＳＸ257より古い。なお、



第15図　ＳＸ39（小谷32号墳）平面図・断面図（Ｓ＝１：100）

溝内から桃と思われる種子が出土した。

２－３　古墳時代

周溝ＳＸ24（小谷33号墳）（第14図）　第１次調査の続きを調査し、完掘した。

周溝ＳＸ39（小谷32号墳）（第15図）　第１次調査の続きを調査し、完掘した。東西約12m×南北約12.9mの方墳で、周溝は全周した。

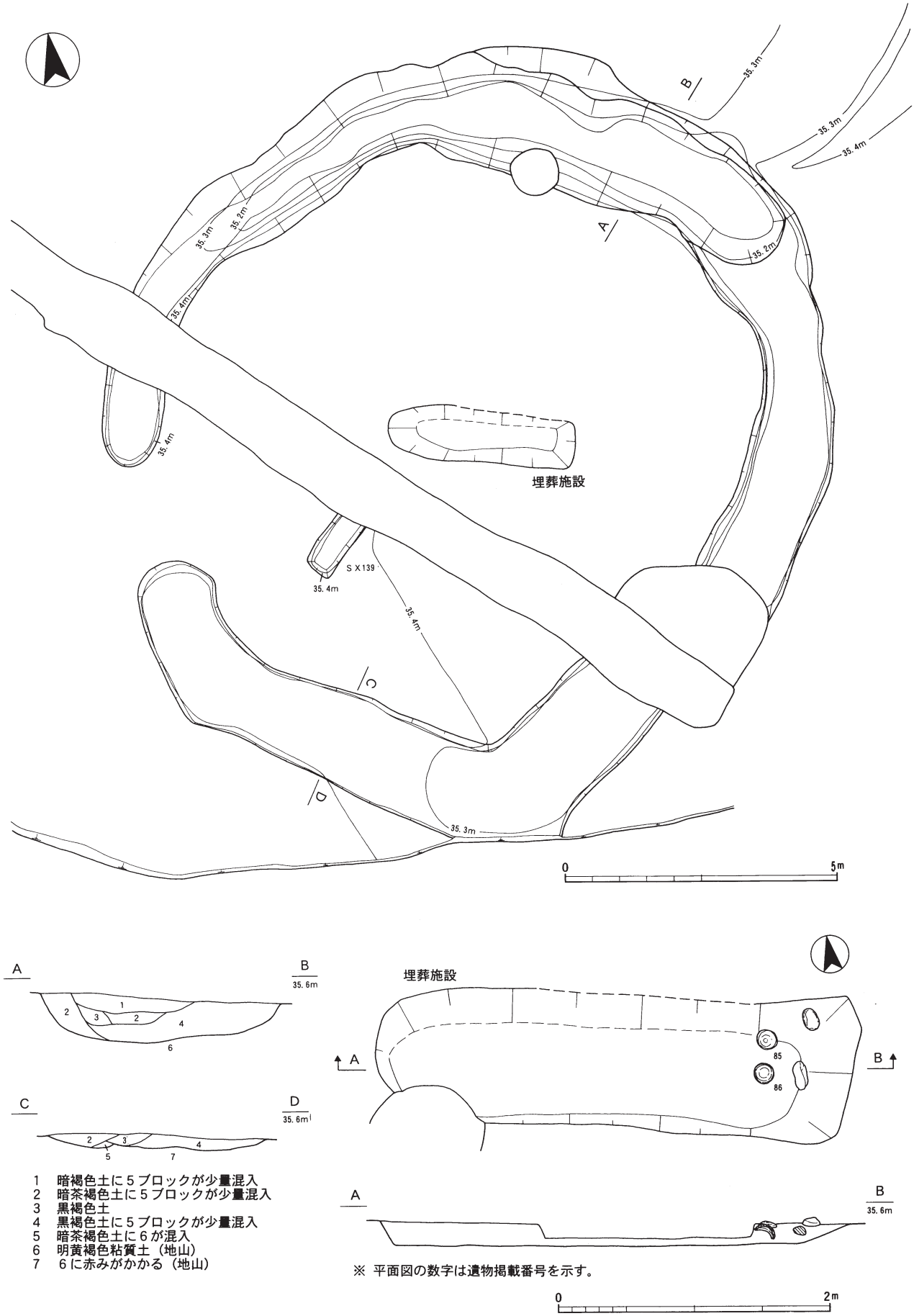
周溝ＳＸ140（小谷30号墳）（第16図）　調査区南半で検出した。円墳で径10m（周溝を含めると13.5m）である。検出面からの深さは、南へ行くに従い浅くなっている。

埋葬施設は、長さ約3.5m、幅１mの長方形で、地山を掘り込んでいる。形状から木棺直葬と考えられるが、木棺の痕跡は確認できなかった。南東部に長径20㎝程の礫が２個あり、その脇から須恵器杯蓋(85）と杯身(86）がそれぞれ伏せた状態で出土した。

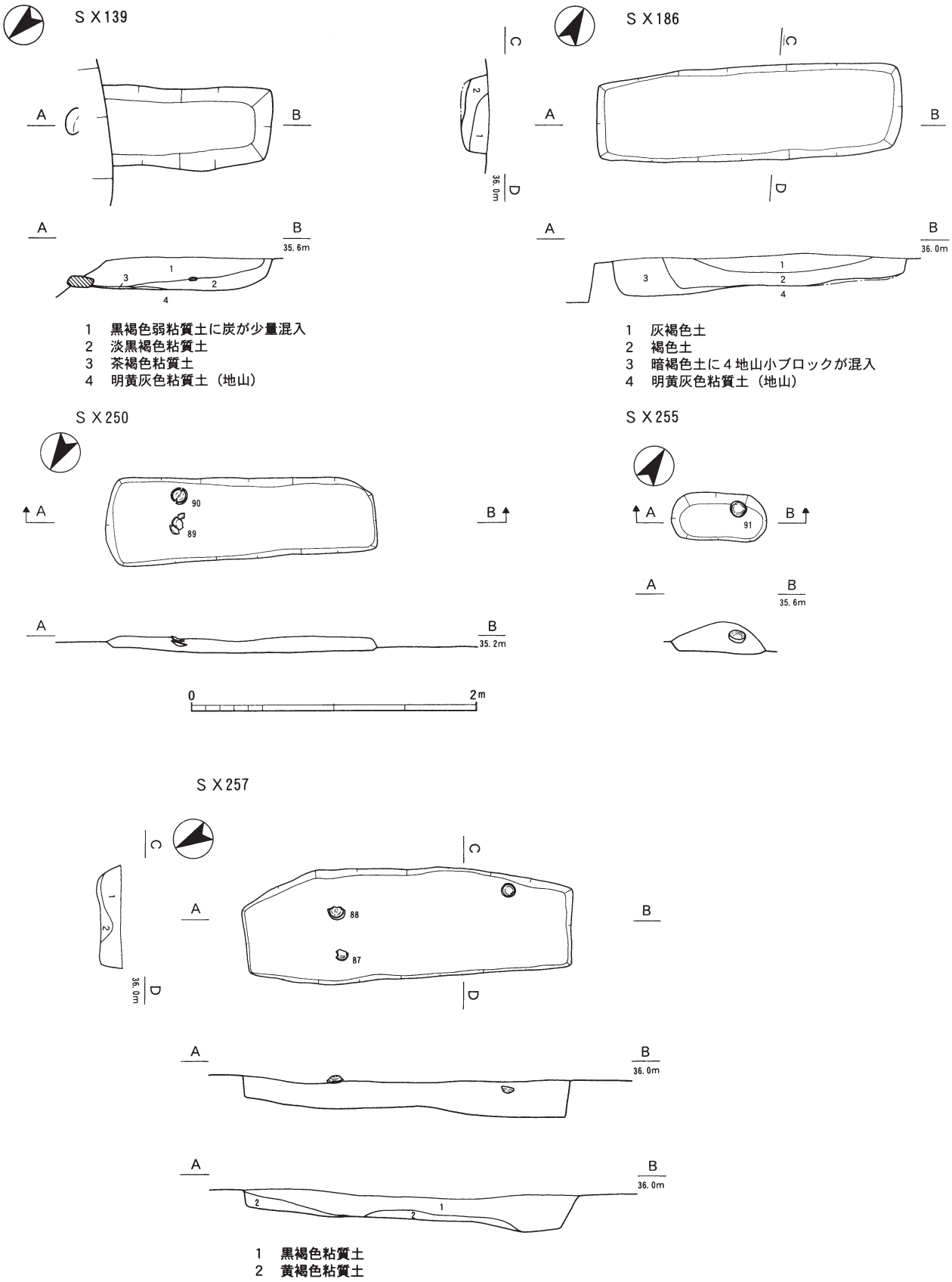
土壙墓ＳＸ139（第17図）　北半部分は近世区画溝ＳＤ２で削平されている。幅50㎝程度で規模は小さい。土師器高杯（92）が出土した。

土壙墓ＳＸ186（第17図）　長さ2.15m、幅65㎝の方形である。遺物は出土しなかったが、平面形態、埋土から当該期の土壙墓と判断した。

土壙墓ＳＸ250（第17図）　遺構上部は天花寺城跡に



第16図　ＳＸ140（小谷30号墳）平面図（Ｓ＝１：100）・土層断面図（Ｓ＝１：40)、埋葬施設平面図・立面図（Ｓ＝１：40)



1　黒褐色弱粘質土に炭が少量混入
2　淡黒褐色粘質土
3　茶褐色粘質土
4　明黄灰色粘質土（地山）

1　灰褐色土
2　褐色土
3　暗褐色土に４地山小ブロックが混入
4　明黄灰色粘質土（地山）

1　黒褐色粘質土
2　黄褐色粘質土

※ 平面図の数字は遺物掲載番号を示す。

第17図　ＳＸ139・ＳＸ186・ＳＸ250・ＳＸ255・ＳＸ257平面図・土層断面図・立面図（Ｓ＝１：40）

関連すると考えられる溝ＳＤ233によって削平されていた。長さ1.9m、幅55㎝である。北東部で須恵器杯身（90）と土師器杯（89）が出土した。

土壙墓ＳＸ255（第17図）　長さ70㎝、幅30㎝の楕円形である。土師器杯（91）が出土した。

土壙墓ＳＸ257（第17図）　長さ2.3m、幅80㎝の長方形である。須恵器杯蓋(87)と杯身(88)が出土した。

２－４　中世

中世の遺構は、大きく中世墓とそれ以外の遺構に分けられる。墓以外の遺構としたものの中には天花寺城に関連すると考えられる遺構も含まれている。

中世墓群上部施設　表土を剥いだ段階でいくつかの礫のまとまりを検出した。中には、集石の外郭を人頭大の巨礫で囲み、その内側は小礫を敷き詰めているものもあるが、礫の大小は関係なく五輪塔も混入した状態でまとまっているものも見受けられる。このことから、集石といっても当時の状況を留めているものと墓の改変（破壊）を受けているものがあるとみられる。

石塔類のうち五輪塔は、集石を確認した範囲内で多数確認された。そのうち17個所は地輪が当時の位置を留めていたものとみられる。

以下、集石ごとに記述していく。

集石５　調査区の東南隅で確認した。北側はＳＤ２で削平され、集石の南側は天花寺城の堀切がある。巨礫の並び等から５区画に細分されるとみられる。

５Ａ墓は、長径20～30㎝程度の礫でコの字状に配置された区画のみが確認された。集石の南半は削平されたとみられる。

５Ｂ墓は、集石５の北半に位置する。ＳＤ２に削平された北側を除く３方は長径20～30㎝の礫で区画している。区画内は長径10㎝弱の小礫が集中し、五輪塔地輪２基が確認された。

５Ｃ墓は、５Ｂ墓の東側に隣接する。大半をＳＤ２に削平されているが、一部区画内で小礫が確認された。

５Ｄ墓は５Ａ墓の西側に隣接する。西側以外で区画が確認され、北側は５Ｂ墓と区画を共有している。区画内は小礫のまとまりがみられ、区画内中央やや南寄りに五輪塔地輪が確認された。

５Ｅ墓は５Ｂ墓の西に隣接している。東西の区画を確認し、東側は５Ｂ墓の区画と共有している。区画内には、小礫が置かれていた。

集石６（第22図）　集石５の西隣に位置する。集石５との間は凹地であり、径３～５㎝大の礫のまとまりが認められる。集石は、人頭大の巨礫と握り拳大の礫に分けられ、周囲を囲うように巨礫を配置し、その中に長径５㎝程度の礫を敷いている。巨礫の配置から幾つかの区画に細分される。

６Ａ墓は集石６の南東部に位置する。６Ａ墓の東辺及び南辺は人頭大の巨礫が見られるが、その内側には小礫が認められず、巨礫の区画が動いてしまっている可能性が高い。

６Ｃ墓は集石６のほぼ中央に位置し、南北方向約2.7m、東西約1.5mの規模である。北辺と西辺は人頭大の巨礫が一列ずつ並び、内側には握り拳大の小礫が集中している。

６Ｄ墓は集石６の北側に位置する。北半はＳＤ２で削平されている。墓の南辺・西辺の一部は巨礫による区画が残存し、その内側で小礫を確認した。

６Ｆは集石６の東部に位置し、集石５と集石６間の凹地に握りこぶし大の小礫がまとまっていた。埋葬施設との関連が認められず、通路であったと思われる。

集石７（第23図）　集石６の西隣に位置し、３区画認められる。

７Ａ墓は、集石７の北半に位置し、南北2.35m、東西0.9mの規模である。区画石は基本的に人頭大の巨礫を用いているが、南辺のみ小さめの礫を用いている。区画石の内側は小礫が集中し、ほぼ中央に五輪塔地輪が認められた。

７Ｂ墓は、７Ａ墓の西側に位置する。南北0.75m、東西0.85mの楕円形である。７Ｂ墓も巨礫で区画を作っている。中央やや西寄りで五輪塔地輪を確認した。

７Ｃ墓は７Ａ墓の南側に位置する。集石の南半は削平されたのか、礫が認められなかった。南北1.4m以上、東西0.55mの規模である。７Ｃ墓も巨礫で区画を作り、その内側に小礫を敷いている。集石南端部分で五輪塔地輪がそのままの位置を留めていた。

集石８　集石７の西側に位置する。集石のまとまり

から、３区画と捉えている。

８Ａ墓は、集石８の西側に位置する。径25㎝前後の礫がまとまっていた。

８Ｂ墓は、集石８の東側に位置する。北側と東側の区画のみ確認した。

８Ｃ墓は、８Ａ墓と８Ｂ墓の間に位置する。集石のまとまりがみられるものの、区画等は明確でない。

集石14　集石７から約８m西に位置する。

集石14Ａ墓は集石14の東側に位置する。東側以外の３方向で径25㎝程度の礫がコの字状に並んでいるのを確認した。

集石16(第25図)　調査区南西部、集石７のさらに西側に位置する。礫の配置で４区画に分けられる。礫の配置は集石６・７と異なり、放射状に並べるものや何段か積み上げていたものがある。各区画が一部重なるように隣接している。

16Ａ墓は集石16の西側に位置する。南北1.25m、東西0.9mの隅丸方形で、径20㎝程の礫が放射状に並ぶ。

16Ｂ墓は16Ａ墓の東隣に位置し、径30㎝程の礫が並ぶ。

16Ｃ墓は、16Ｂ墓の北側に隣接する。礫はほとんど散逸してしまっていたが、北側・東側に若干区画石と思われる巨礫が残存し、内側に小礫が確認された。規模は南北0.5m、東西0.4m以上である。なお、16Ｂ墓と接する部分に五輪塔地輪が位置する。

16Ｄ墓は、16Ｂ墓の南側に隣接する。径15㎝程の礫を２段程度積み上げ、0.65m四方の方形であった。16Ｄ墓の中央にも、五輪塔地輪が原位置を保った状態で確認された。

集石22(第26図)　調査区中央やや南寄りに位置する。集石の残存状態は良好であったが、調査区南側に位置する集石６・７・14と比較すると礫のまとまりが密集し、区画を捉えるのに困難を極めた。巨礫を区画石に用い、内側に小礫を敷くものや放射状に礫を並べるものなど礫の並べ方に多様性がみられた。

22Ａ墓は集石22の西端に位置する。22Ｅ墓の西側に付加したような形で検出した。1.1m×0.65mの規模で西側を長径25㎝程度の巨礫で、南側を長径15㎝程度の礫で区画している。その内側は径10㎝程度の小礫を敷いている。

22Ｂ墓は、集石22の南西部に位置する。長径30㎝程の礫が円形に並び、且つ礫の長軸を放射状に意識して置いていたようである。円形となる中心部にはほとんど礫は確認されなかった。

22Ｃ墓は、集石22の東側に位置する。やや不明瞭ではあるが、南北方向に２m、東西方向に0.85mをほぼ方形に巨礫で囲み、その内側をさらに細かい礫で充填している。区画の中央やや西寄りに五輪塔地輪２基、一石五輪塔がほぼ原位置を保った状態で確認された。

22Ｄ墓は、集石22の北側に位置する。比較的大きい礫の並びが確認できるのは西側の一部のみで、あとは10～20㎝大の礫がまとまってみられる。中央では原位置を保っているとみられる五輪塔地輪を確認した。

22Ｅ墓は、22H墓の東側に位置する。外周を長径30㎝程度の巨礫で囲っている。平面形態は東側が西側よりも幅が狭く、不定方形である。これは、22Ｅ墓の南東側が22Ｃ墓北側と共有しているためと思われる。区画内東側に22Ｉ墓があり、22Ｅ墓が22Ｉ墓を包括するような形で確認された。区画内西寄りで、花崗岩製の五輪塔地輪を確認した。

22Ｆ墓は、22Ｉ墓の南側に位置する。集石の北側は22Ｉ墓に、東側は22Ｃ墓に削平されているが、本来は円形に集石がまとまっていたと思われる。

22Ｇ墓は22Ｂ墓の東隣に位置する。比較的小振りの礫を用いている。中央からは、礫が確認されなかった。

22H墓は、22Ｉ墓の東側に位置する。西側は22Ｉ墓東側の区画石と共有する。区画石は、東側と西側は長径30㎝近い大きな礫を用い、北側・南側はやや小ぶりの礫を用いている。区画内は、長径15㎝内外の礫を敷いている。

22Ｉ墓は22Ｃ墓の北に位置する。22Ｅ墓の区画内で確認されたが、22Ｉ墓付近は放射状に握りこぶし大の礫のまとまりがみられたため、別の集石と捉えておく。

集石23(第27図)　集石22の東隣に位置する。集石の東側には南北方向に数個巨礫が並び、集石の西側には一部巨礫を２～３段積んでいるのが確認できたが、東側区画と西側区画の向きが揃わず、２～３の区画

に分けられると考えられる。

23Ａ墓は、集石23の西側に位置する。西側と北側区画の一部が確認でき、西側は径25cm程度の礫を２～３段積んでいた。区画内は部分的であるが、径10cm程度の礫がみられる。

23Ｂ墓は、23Ａ墓の東側に位置する。径30cm程度の礫で方形に区画していたとみられるが、23Ａ墓と重なる部分は不明瞭である。区画内には部分的であるが小礫のまとまりがみられ、中央南西よりに五輪塔地輪が２基確認された。南側地輪の直下には塔を安定させるため、古代の平瓦を敷いていた。

23Ｃ墓は、集石23の南側に位置する。径15～20cm程度の礫が方形に囲むように確認された。

集石24(第29図)　集石23の東側に位置する。20～40cm大の礫が集中するが、集石のまとまりとして捉えられたのは１基である。

24Ａ墓は、集石24の北側に位置する。径30cm程度の礫のまとまりがみられ、北側は径40cm程度の巨礫が３個、東西方向に並んでいる。

集石25　径15cm前後の礫が部分的に集中していた。区画は明瞭でなく、多くは動かされたと思われる。

集石26(第31図)　径20cm前後の礫のまとまりがみられるが、残りは良好でない。

26Ａ墓は、集石26の西側に位置する。径20cm程度の礫と径10cm程度の礫が混在した不定形のまとまりがみられた。礫に混入して古代の平瓦も比較的多く確認している。

26Ｂ墓は、集石26の中央、26Ａ墓の東側に位置する。北側と東側の区画を確認し、北側は径30cm程度の礫を、東側は径15cm程度の礫を使用していた。なお、東側の区画は、26Ｃ墓の西側区画と共有している。

26Ｃ墓は、集石26の東側に位置する。西側と南側に径25cm程度の区画石を配し、区画内は径10cm程度の礫のまとまりがみられる。

集石27(第31図)　集石26の北東に接する。径20cm程度の礫と10cm前後の礫が混じる。礫のまとまりは確認できるが、規模は不明。東側で石仏（258）が伏せた状態で出土した。

集石28(第30図)　調査区中央東側に位置する。集石の東側は、近世以降の天華寺参道に削平されている。

28Ａ墓は、集石の西側に径30cm前後の礫が南北方向に１列並び、南側には東西方向に同様の礫が２列並ぶ。区画石内をより細かい礫で覆っている。

集石31(第32図)　径10～30cm大の礫のまとまりが確認された。

31Ａ墓は、集石31の北東に位置する。長径30cm程度の礫で円形に囲み、中央に小礫を敷き詰めている。

集石33(第32図)　集石31の北側に位置する。調査区内で最も標高の高い所である。北側は20cm大の礫が弧状に並び、その南側はさらに細かい礫が認められる。区画内中央に五輪塔地輪が認められた。

集石35(第33図)　径15～30cm程度の礫のまとまりが確認された。集石の北東側・西側では、特に五輪塔各部が散乱していた。

また、集石の間から銭貨が４枚（上から「景徳元寶」「皇宋通寶」「開元通寶」「洪武通寶」）重なって出土した。上２枚は表を上にして、下２枚は裏を上にした状態で出土した。

35Ａ墓は、集石35の北側に位置する。北側と東側は径30cm程度の礫を用いた区画が確認でき、区画内は径20cm程度の礫がまとまっていた。

35Ｂ墓は、35Ａ墓の南側に位置する。径10～25cmの礫のまとまりが確認された。北側と東側で長径25cm程度の比較的大きな礫が長軸を区画方向に合わせ、やや垂直に近い形で立てかけたように置かれていた。そのため、礫上面の高さは外側が高く、内側が低く凹んだ状態で検出された。

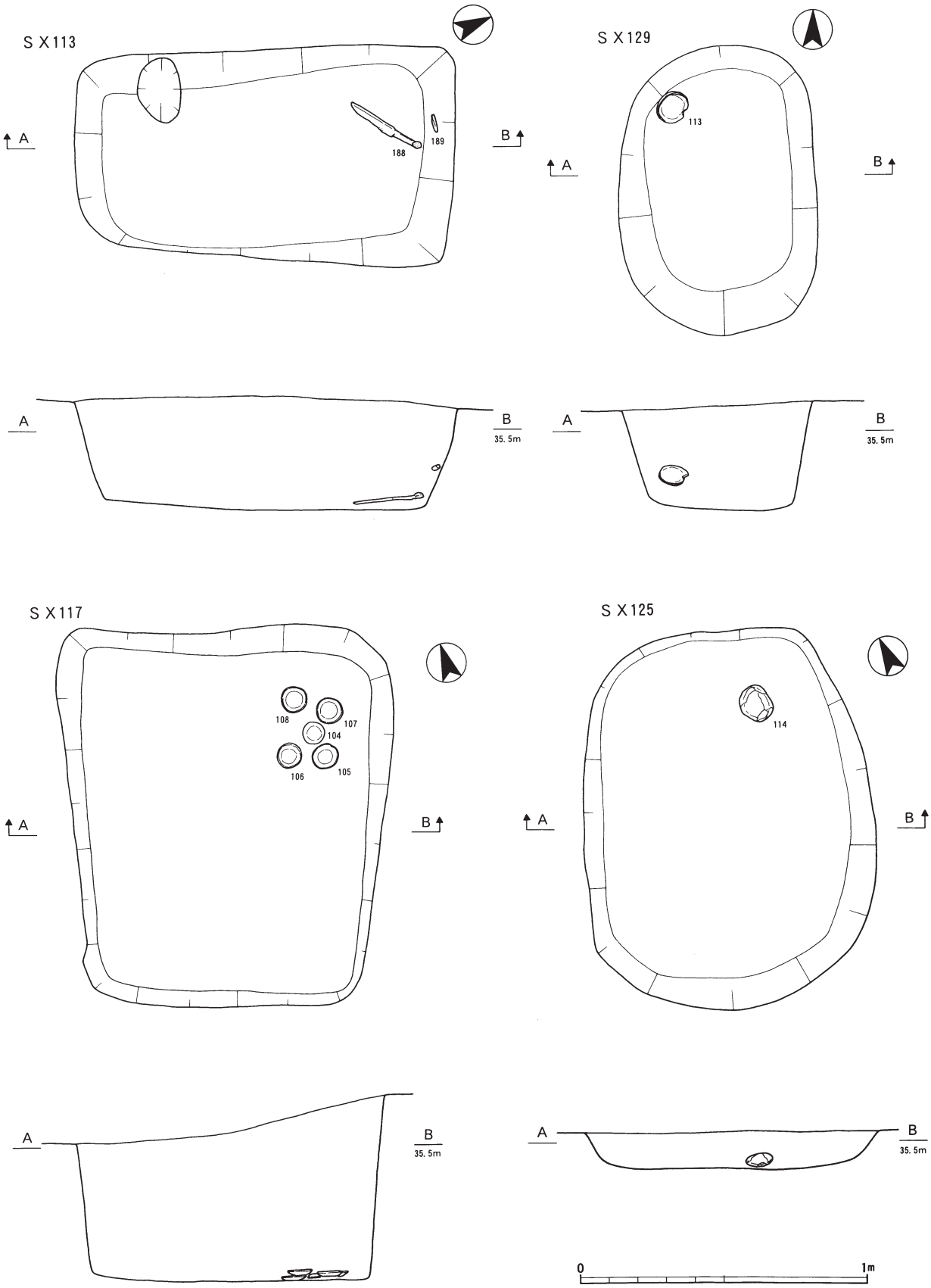
35Ｃ墓は、35Ａ・35Ｂ墓の東側に位置する。東側と南側は長径20～40cm程度の礫を用いた区画が確認でき、区画内は部分的であるが、長径15cm前後の礫のまとまりがみられた。

中世墓群下部施設　大きく土壙墓[(2)]と火葬墓に分けられる。最も北側に位置する墓壙はｂ18のＳＸ216であるが、多くは調査区中央以南に集中する。またＳＤ233以東では墓壙を確認せず、ＳＤ233が墓域の東側境界となっていた可能性がある。

土壙墓は、平面形態・断面形態・埋土から、それと推定される遺構を含めると十数基にのぼるが、副葬品や供膳具等が出土し、確実に土壙墓といえるものは６基である。土壙墓は、平面形態から方形（隅丸も含めて）（ＳＸ113･117･125･129）と楕円形（Ｓ

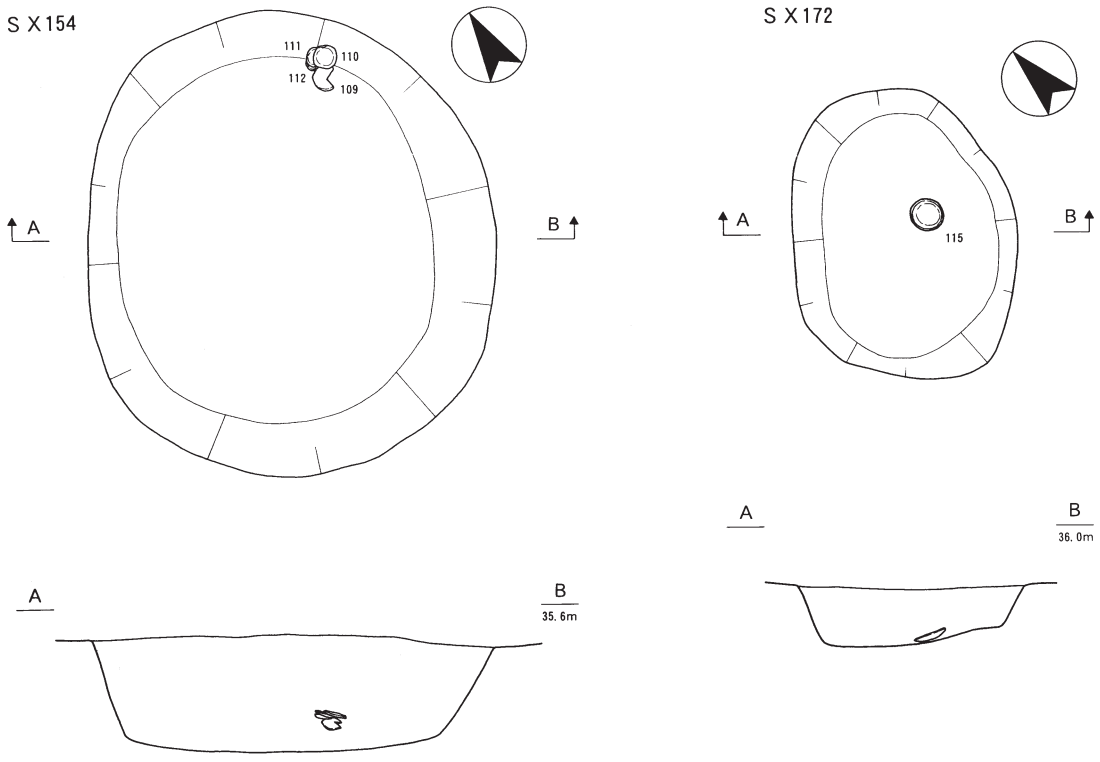
※　ＳＸは番号のみ示した。

第18図　遺構全体図（中世）（Ｓ＝１：200）

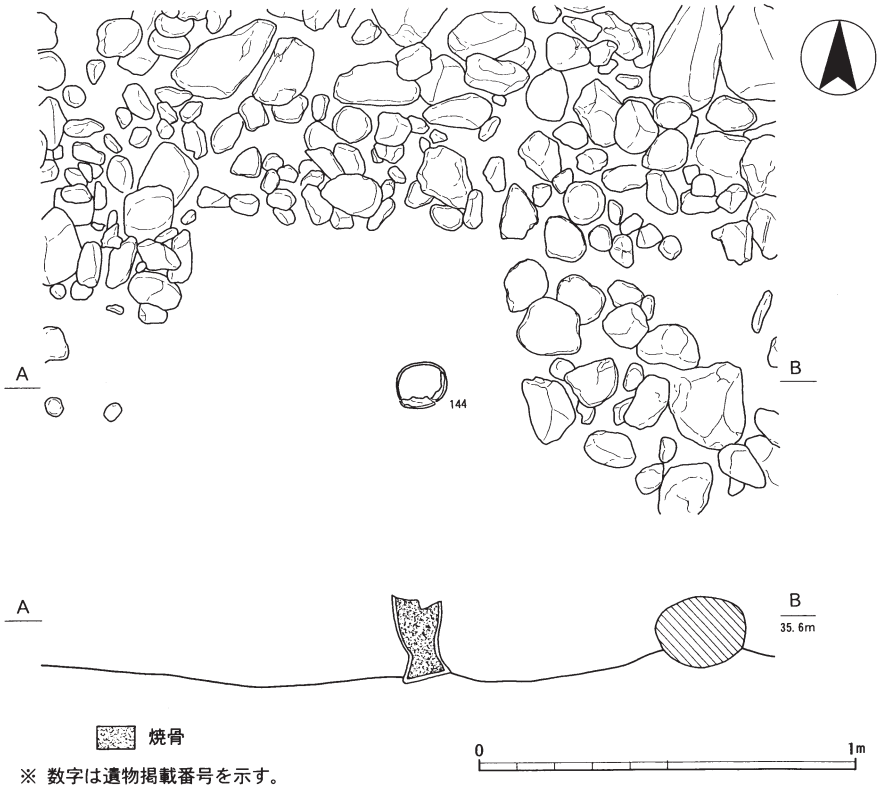


※ 数字は遺物掲載番号を示す。

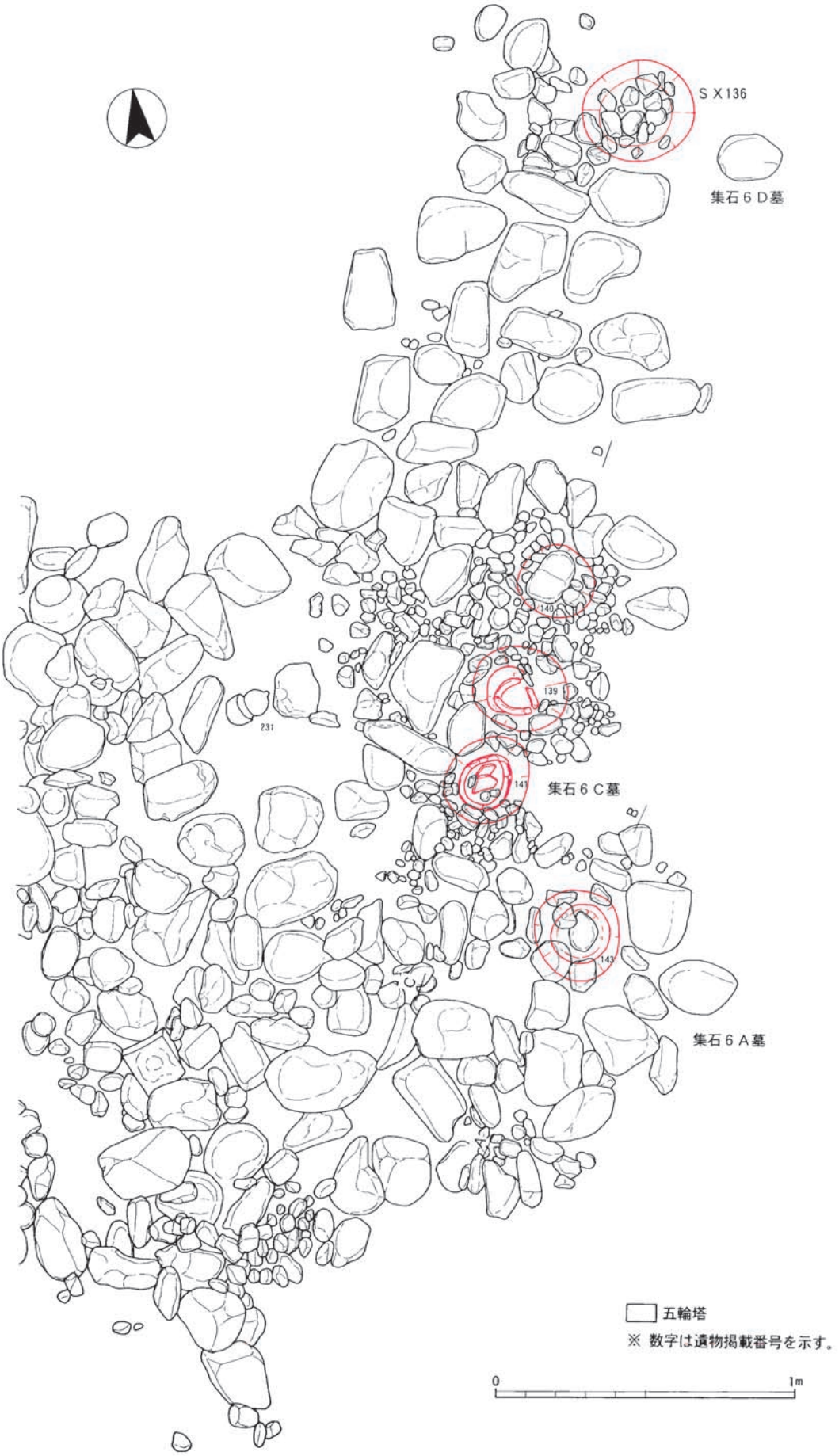
第19図　S X113・S X117・S X125・S X129平面図・立面図（S＝1：20）



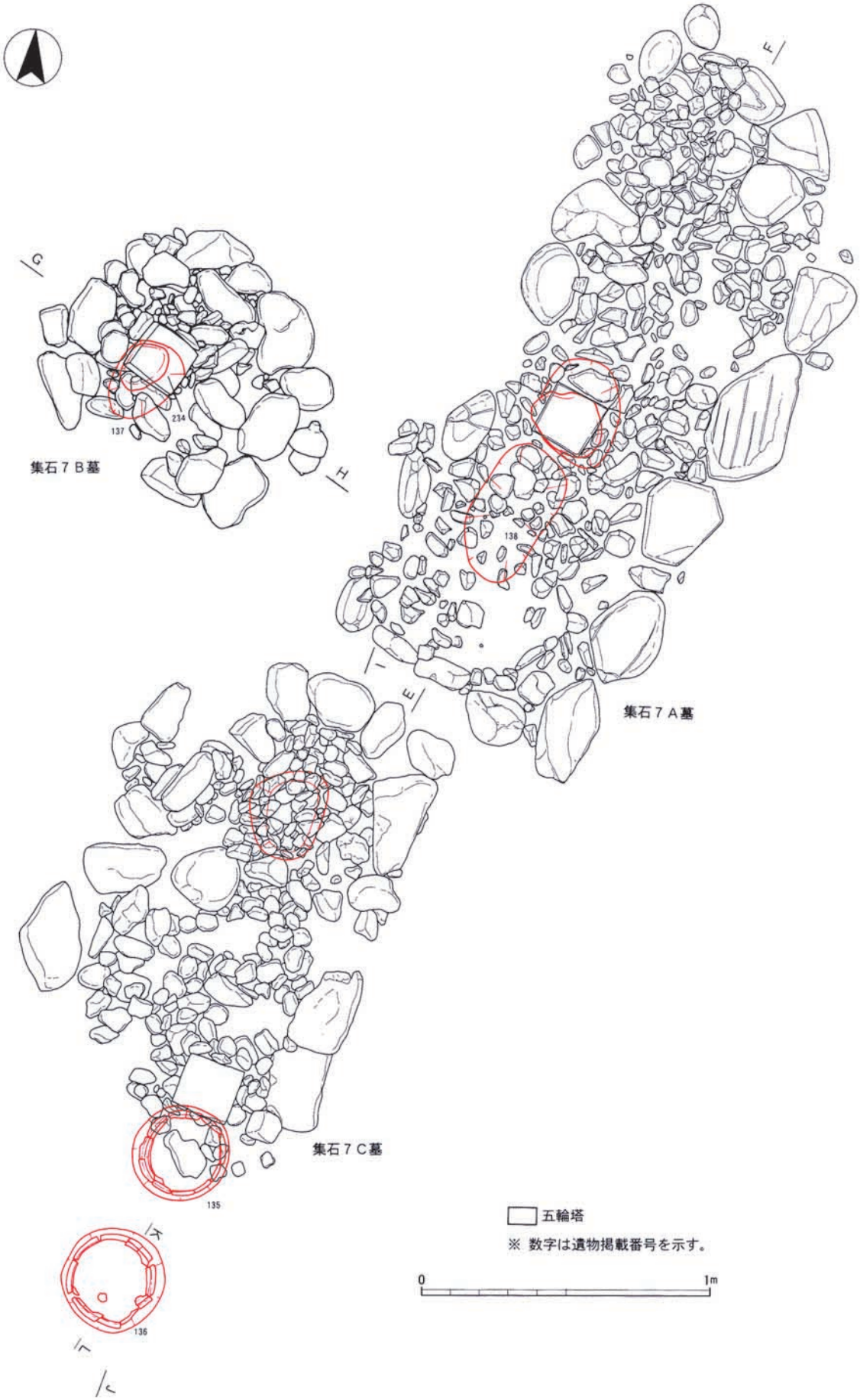
第20図　ＳＸ154･ＳＸ172平面図・立面図（Ｓ＝１：20）



第21図　集石５Ａ墓平面図・断面図（Ｓ＝１：20）

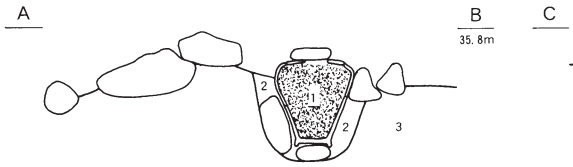


第22図　集石６付近平面図（Ｓ＝１：20）



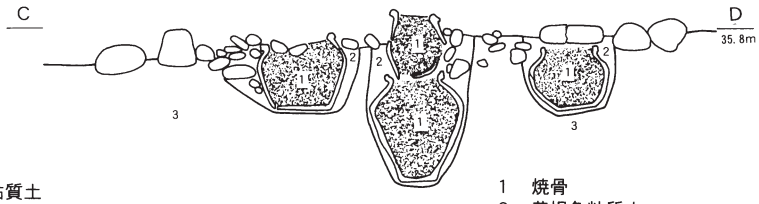
第23図　集石７平面図（Ｓ＝１：20）

集石６Ａ墓



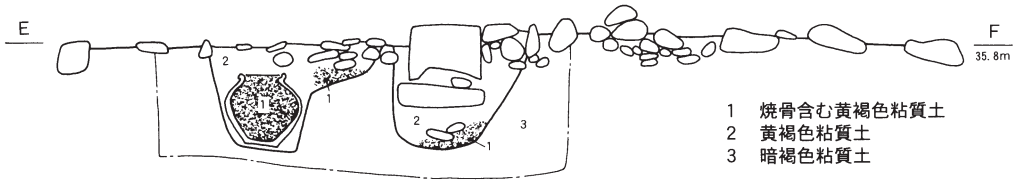
1　焼骨含む茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　褐色粘質土

集石６Ｃ墓



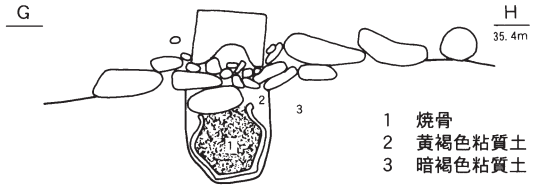
1　焼骨
2　黄褐色粘質土
3　褐色粘質土

集石７Ａ墓

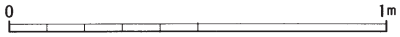


1　焼骨含む黄褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土

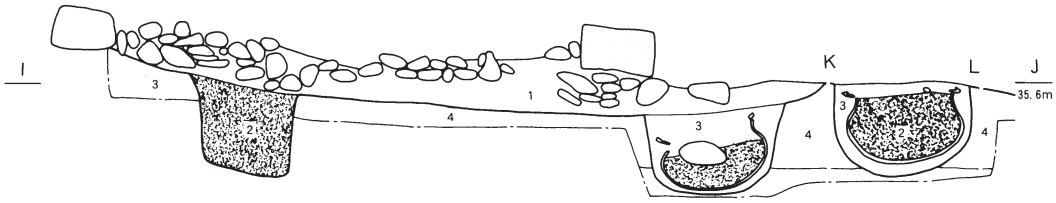
集石７Ｂ墓



1　焼骨
2　黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土



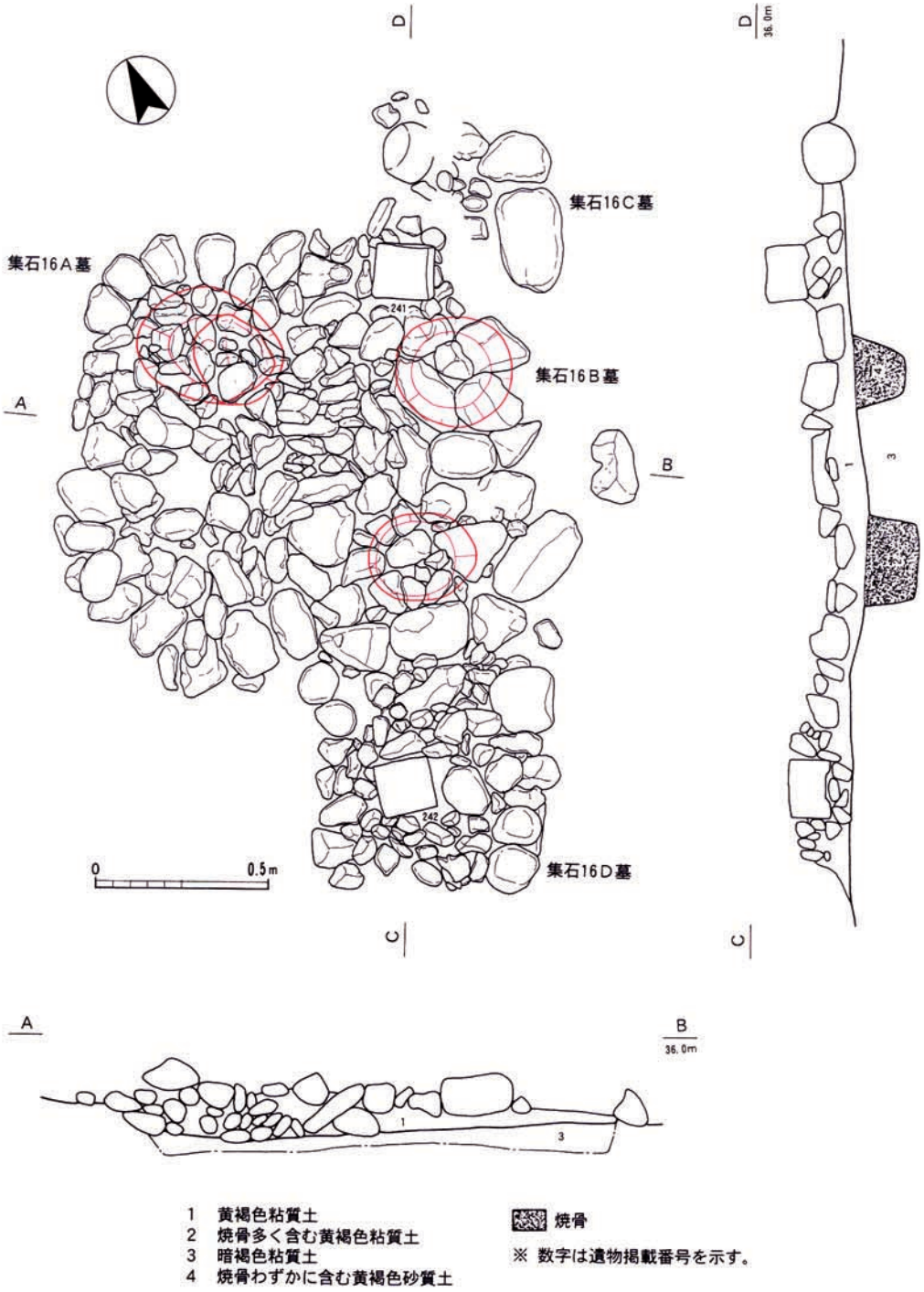
集石７Ｃ墓



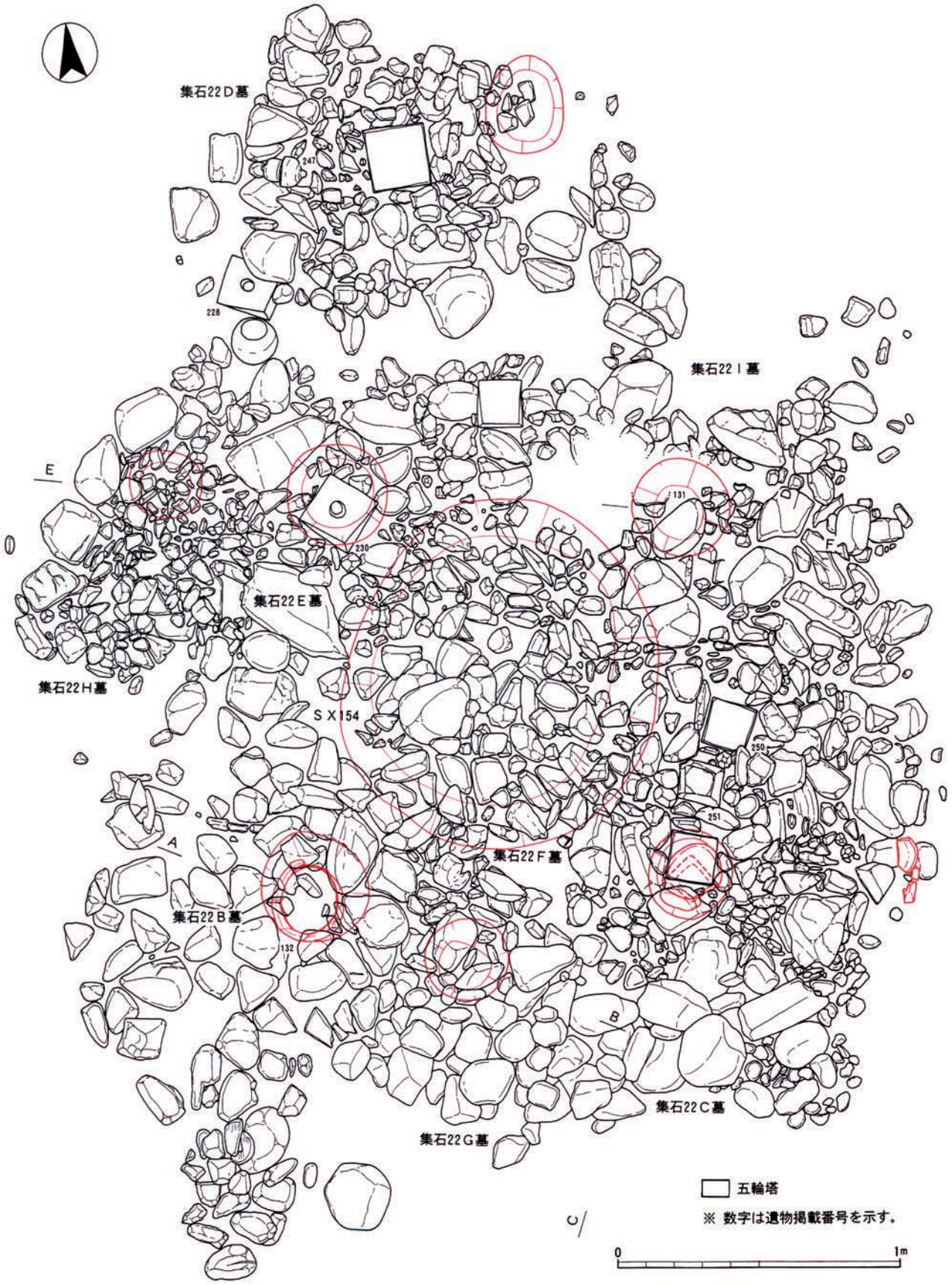
焼骨

1　明黄褐色粘質土
2　焼骨多量に含む黄褐色砂質土
3　明黄褐色砂質土
4　暗褐色粘質土
5　赤褐色粘質土（地山）

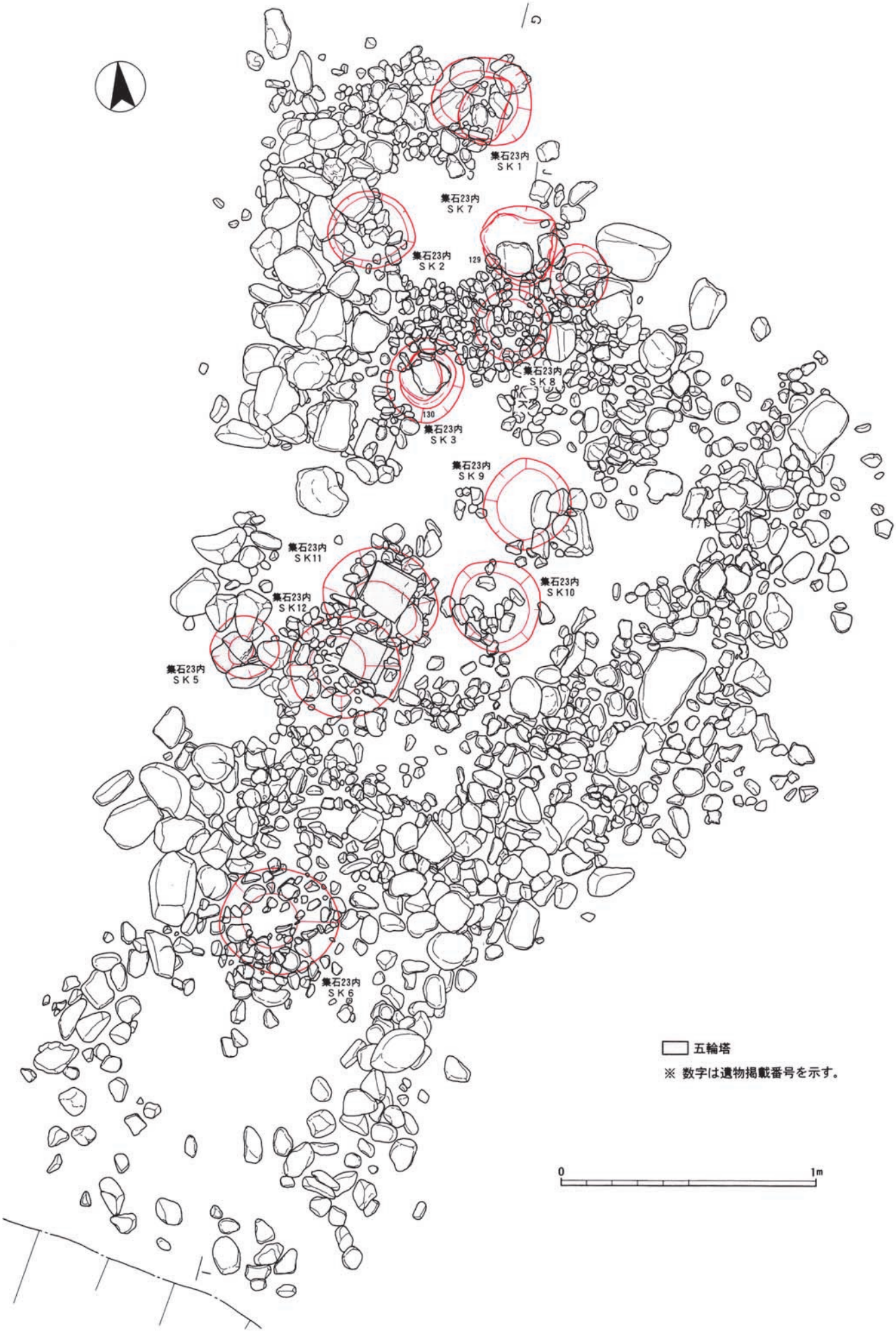
第24図　集石６Ａ墓・６Ｃ墓・７Ａ墓・７Ｂ墓・７Ｃ墓断面図（Ｓ＝１：20）



第25図　集石16平面図・土層断面図（S＝1：20）

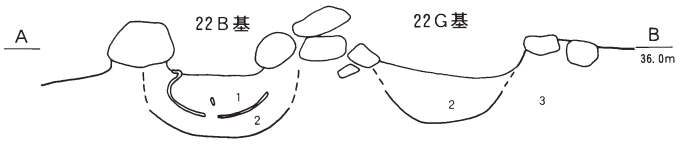


第26図　集石22付近平面図（S＝1：20）

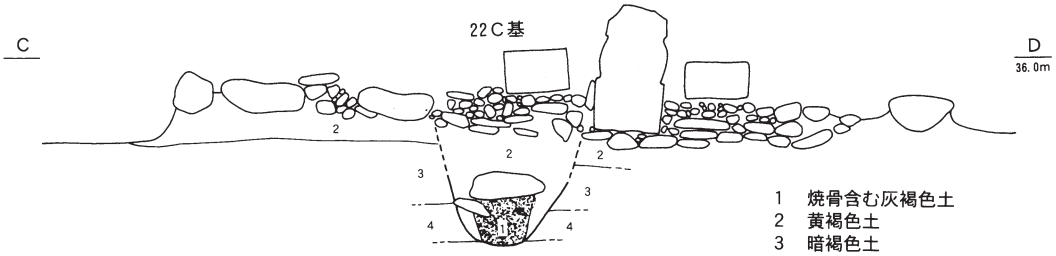


第27図　集石23平面図（S＝1：20）

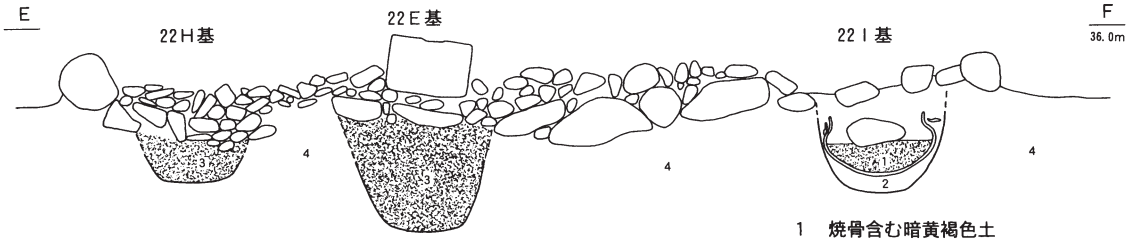
集石22



1　炭少量
2　黄褐色土
3　暗褐色土

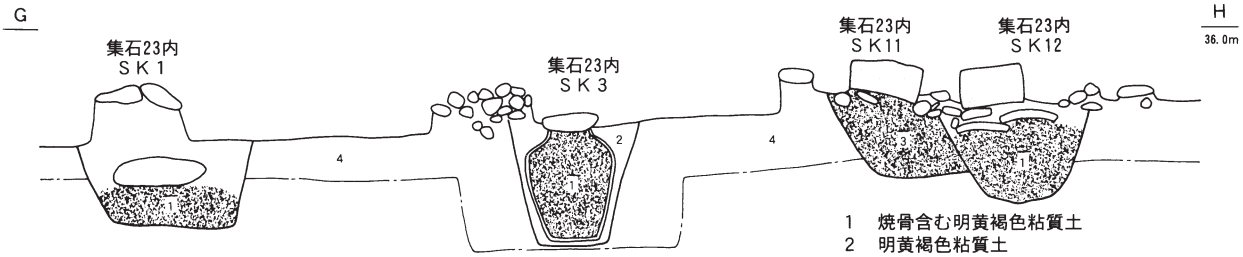


1　焼骨含む灰褐色土
2　黄褐色土
3　暗褐色土
4　淡黄褐色土

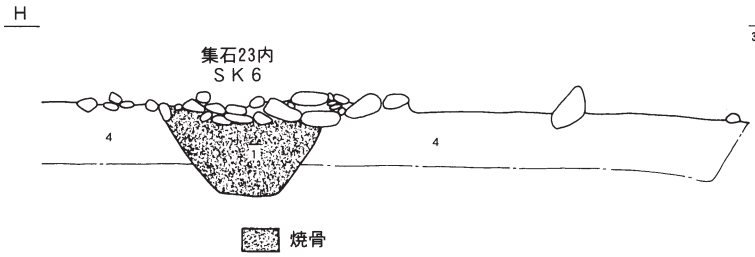


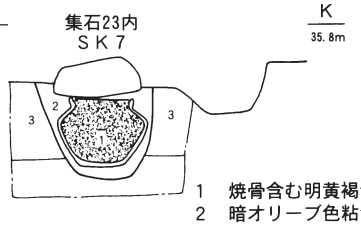
1　焼骨含む暗黄褐色土
2　黄褐色土
3　焼骨含む黄褐色粘質土
4　暗褐色土

集石23



1　焼骨含む明黄褐色粘質土
2　明黄褐色粘質土
3　焼骨含む暗黄褐色粘質土
4　褐色粘質土

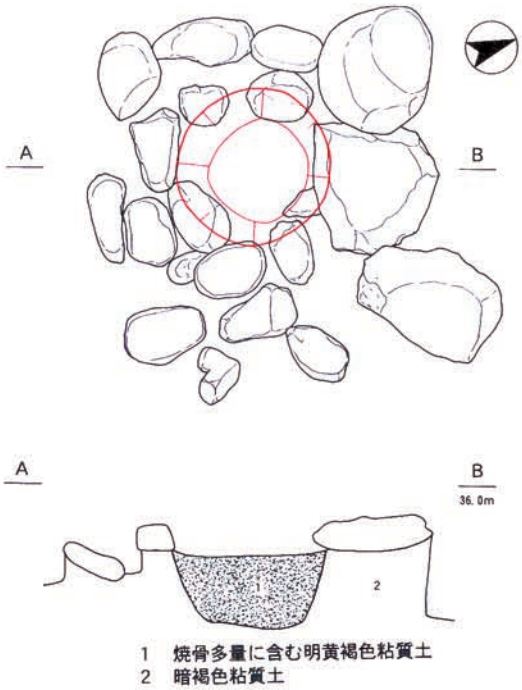




1　焼骨含む明黄褐色粘質土
2　暗オリーブ色粘質土
3　暗褐色粘質土

0　1m

第28図　集石22・23断面図（S＝1：20）



第29図　集石24Ａ墓平面図・断面図（Ｓ＝１：20）

Ｘ154・172）に分けられる。規模は、長辺が小さいもので１m弱、大きいもので1.3m前後になる。

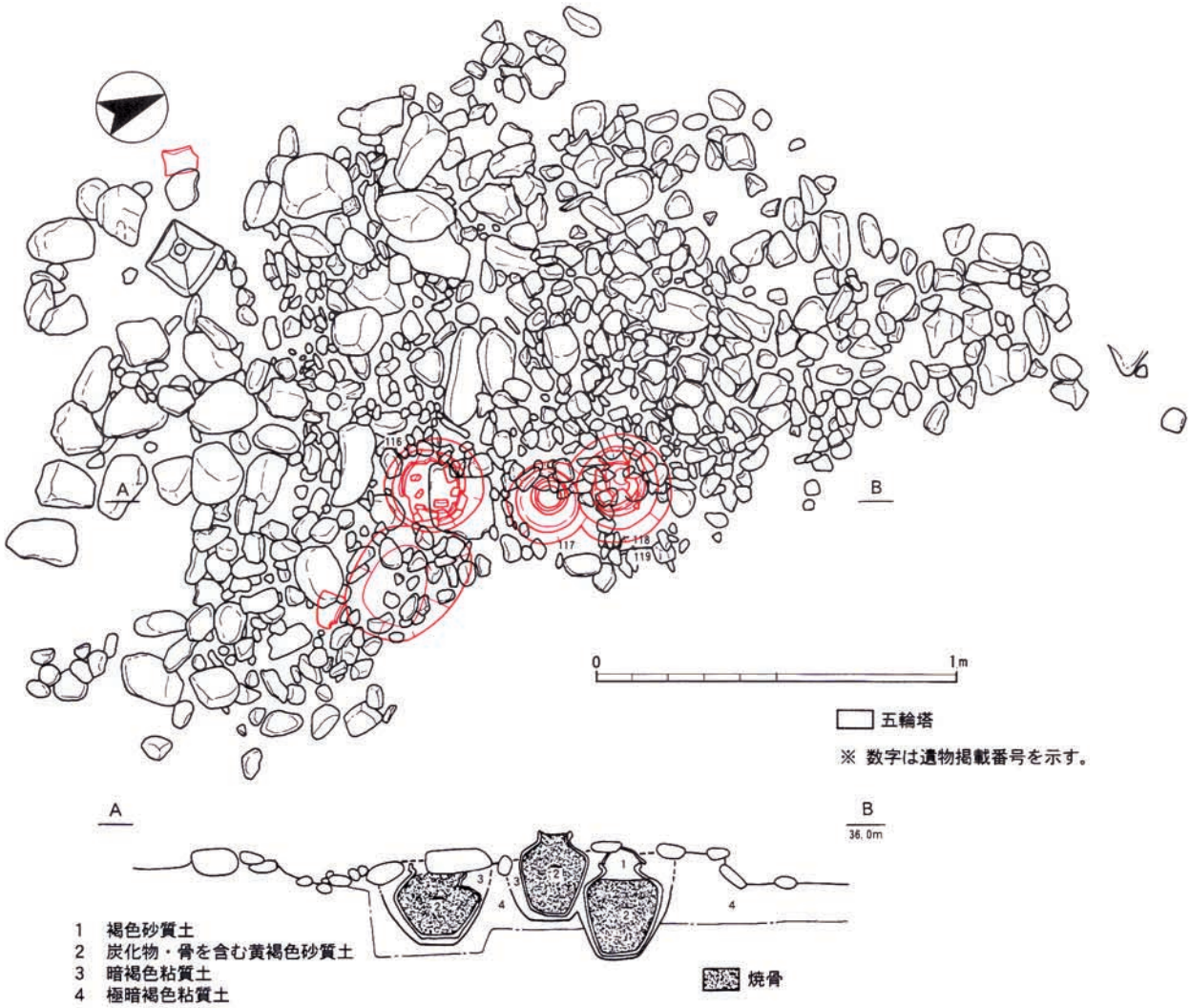
土壙墓ＳＸ113（第19図）　長辺約1.35m、短辺約0.75mの隅丸方形となる。墓壙内北側から刀（188）が出土した。

土壙墓ＳＸ117（第19図）　長辺約1.3m、短辺約1.1mの隅丸方形となる。墓壙内北西側から陶器皿が正位置で４点（105～108）、土師器小皿が伏せた状態で１点（104）、それぞれ出土した。

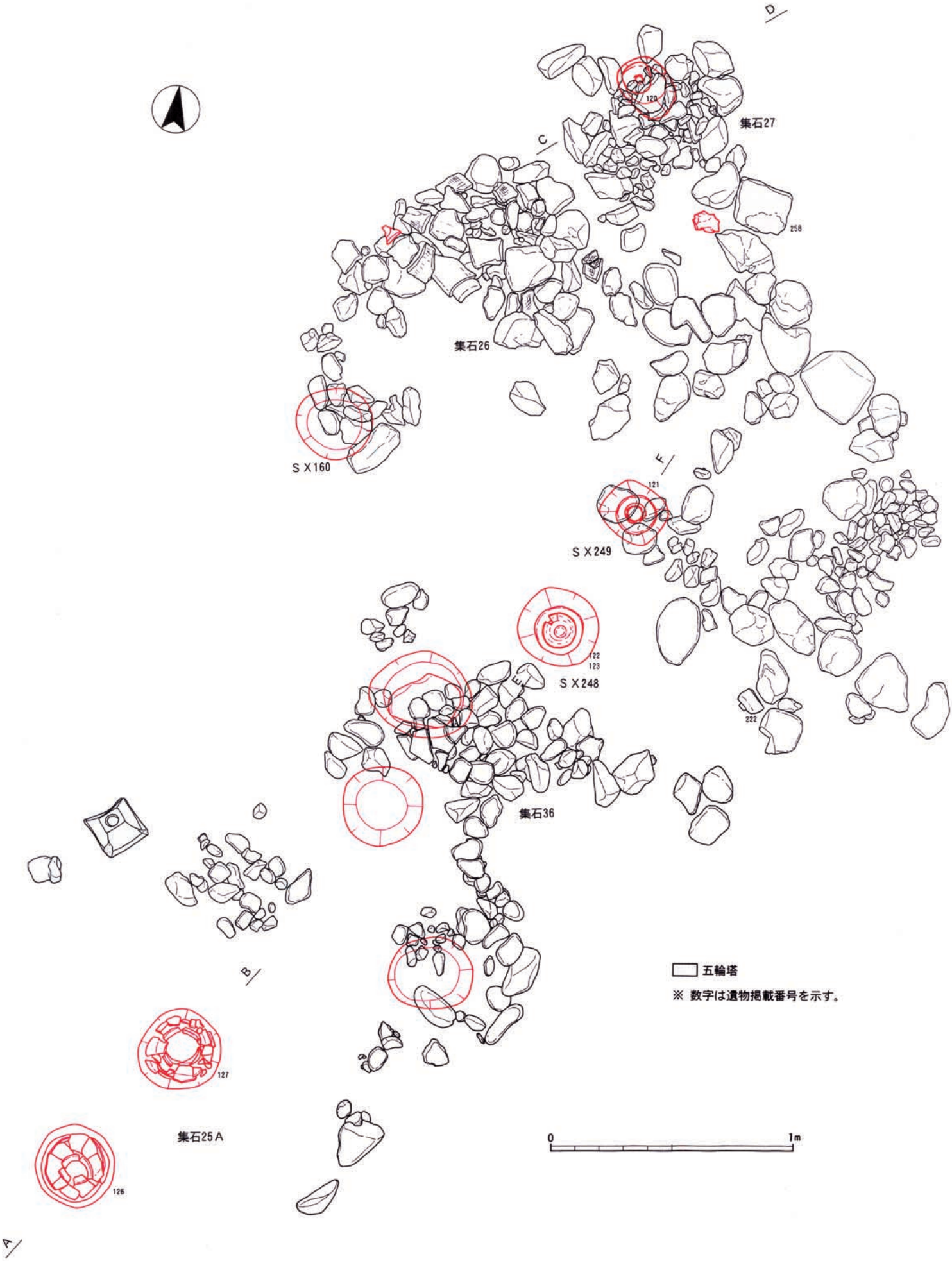
土壙墓ＳＸ125（第19図）　長辺約３m、短辺約1.1mの隅丸方形である。北東隅で土師器皿（114）が伏せた状態で出土した。

土壙墓ＳＸ129（第19図）　長径約１m、短径約0.7mの長楕円形である。北西隅で土師器皿（113）がほぼ正立した状態で出土した。

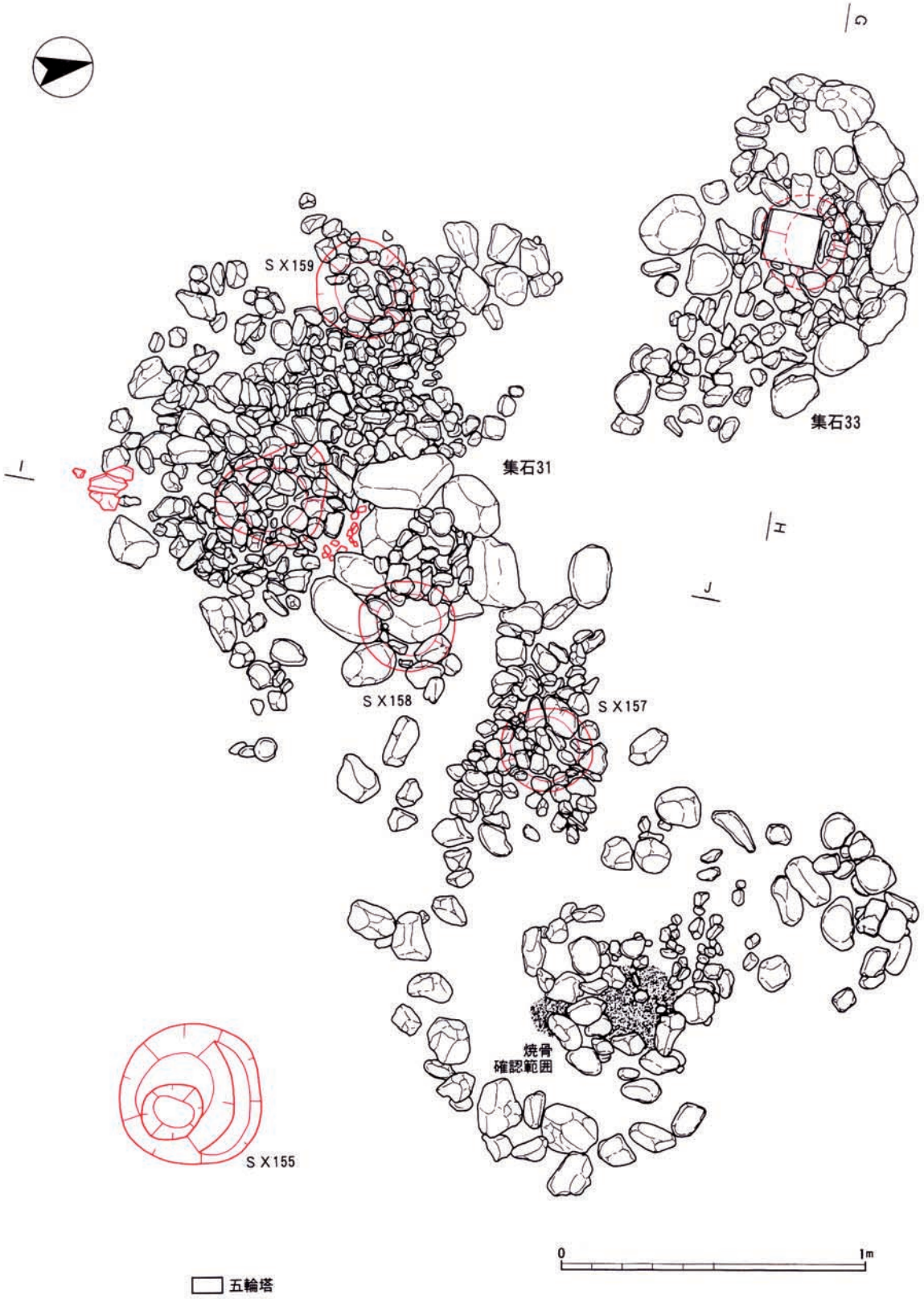
土壙墓ＳＸ154（第20図）　長径1.25m、短径1.1m



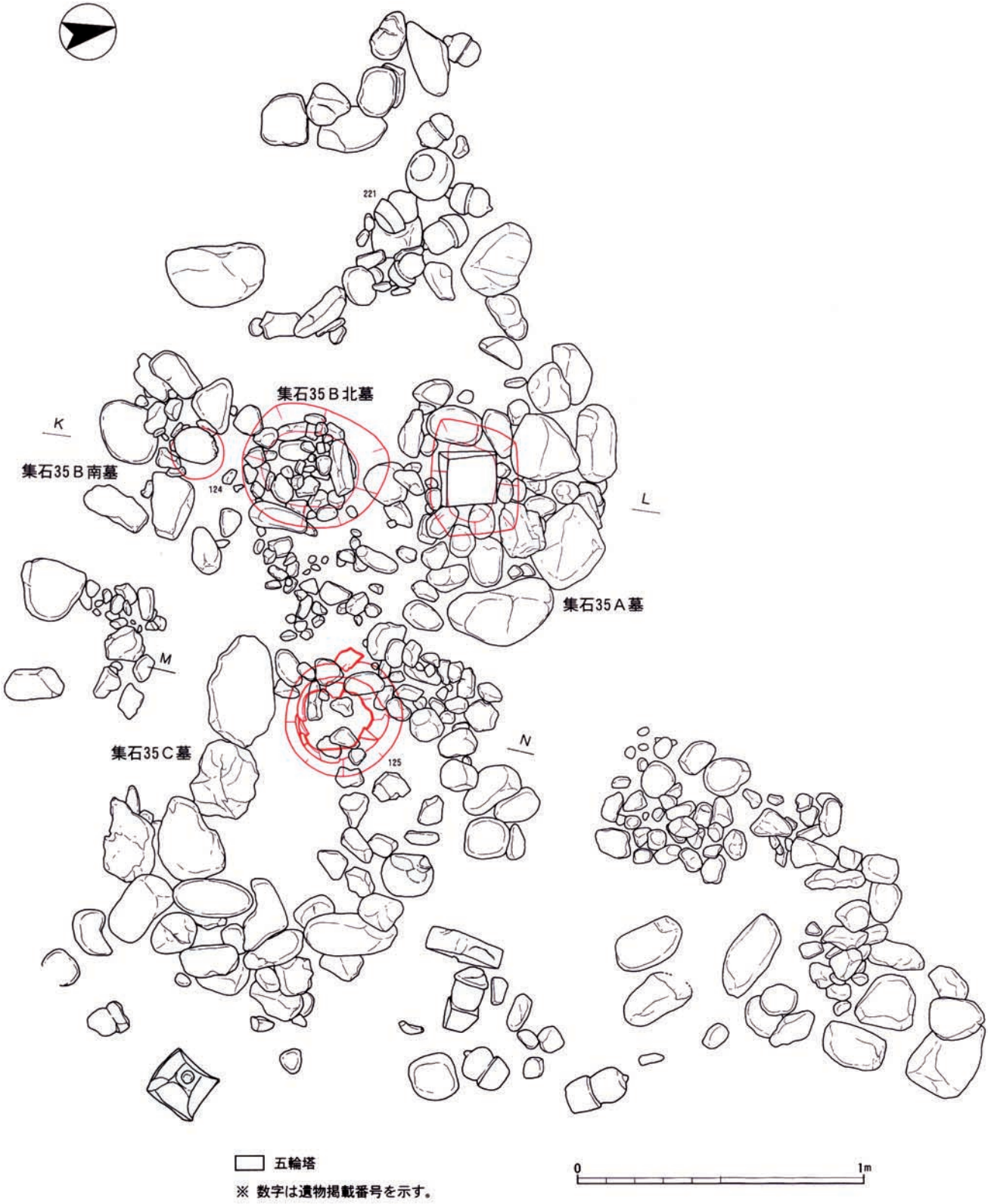
第30図　集石28Ａ墓平面図・断面図（Ｓ＝１：20）



第31図　集石25・26・27・36付近平面図（S＝1：20）

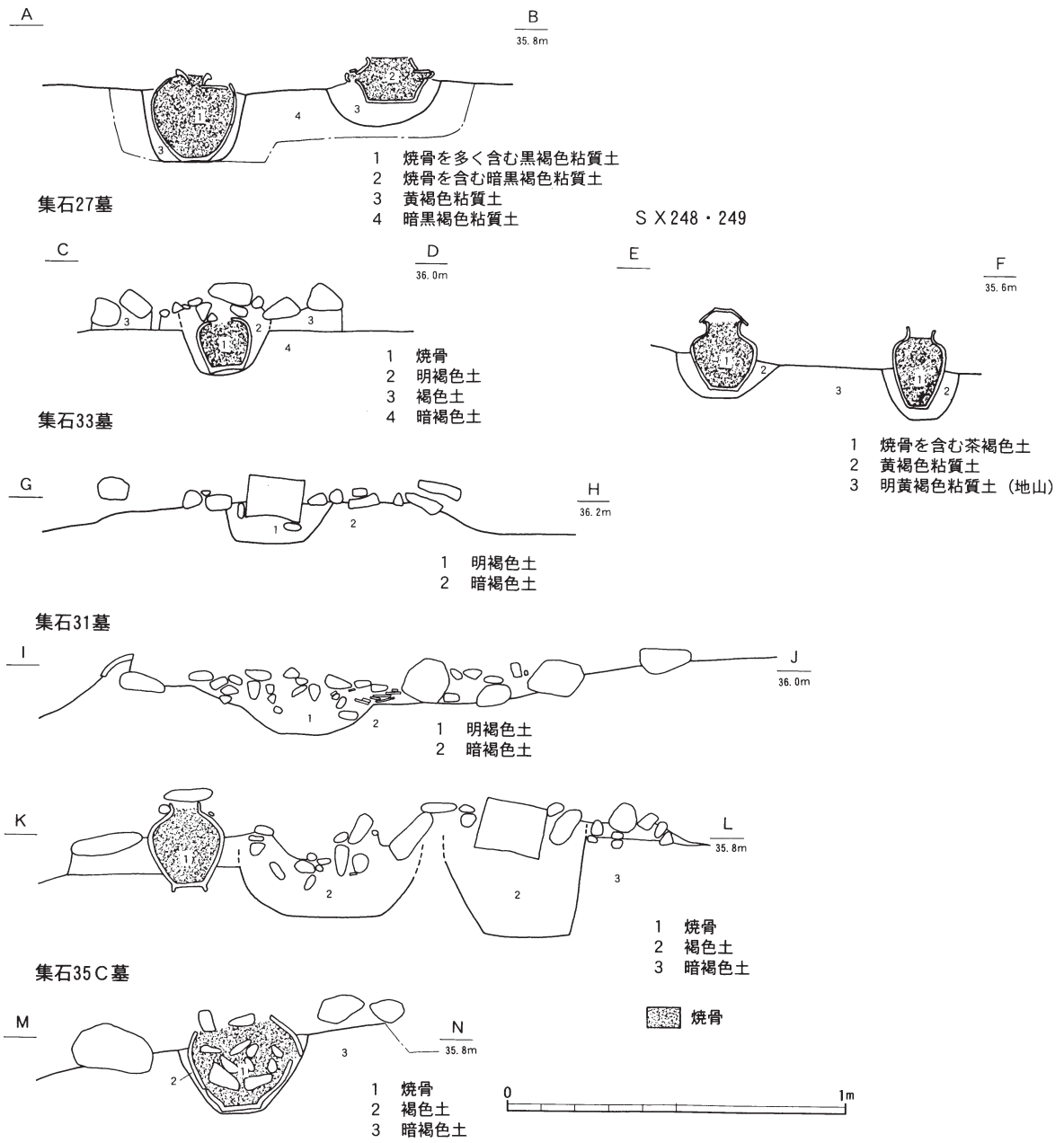


第32図　集石31・33付近平面図（S＝1：20）

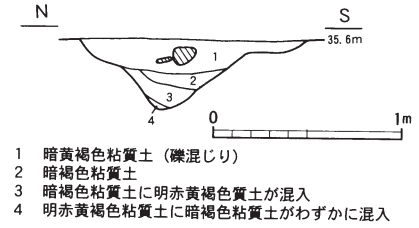


第33図　集石35付近平面図（Ｓ＝１：20）

集石25Ａ墓



第34図　集石25Ａ墓・27墓・31墓・33墓・35Ｃ墓断面図（Ｓ＝１：20）



第35図　ＳＤ41土層断面図（Ｓ＝１：40）

の楕円形となる。墓壙の北東部分から、やや浮いた状態で土師器小皿が４点（109～112）出土した。３点は重なった状態で、１点はこのわずか南寄りに傾いた状態で出土した。

土壙墓ＳＸ170　短径約1.1mの楕円形となる。断面形は他の土壙墓と同じく、逆台形である。ここからは釘が多数出土しており、木棺墓であると考えられる。

土壙墓ＳＸ172（第20図）　長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形となる。墓壙のやや中心寄りに土師器皿が、正立した状態で出土した。

火葬墓は、検出時に蔵骨器に入っていたものとそうでないものに分けられる。蔵骨器を確認したものは計28基、確認しなかったものは、計80基検出した。

蔵骨器が認められなかったものの多くは、径30㎝、深さ30㎝程度の土坑に焼骨が入った状態であった。

集石５Ａ墓(第21図)　古瀬戸瓶子（144）を確認した。上部は大きく削平され集石もほとんど無く、瓶子は肩部から下のみが残存していた。

集石６Ａ墓(第22図)　古瀬戸四耳壺（143）を埋置していた。口頸部と耳を打ち欠き、20㎝大の扁平な河原石を蓋としていた。墓壙内には15㎝大の礫を数個置き、四耳壺を安定させたと思われる。

集石６Ｃ墓(第22図)　区画内の小礫集中部分で、蔵骨器を計４個体確認した。いずれも常滑産である。墓壙は南北方向に３カ所並び、北側と南側にそれぞれ不識壺を１点ずつ埋置し（140・141)、その間に壺を２点上下に重ねて埋置していた（139・142)。また、北側の不識壺には、蓋石が用いられた。

集石７Ａ墓(第23図)　地輪直下で焼骨を少量含む墓壙を、区画内南側で不識壺（138）をそれぞれ確認した。

集石７Ｂ墓(第23図)　地輪直下で常滑産不識壺（137)を確認した。不識壺には、蓋石が置かれていた。

集石７Ｃ墓(第23図)　区画の北側で１ヵ所、焼骨を含む墓壙を確認した。また、区画の南側で２カ所、南伊勢糸士師器鍋を確認した。上部の集石はほとんど残っていない。北側の鍋（135）は地輪の位置からやや南にずれる。また、鍋内には多量の焼骨があったが、その最上部に15㎝大の礫を１点確認した。板等を蓋にし、その上に礫を置いたものが、腐食により蔵骨器内に転落したものと思われる。

集石15墓　小礫のまとまりが確認された所で焼骨の入った墓壙を１基確認した。

集石16墓(第25図)　いずれも焼骨の入った墓壙を16Ａ墓で１基、16Ｂ墓で２基それぞれ確認した。いずれも五輪塔地輪の位置との関連は認められなかった。

集石22Ｂ墓(第26図)　円形に配置された集石直下から南伊勢糸士師器鍋（132）が出土した。しかし、鍋内部の土は炭を少量含むのみで、見た範囲では、他の蔵骨器のように焼骨が確認できなかった。

集石22Ｃ墓(第26図)　３基並んだ五輪塔の南側地輪のほぼ直下で確認した。集石を外し、10㎝程下げた所で径20㎝程度の礫があり、その礫を除去すると、方形に焼骨を検出した。木箱状のものに焼骨を入れて埋置し、蓋石を置いたものと思われる。

集石22Ｅ墓(第26図)　地輪のほぼ直下で焼骨の入った墓壙を１基確認した。

集石22Ｈ墓(第26図)　区画内中央やや北寄りで、径30㎝程のピット状の遺構を確認した。墓壙と考えられるが、出土した骨片は他の墓壙よりも少量であった。

集石22Ｉ墓(第26図)　南伊勢糸士師器鍋（131）を検出した。鍋内には多量の焼骨があったが、その最上部に15㎝大の礫を１点確認した。

集石23墓(第27図)　墓壙は計11基確認したが、どの区画に伴っているものかは不明である。そのうち２基は常滑産不識壺（129）と常滑産短頸壺（130）を検出した。いずれも口に蓋石を置いていた。その他９基は蔵骨器を持たないものであるが、内１基（集石23内ＳＫ１）は径25㎝程度の巨礫の下から焼骨が出土しており、巨礫が蓋ないしは蓋を押えていたものと考えられる。

集石24Ａ墓(第29図)　焼骨を大量に含む墓壙を１基、確認した。

集石25Ａ墓(第31図)　２カ所で確認した。北側は常滑産不識壺（127)、南側は常滑産壺（126）である。

集石27墓(第31図)　集石の区画内にある、小礫のまとまりの直下から古瀬戸水注（120）が出土した。

集石28墓(第30図)　集石区画内から、蔵骨器が南北に３カ所並んだ状態で確認した。いずれも常滑産のもので、北から壺（119)、玉縁口縁壺（117)、不識壺（116）と並ぶ。北側と中央の蔵骨器は接しており、断面から切り合い関係は不明であるが、双方の蔵骨器の置き方から北側の蔵骨器→中央蔵骨器の順に埋置されたとみられる。また、北側の蔵骨器には山茶椀を伏せて蓋とし、南側の蔵骨器には蓋石が用いられた。さらに南側蔵骨器の東側に切られるような形で焼骨を含んだ墓壙を確認した。

集石31墓(第32図)　巨礫で囲まれた小規模な区画の南西部に広がる小礫の下で、ピット状の掘り込みを１ヶ所確認した。しかし、焼骨はほとんど確認できなかった。

集石33墓(第32図)　地輪のほぼ直下でピット状の掘り込みを１ヶ所確認した。しかし、埋土から焼骨はほとんど確認できなかった。

集石35Ａ墓(第33図)　地輪のほぼ直下でピット状の掘り込みを１ヶ所確認した。しかし、埋土から焼骨はほとんど確認できなかった。

集石35Ｂ墓(第33図)　小礫が広がる下で、焼骨をほとんど含まないピット状の掘り込みを１ヶ所確認した。さらにその南側で古瀬戸三耳壺（124）が出土した。この蔵骨器の周囲には径15～20㎝大の礫が多く、礫で蔵骨器を固定させていたように見られ、掘方は不明である。

集石35Ｃ墓(第33図)　区画内の小礫が広がる下で常滑壺（125）が出土した。この壺の中には焼骨の他に径５～10㎝程度の礫が多く入っていた。

ＳＸ248・249(第31図)　集石36の北側で検出した。ＳＸ248は常滑産壺（123）に山茶椀を伏せて蓋にした状態で確認した。ＳＸ249の常滑産三筋壺（121）は頸部を打ち欠いた状態で出土した。

中世墓以外の遺構

溝ＳＤ41　第１次調査で確認した溝の続きである。西へ５m程伸び、端部でやや北寄りに曲がる。断面形はＶ字形である。

溝ＳＤ187　ＳＤ41の東に位置する。溝の西端は、ＳＤ41東端部からわずかに約0.5m離れていた。全長４m程度、西半部はＳＤ41と向きを揃えるが東半部は南西方向に向きをかえ、蛇行する。深さ約10㎝と浅く、断面形も逆台形となり、ＳＤ41の形態とは大きく異なる。埋土から土師器皿片が出土した。小片のため図示できなかったが、15世紀末～16世紀頃のものとみられる。

溝ＳＤ233　調査区の東端部より約４m西側に位置し、調査区東端ラインにほぼ並行して走る。幅が2.3mと広く、深さも約40㎝あり、断面形はＳＤ41程ではないが、Ｖ字形に近い。埋土中から中世墓に使われていたと思われる礫及び五輪塔が出土した。

土坑ＳＸ208・209・211　調査区北東寄りで埋土に炭を多く含む方形ないしは隅丸方形の土坑を確認した。焼土面は確認できず、埋土に焼土が含まれることもなかった。遺物も出土せず、所属時期は不明である。先述した中世墓との相関関係は想定されるものの、現状では不明である。

〔註〕

⑴　『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告～一志郡嬉野町天花寺城跡・小谷赤坂遺跡の調査～』三重県埋蔵文化財センター　1996年

⑵　形状から木棺直葬と考えられるが、木棺の痕跡が確認できなかった。本報告書では木棺墓も包括して、土壙墓と表記している。

Ⅲ　出土遺物

１　縄文時代の土器（第36図１～４）

１は体上半部がラッパ状に開く押型文土器で、外面に粒の粗い楕円押型文、内面上半に太い斜行沈線を施す。器壁が厚く、胎土に大粒の石英・長石等の軽鉱物を大量に含む。典型的な高山寺式土器である。

２は、口縁直下に４条（さらに１条ある可能性あり）の沈線を施す深鉢で、かなり不鮮明であるが、その上に縄文ＲＬを施しているようである。型式名を特定しきれていないが、後期に属しよう。

３は突帯文土器である。やや尖り気味の口唇部を呈し、突帯は素文である。体上部の調整には条痕を用いている。

４は浅鉢である。口唇部は欠損しているが、波状の口縁部に沿って添付される窓枠状の区画隆帯は頂部で閉じる形態をとる。中期に属すると思われる。

(穂積裕昌)

２　弥生時代の土器（第37・38図５～84）

５～21はＳＨ63出土である。甕は口縁部が受口状のもの(５)、くの字のもの(６・７)がある。高杯は

いずれも杯部が浅く、皿状のもの(８)、段を形成し上方へ直線的にのびるもの(９)、大きく外反するもの(10)がある。13は口縁部に１カ所、焼成前に押圧している。17は土製の扁平な玉で、１カ所紐通しの穴がある。表面の残りは悪いが、一部赤色顔料が認められる。18・19はミニチュア製品である。19の外面は指で粗く形を整えただけである。21は蓋と考えられ、端部付近には２個一対で計４箇所の透かし穴が認められる。

22はＳＨ43出土である。脚柱部のみ残存しており、透かし孔を確認したのは１箇所だけである。

23～50はＳＨ114出土である。甕は口縁部が受口のもの（23)、頸部で緩やかに外反するもの（24～26)、頸部で屈曲し外反するもの（27）に分けられる。底部は、平底（34・35）と台が付くもの（29・31～33）とその中間になる上げ底状のもの（28・30)がある。36の高杯はＳＨ63出土の８と類似した形状である。高杯脚部は透かし穴の径が0.8㎝程度と小さい。ほとんどの高坏は櫛描横線文が３段施されており、一部には櫛描横線文の間に刺突文を施すもの(38）もある。43・44は小型の壺、45～50は大型の壺である。口頸部から肩部にかけて櫛描きが施されるもの（45・47～49）と施されないもの（46）がある。

51～64はＳＨ223出土である。甕は頸部で緩やかに曲がるもの（51）と明瞭に屈曲するもの（52～55)がある。51は口縁端部に刻みがあり、肩部に１カ所焼成後の穿孔が認められた。56・57は高杯脚部で、56は２個一対で４方向の、57は３方向の透かし穴がそれぞれ認められる。56・58は北東主柱穴内から出土した。58～60は小型の壺、61・62は大型の壺である。58は口縁端部で大きく外反する。外面に煤が付着する。62は絵画土器で、壺体部に舟・鹿・不明のものがヘラ描きされている。北西主柱穴上から出土した。詳細はまとめの中（57ページ以降）で記述する。63は器台である。中央部に４カ所、下部に４カ所透かし穴がある。口縁部外面は竹管文、口縁部上面は竹管文と扇文を、中央部は櫛描横線文の間に竹管文を施している。この竹管文は３段確認でき、上段と下段は上から見て反時計回りに、中段は時計回りに施文している。いずれの施文も隙間無く、非常に細かいピッチで施されている。

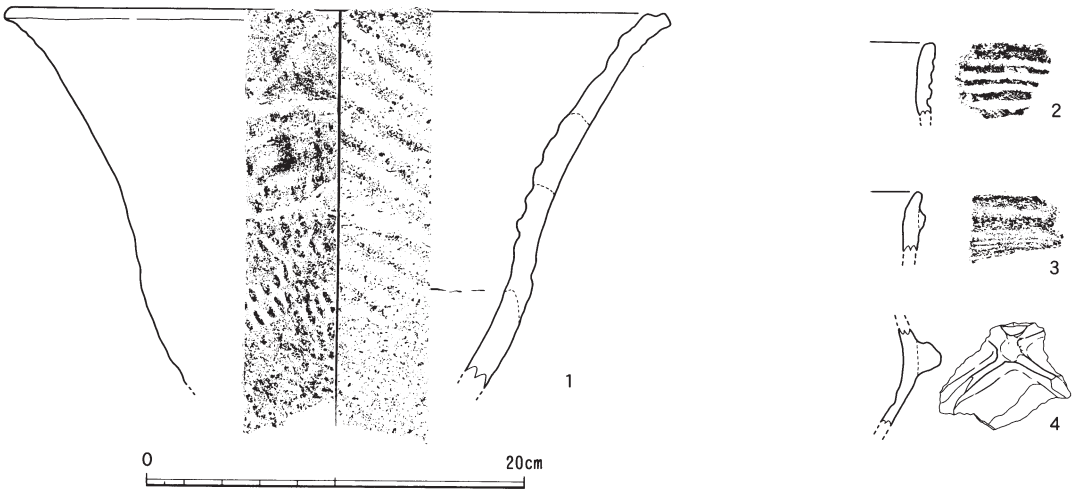
65～69はＳＨ244出土である。66は口縁部外面に竹管文、口縁部上面に竹管文及び波状文を施している。67・68はミニチュア土器である。

70～73はＳＨ269出土である。70は２個一対の透かし穴を持つ小型の高杯である。口縁端部にススが付着している。71～73は壺である。72は受け口状で、器壁が薄い。口縁部外面に刺突文が施されている。73は広口壺で、口縁部内面に刺突文、頸部から肩部にかけて櫛描き横線文、波状文が施されている。

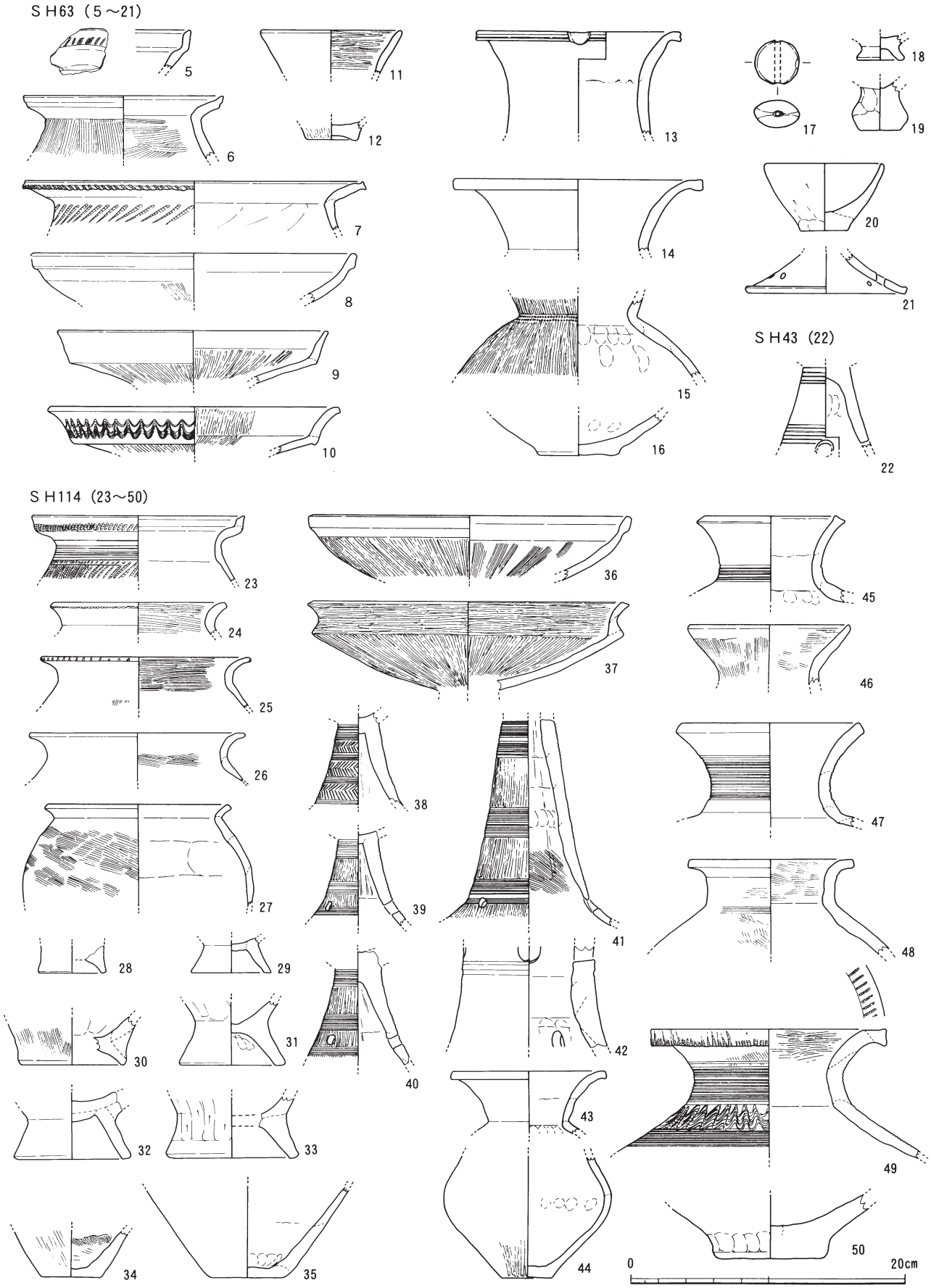
74・75はＳＨ270出土である。75はブランデーグラス型の高杯である。主柱穴内から出土した。

76・77は調査区東側の落ち込みから出土した。77は底部に焼成前穿孔がなされている。

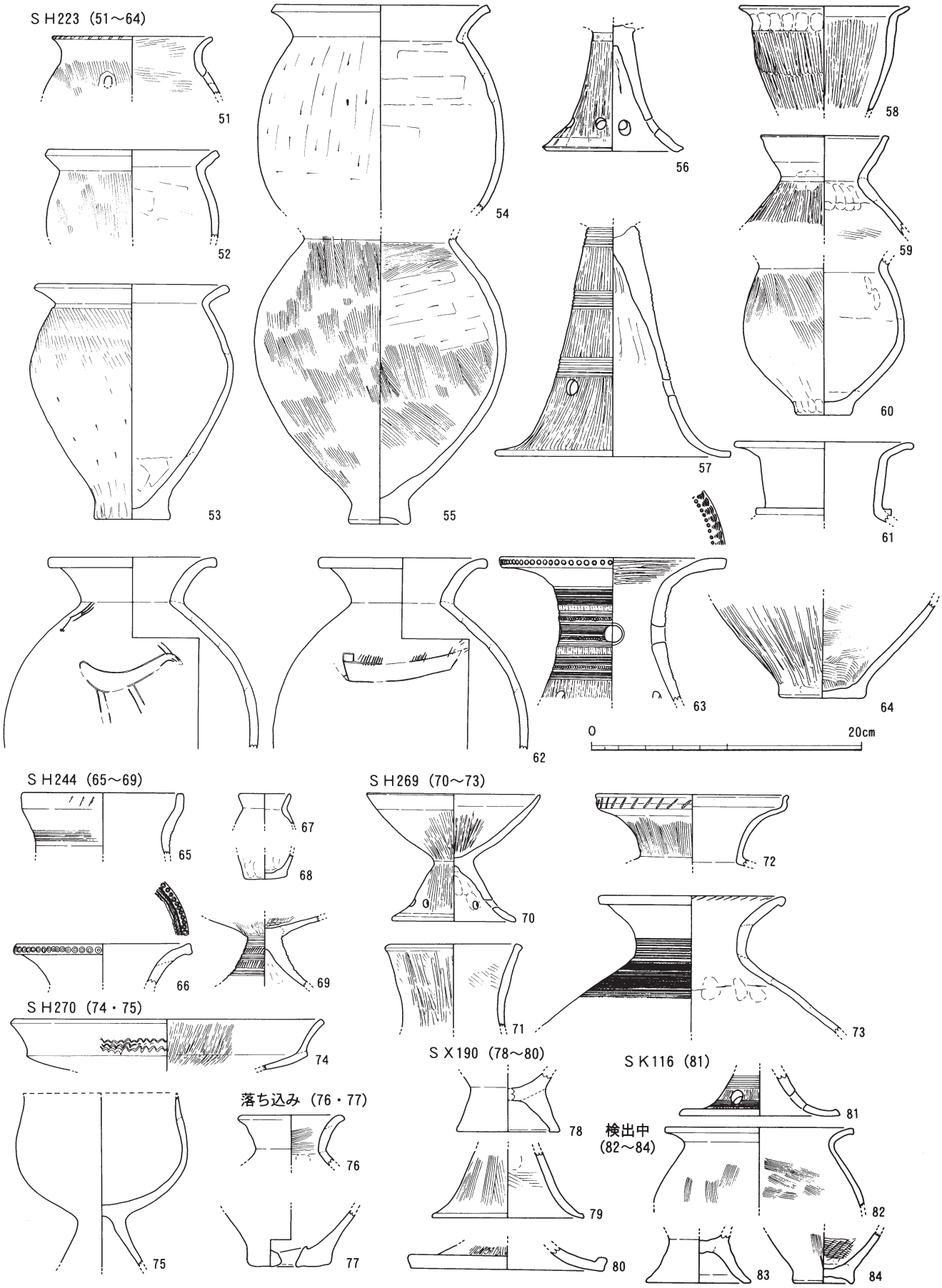
78～80はＳＸ190出土である。80は脚端部のみに



第36図　出土遺物実測図（縄文時代の土器）（Ｓ＝１：４）



第37図　出土遺物実測図（弥生時代の土器１）（Ｓ＝１：４）



第38図　出土遺物実測図（弥生時代の土器２）（Ｓ＝１：４）

煤が付着している。

3　古墳時代・古代の土器（第39図85～103）

遺構出土のうち、ほとんどが土壙墓からの出土である。85・86はＳＸ173、87・88はＳＸ257、89・90はＳＸ250、91はＳＸ255、92はＳＸ139、102はＳＸ251からそれぞれ出土した。

85～88・90・93～102が須恵器である。このうち85・86・93は、口径が14cm前後で器高は４cm弱と口径の割に器高が低い。口縁端部は明瞭な面を持たず、田辺昭三氏の陶邑編年(以下､｢田辺編年｣と呼称)[1]のＴＫ43型式併行期と考えられる。

87・88・90・94～97は、口径が9.5～10.5cm、器高は3.5cm前後となり、小型のものである。杯身受部は短く内傾し、端部は丸くおさめ、概ね田辺編年のＴＫ217型式併行期と考えられる。97の底部には、「×」とヘラ描きされている。

98は高杯であり、脚部にはカキ目が施される。残存部からは、透かし孔の有無は不明である。

99は壺である。外面口縁端部には直線文が、その下部には、比較的細かい波状文が施されている。

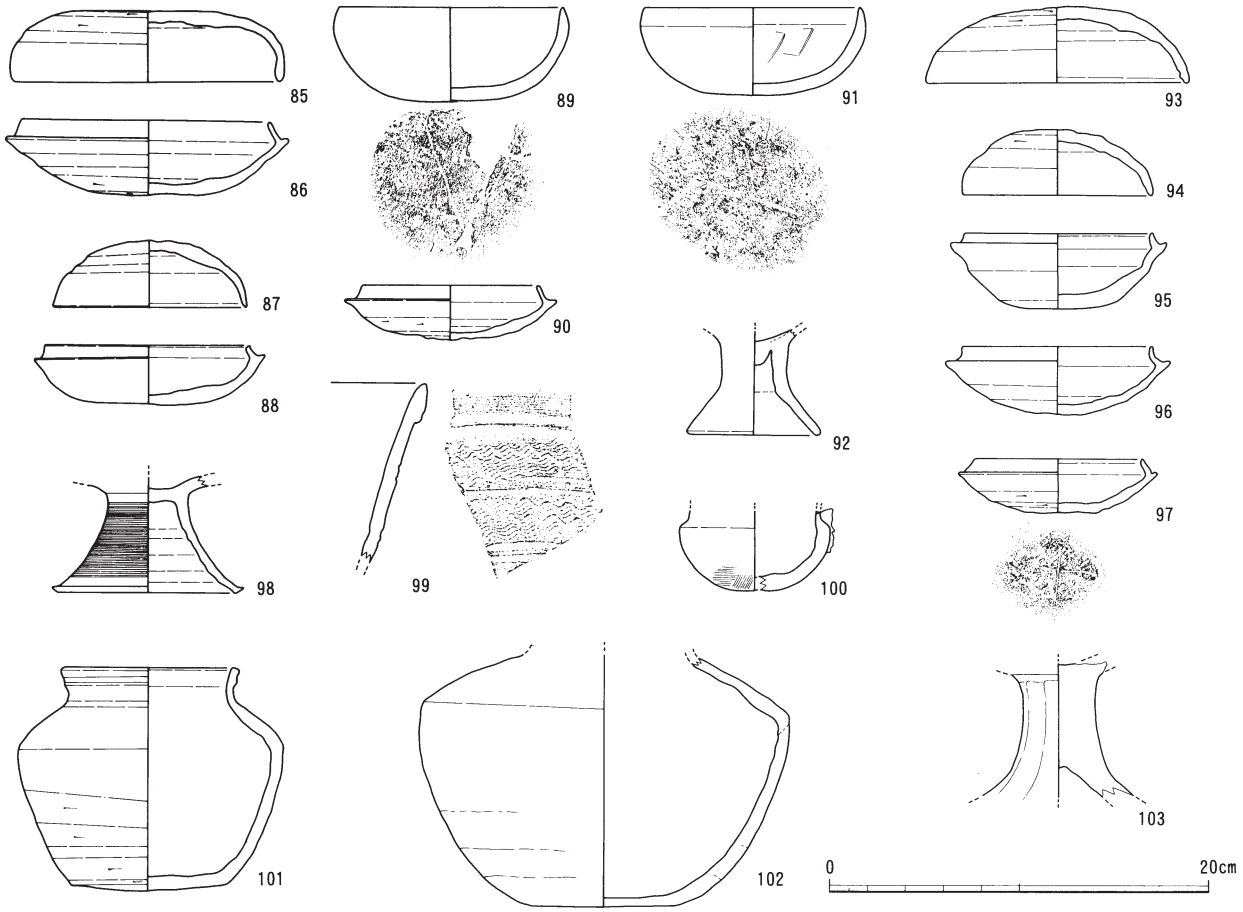
100は須恵器小片で口縁部が欠損している。体部は丸く、欠損するが把手状のものが１箇所付いていたと思われる。形状から、把手付椀と考えられる。

101は須恵器短頸壺である。底部は平らで肩部はわずかに張る。頸部は底部径とほぼ同じであり、頸部から口縁部にかけて肥厚している。底部及び体部下半2/3程度を削っている。

102は須恵器壺体部である。底部は平らで肩部が強く張っている。体部の形状から、長頸壺であろう。器表が著しく摩耗し、調整等は不明である。

103は土師器高杯脚柱部である。脚柱は削り出し、７面の明瞭な面取りを施している。

89・91・92は土師器である。89・91は椀で、いずれも底部から口縁部にかけて丸みを持つ。口縁端部



第39図　出土遺物実測図（古墳時代・古代の土器）（Ｓ＝１：４）

はやや内彎し、底部には木葉痕が付く。

４　中世の土器・陶器類（第40～43図104～163）

104～115は土壙墓から出土した。

104～108は、ＳＸ117から出土した。104が土師器小皿で、105～108は陶器皿である。104は薄手のつくりで、口縁端部がわずかに立ち上がっている。全体的にナデ調整が施されているが、底部外面は指押さえが残っている。105～108は底部付近が丸みを帯び、口縁部にかけて直線的にのびている。口縁端部に面をもつ。なお、106・108の内面は若干擦れている。藤澤良祐氏の編年（以下、「藤澤山茶椀編年」と呼称）[2]の第６型式に比定されよう。

109～112はＳＸ154から出土した。いずれも土師器小皿である。104とほぼ同じつくりである。

113～115は土師器皿である。113はＳＸ129から、114はＳＸ125から、115はＳＸ172からそれぞれ出土した。113・114は口径11㎝台で、底部から口縁部にかけて緩やかに内彎し、全体的に薄手である。

116～144はいずれも蔵骨器である。産地は常滑産が圧倒的に多く、次いで南伊勢系の土師器鍋、古瀬戸である。

常滑産のものは、116・117・119・121・123・125～127・129・130・137～142である。そのうち中野晴久氏の編年（以下、「中野編年」と呼称）[3]の１ｂ型式に130が、３型式に121が、６ａ型式に117が、６ｂ型式に116・119・123・127・141が、７型式に129・137・138・140・142が、10型式に125・126・139がそれぞれ比定される。116は肩部に印花文、127にスタンプ文が押され、119・123・125・126・129・137～142にはそれぞれヘラ記号が描かれている。ヘラ記号は肩部に描かれるものがほとんどであるが、126のように体部にも描かれたものもある。

南伊勢系の土師器鍋は128・131～136である。時期はいずれも伊藤裕偉氏編年[4]の第３段階で収まり、131・135が第３段階ａ型式に、128・134・136が第３段階ｂ型式に比定される。132は古い要素を残すもので、北勢・尾張地域でよくみられる形態である[5]。136は体部下半に３ヶ所、焼成後穿孔が認められる。

古瀬戸は、120・124・143・144である。藤澤良祐氏の編年（以下、「藤澤古瀬戸編年」と呼称）[6]の前期第２小期に143が、前期第４小期に144が、中期第１～２小期に120が、後期第１～２小期に124がそれぞれ比定される。124は肩部に３ヵ所耳が付いている。144は肩部にスタンプを押す。120は把手が欠損し、頸部及び注口を、143は頸部をそれぞれ打ち欠いている。

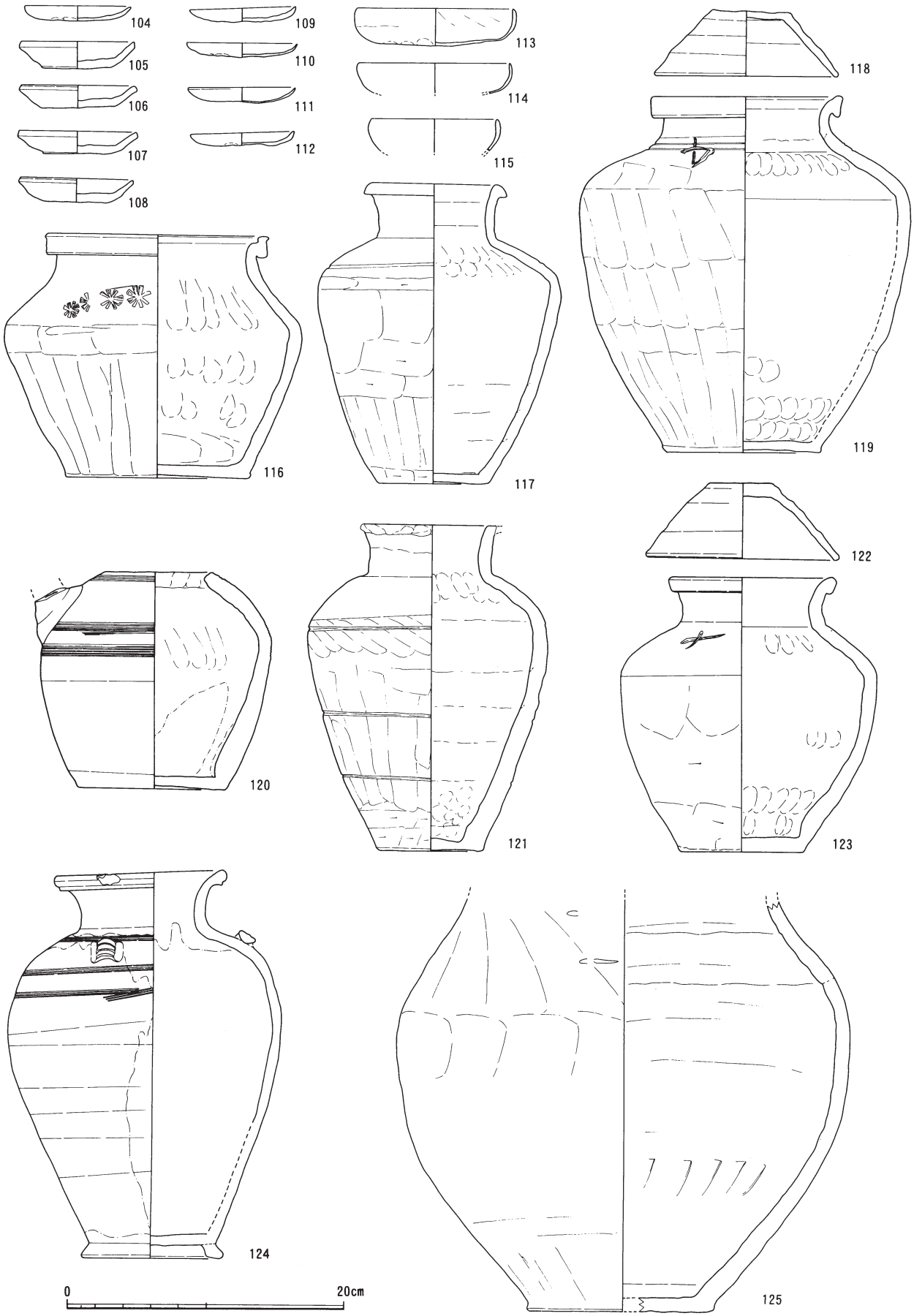
119と123はいずれも山茶椀を蓋に転用している。これらは藤澤山茶椀編年第９型式に比定される。当遺跡ではこの他に河原石を蓋に利用したものも確認している（116・124・126・129～131・137・140・143）。

145～163は検出時に集石の間から出土した。いずれも後世の石の移動、削平などで本来の位置を留めていないものである。

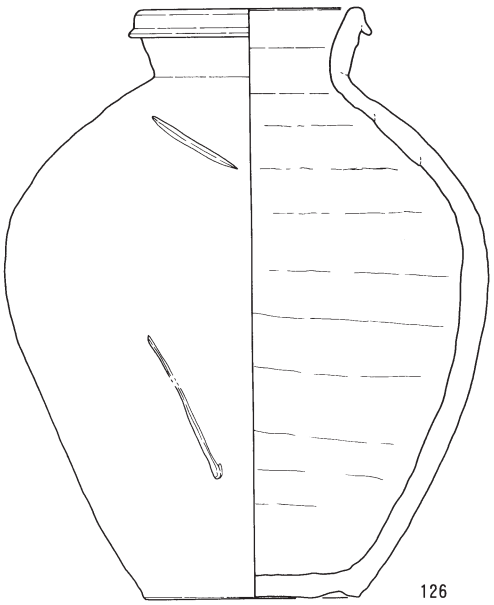
145は陶器皿である。自然釉が付着し、粗いつくりである。146～156は土師器皿である。薄手で器高の低いもの（146・148～151）、厚手で全体的に丸みを帯びたもの（147）、薄手で底部から口縁部に外方へ広がるもの（152・153）、薄手で口縁部を強く横ナデするもの（154）、薄手で口縁部を強く横ナデし且つ内面に稜線が付くもの（155）、薄手で口径・器高共に大きいもの（156）などがある。時期は、154が15世紀中頃、152が15世紀後半、147が15世紀末、146・148～151が15世紀末から16世紀にかけて、155が16世紀代のものとみられる[7]。157は古瀬戸水滴である。時期は藤澤古瀬戸編年の古瀬戸後期に比定されよう。153～163は常滑産の陶器である。158・159・161が壺、その他は甕である。中野編年で見た時期は158・161が６ｂ型式、160・162・163が９型式、159が10型式にそれぞれ比定される。なお、159・161・163の肩部にはヘラ記号が描かれている。

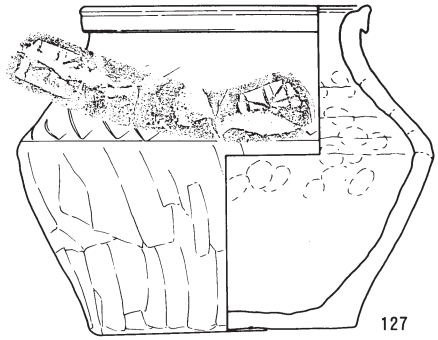
５　金属製品（第44図188～195・199～204）

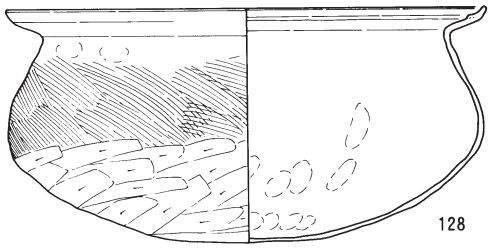
188は刃渡り40㎝弱の短刀である。刃部には若干木質部分が残存し、柄部には目釘穴が確認される。189は、錆化著しいものの、断面が逆三角形であるため、小刀の類かと思われる。188・189ともにＳＸ113から出土。190～195は釘である。いずれも断面は方形である。194のみ、中央部分でほぼ90度に折れ曲がった状

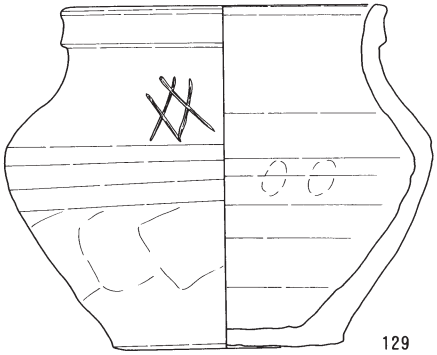


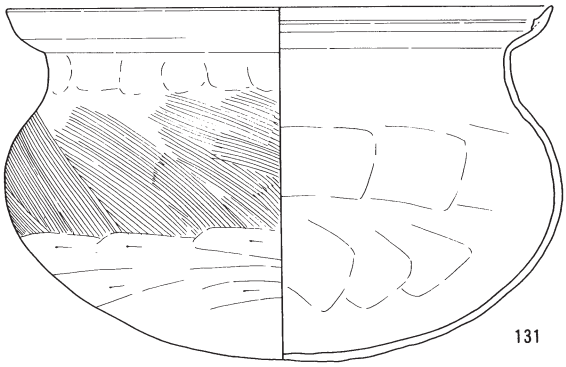
第40図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類１）（Ｓ＝１：４）

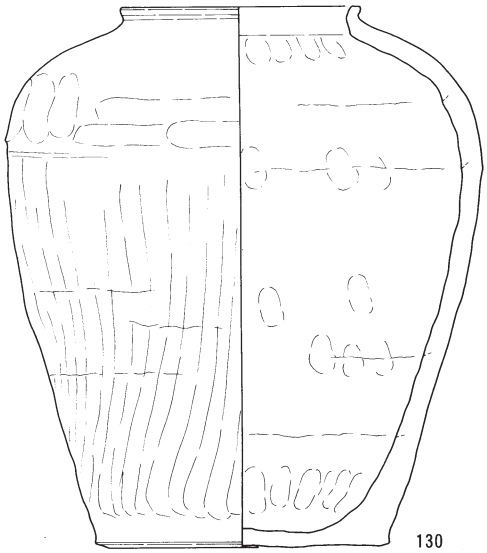


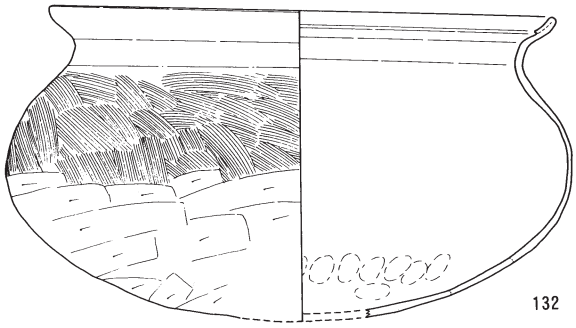


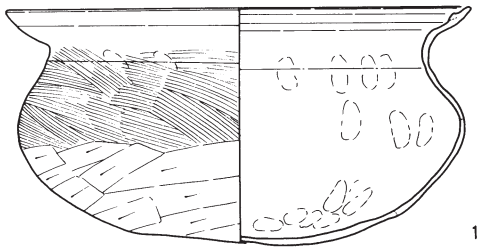






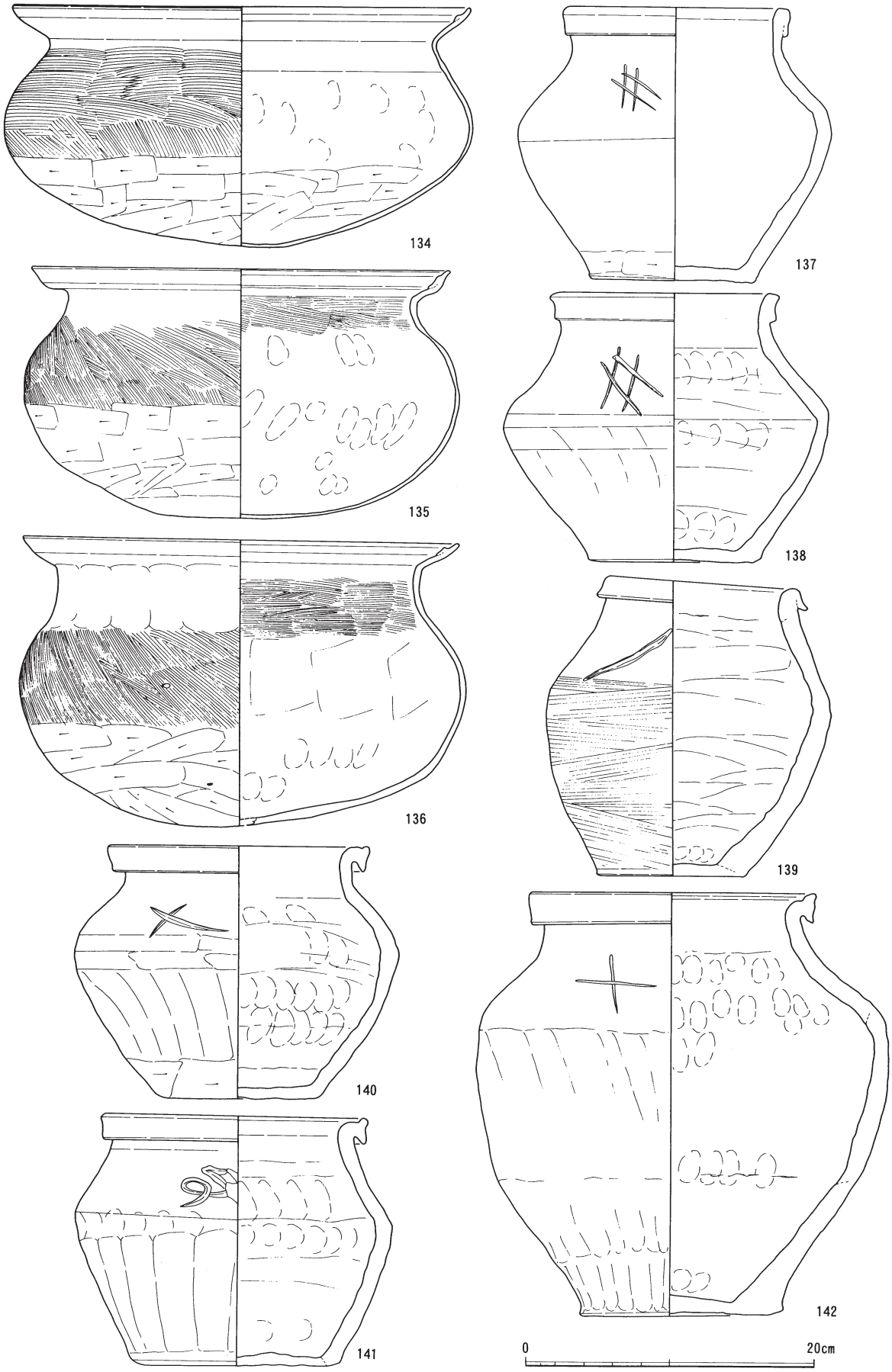




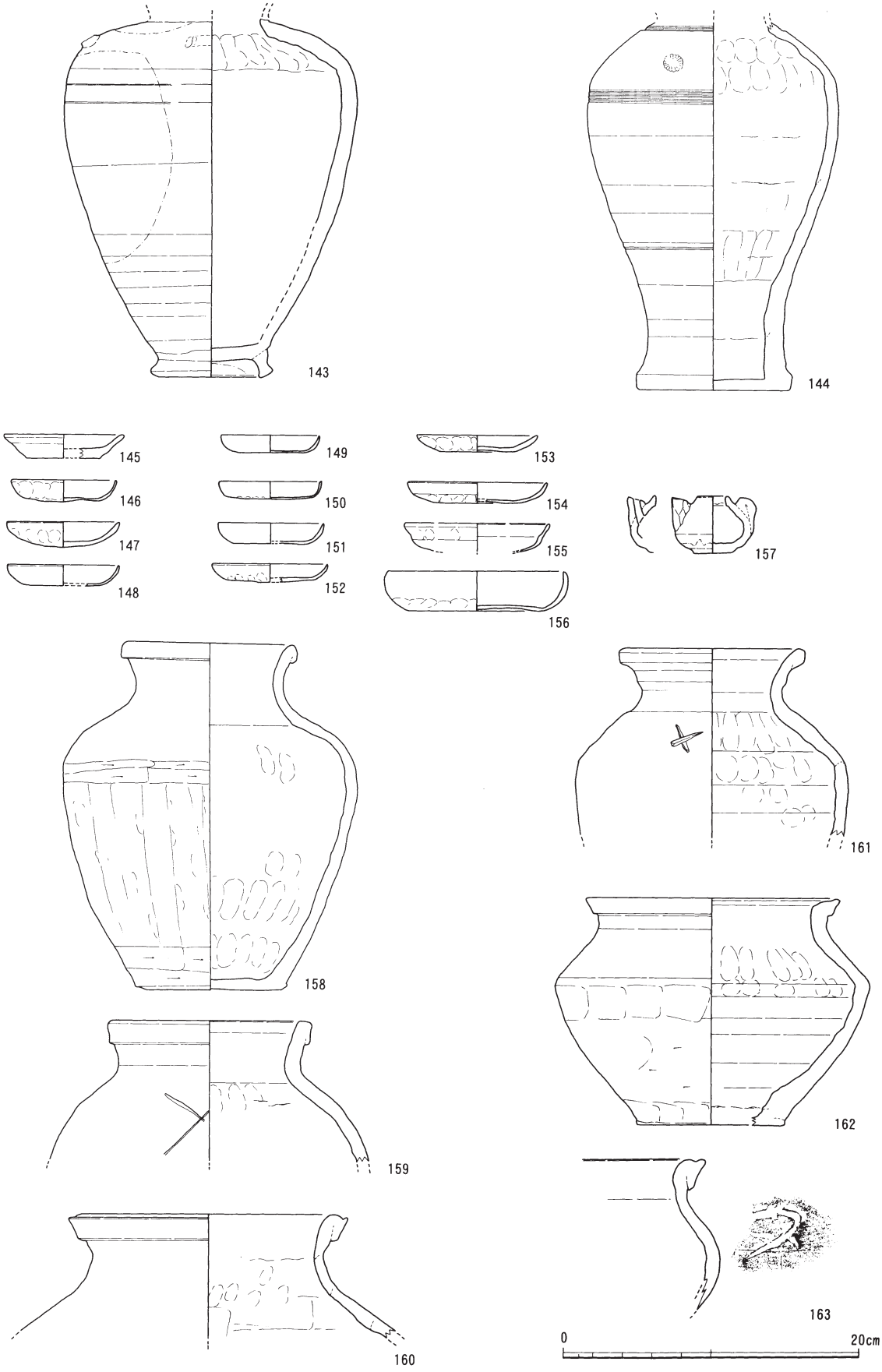


0　　20cm

第41図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類２）（Ｓ＝１：４）



第42図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類３）（Ｓ＝１：４）



第43図　出土遺物実測図（中世の土器・陶器類４）（Ｓ＝１：４）

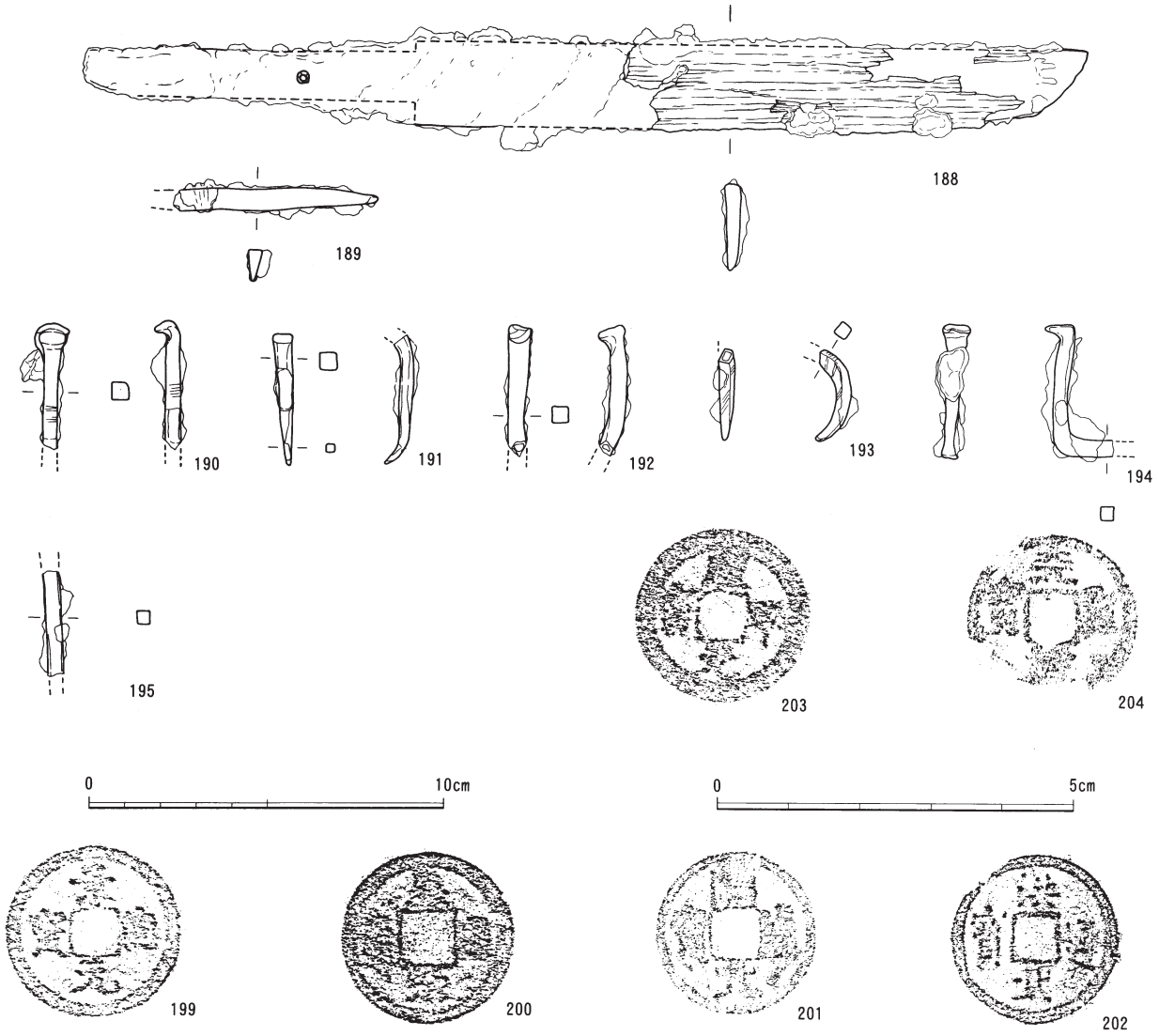
態で出土した。190～194は木棺墓ＳＸ170から出土。199～204は銭貨である。199～202の４枚は集石35内の礫と礫の間から重なって出土した。

6　石器・石製品（第45～48図207～258）

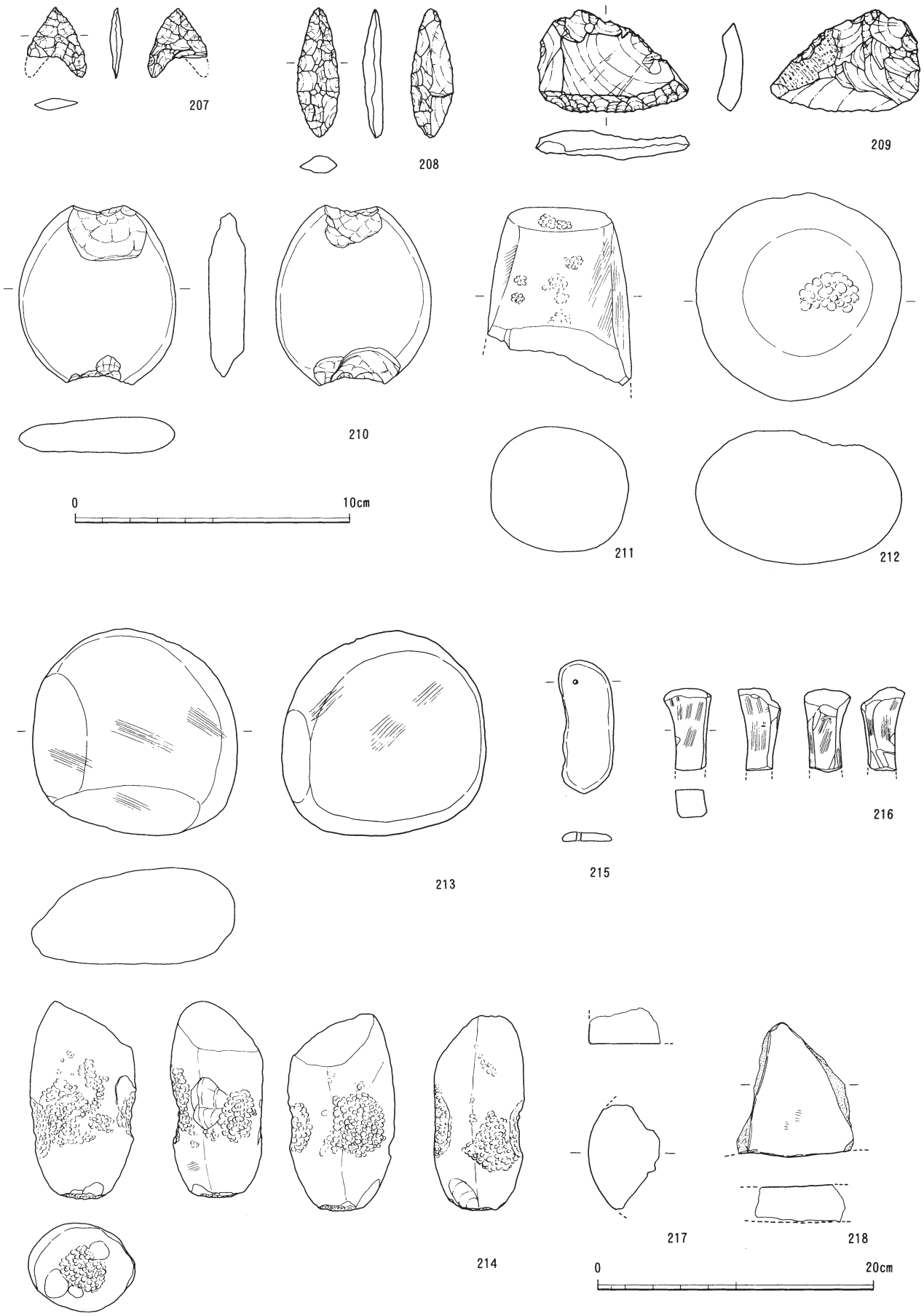
石器類(207～218)　207はチャート製凹基無茎石鏃である。片側の脚部が欠損している。208もチャート製石鏃であるが、片面片側の刃部は粗割りのままで、細部調整が施されていない。209はスクレイパーである。一部自然面を残す剥片の側辺に、調整が施される。210は石錘で、扁平な円礫の両端を打ち欠いている。211は磨製石斧の基部と思われるが、断面形がやや丸く、幅に対してやや厚みがある。一部敲打痕が残るが、丁寧に研磨されている。212は磨石で、下部に摺痕が認められる。213は全面を良く擦っている。214は叩き石で、側面に４箇所、端部に1箇所、それぞれ敲打痕が認められる。213・214はＳＨ114出土である。215は長さ9.5㎝の扁平な自然石の厚みを半分に割り、一方の端を穿孔したものである。ＳＨ269出土である。216は砥石である。残存部はどの面も擦痕が認められる。217は不明品である。底部と側面の一部が残存し、円柱形のものになると思われる。218は砥石である。擦痕が認められる面以外は欠損している。

石塔類(219～258)　今回の調査で257点（破片含む）出土した。多くは五輪塔で占められ、宝篋印塔・仏像等が少量出土している。

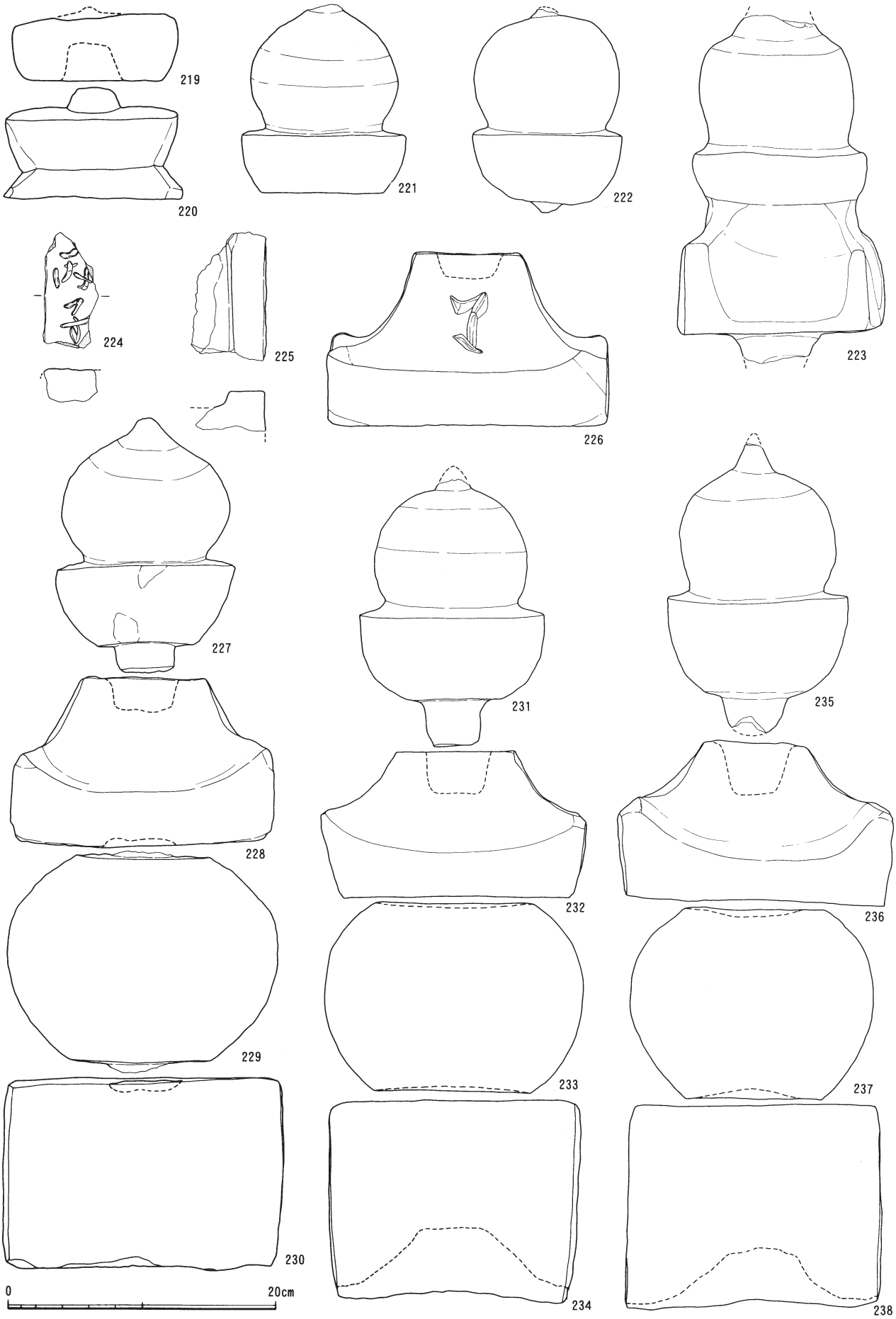
組合式五輪塔(219～224・226～254)　五輪塔は、組合式五輪塔と一石五輪塔に大別できる。組合式五輪



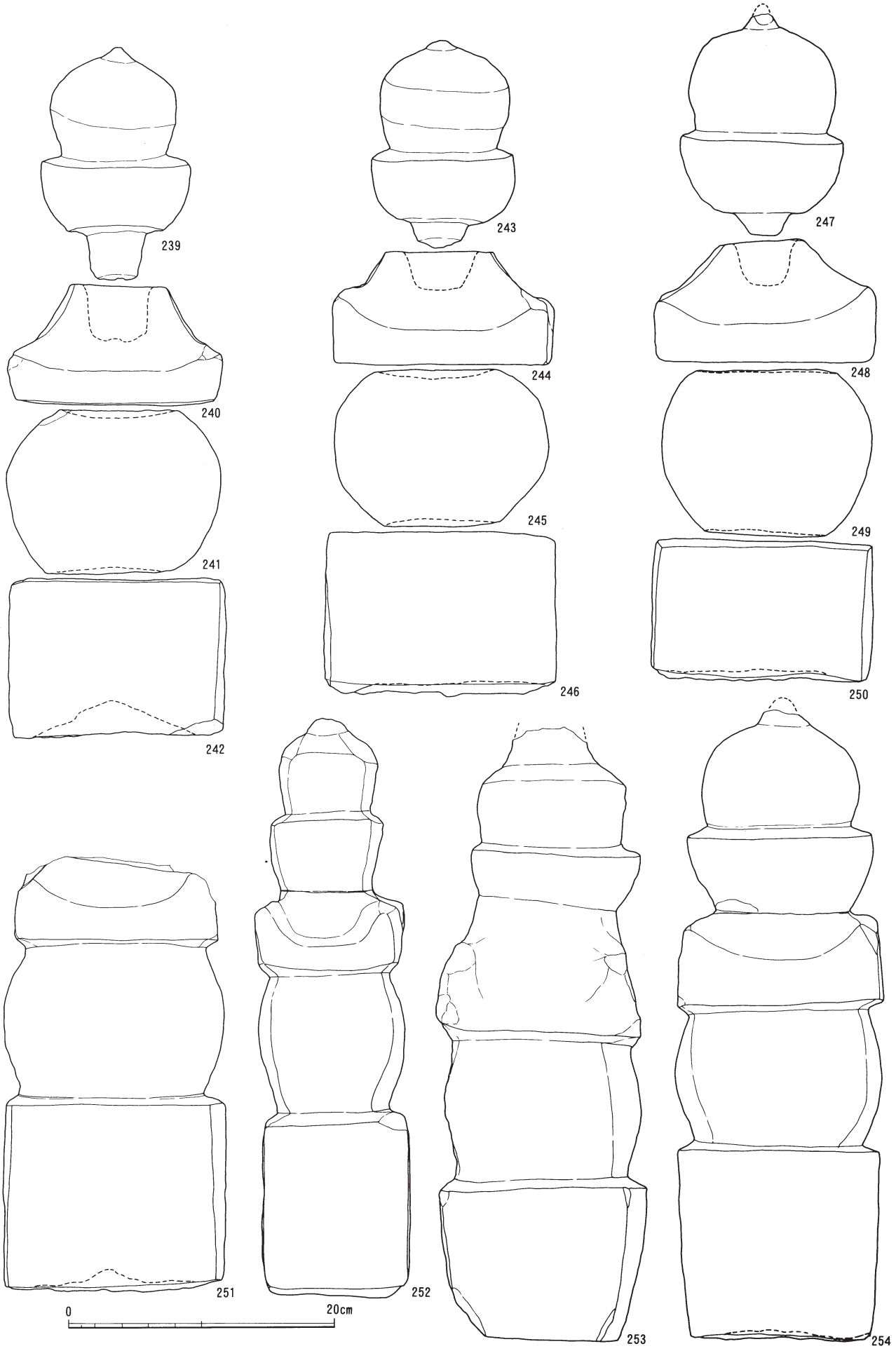
第44図　出土遺物実測図（金属製品）（188～195　Ｓ＝１：２、199～204　Ｓ＝１：１）



第45図　出土遺物実測図（石器・石製品１）（207～212　S＝１：２、213～218　S＝１：４）



第46図　出土遺物実測図（石器・石製品２）（Ｓ＝１：４）



第47図　出土遺物実測図（石器・石製品３）（Ｓ＝１：４）

塔の多くは227～250のように、空風輪、火輪、水輪、地輪に分割成形して、組み合わせるものであるが、中には219・220や223のように空輪、風火輪に分割するものや、空風火輪を一石で造るものも若干認められる。また、221のように、火輪とつなげる軸部分が無く、風輪の下部が平らになるものも、ごく少量だが認められる。224は地輪の一部とみられ、側面には「丙子」と刻字されている。226は１ヶ所梵字が刻まれている。227～230は花崗岩製である。231～250の砂岩製のものと比較すると、形状では、水輪の上下に突起状の軸が付き、火輪と地輪にはそれに対応する凹みが確認される点が異なる。砂岩製の水輪は、突起状の軸は認められず、皿状に若干凹んでいる。また、砂岩製の地輪は下部に凹みが確認されるものが多い。

一石五輪塔(251～254)　いずれも砂岩製である。251は空風輪を欠く。地輪の断面形はほぼ正方形となるものが多いが、252のように断面が長方形になるものもある。地輪の下部中央は組合式五輪塔と同様、若干凹んでいる。

宝篋印塔(255～257)　255・256は相輪部、257は笠部である。255・256はいずれも頂部・基部ともに欠損している。257は隅飾が外傾している。

仏像(258)　礫の片面に仏像の浮き彫りを施す。顔・体部は大きく、袈裟の部分、光背の部分は線彫りで表現している。

〔註〕

(1)　田辺昭三『須恵器大成』　1981

(2)　『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990に所収されている論考を基に、掲載された各文献を参照した。

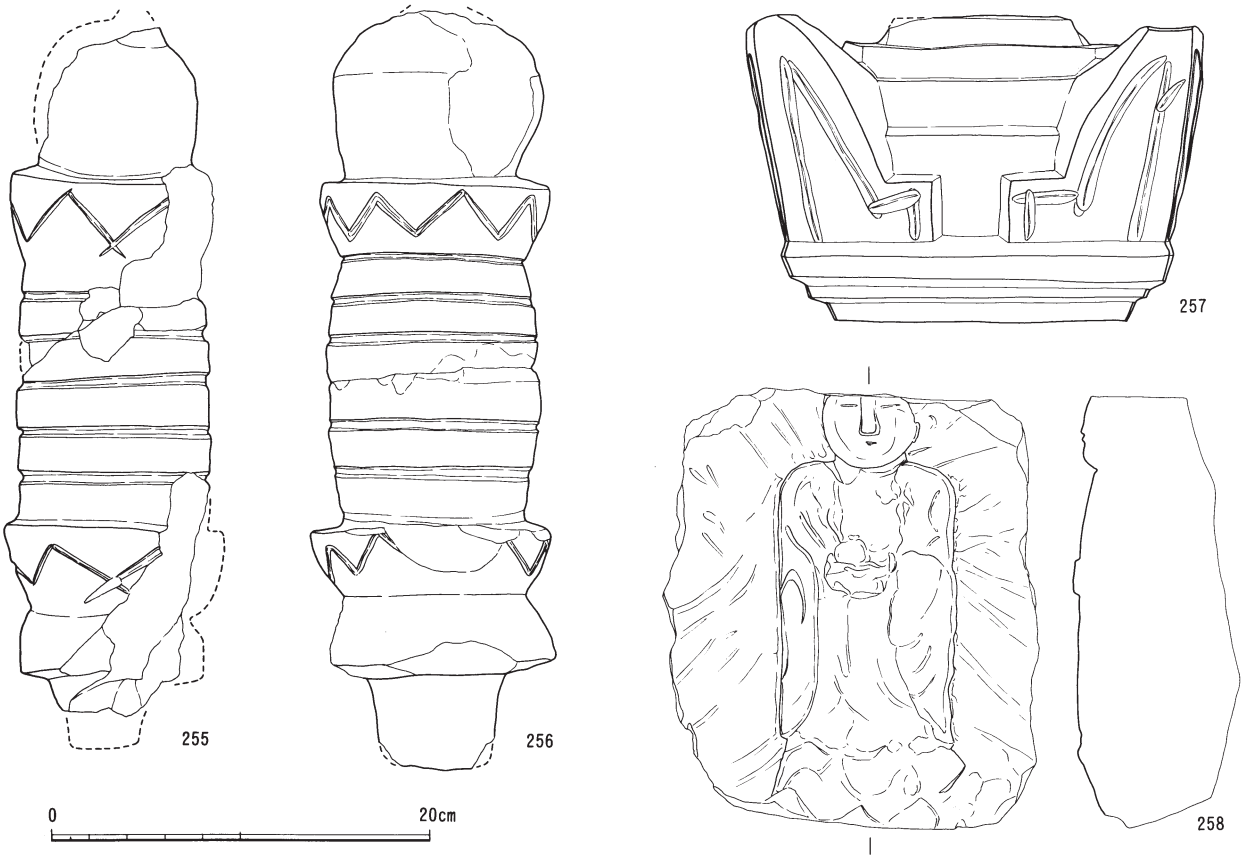
(3)　中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館　1995

(4)　伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie History』vol.1　1990

(5)　伊藤裕偉氏のご教示による。

(6)　藤澤良祐「瀬戸古窯址群」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯　1995・「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第八号　1981・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ　1991

(7)　伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター1993・伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996



第48図　出土遺物実測図（石器・石製品４）（Ｓ＝１：４）

Ⅳ まとめ

1　絵画土器について

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡から絵画土器が出土した。この絵画土器には舟・鹿等が描かれており、これらの画材の組み合わせは全国的に見ても珍しいといえる。この絵画土器について、出土遺構・出土状況も含めて整理しておく。

①　絵画土器の出土状況について

絵画土器は、調査区の最東端にあたる竪穴住居ＳＨ224[1]より出土した。この竪穴住居の東側は斜面となり、低地との比高差は約30mで、遠く伊勢湾を見渡すことのできる場所である。

この竪穴住居は貯蔵穴・壁周溝は確認したものの、炉跡が確認されなかったことが、他の住居と異なる点である[2]。絵画土器は舟の画材を上に横転した状態で、床面の高さで出土したが、北西主柱穴上に位置していた。状況的に見て上屋の無い状態（廃絶直後）で、投棄あるいは置かれたものと考えられる。

②　土器について

土器の形状等　土器は口縁部から体部中央にかけて確認した。体部の形状は、最大径がほぼ中央に来る、やや縦長の球形になると見られる。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は逆ハの字状に広がり、口縁端部は肥厚している。

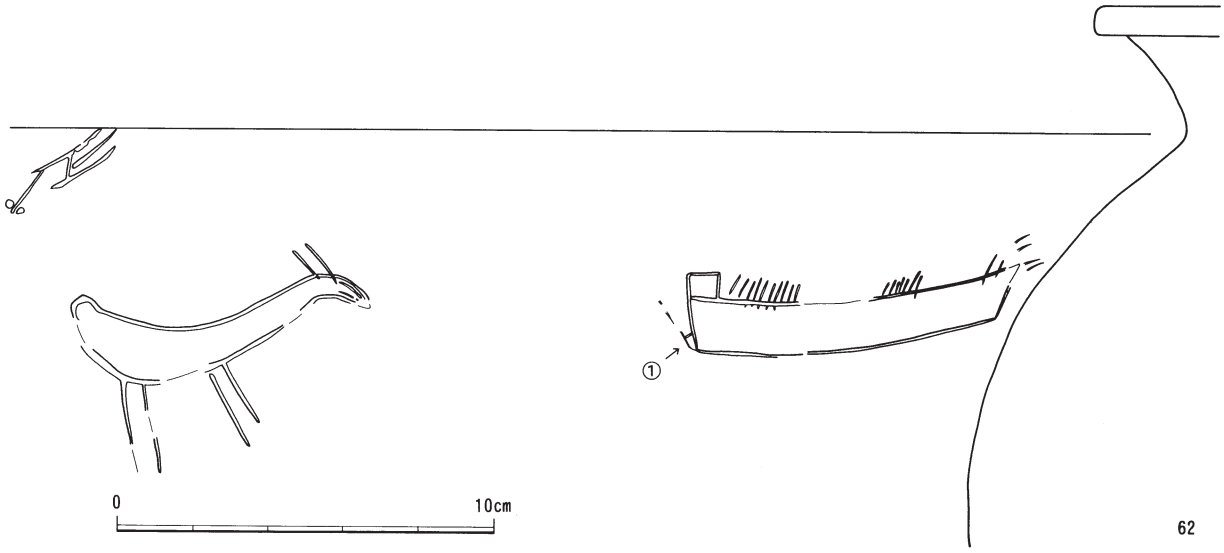
体部内面はナデ調整が施されているが、頸部から肩部付近までの範囲で３段程、指オサエが明瞭に残っている。体部外面は５～６本／㎝のハケ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部から頸部にかけては、内外面共に横方向にナデ調整を施している。体部外面には最大径付近で一部ススが付着していた。

画材について　画材は、３箇所で確認した。他遺跡出土絵画土器と比較してみると、３箇所で描かれた画材のうち２箇所は、それぞれ舟と鹿を画材にしたとみられる。残る１箇所の画材は、不明である。

いずれも焼成前に描かれている。線の幅は太い個所で1.5㎜程度、細い個所では１㎜以下である。先端の鋭利なヘラ状のもので描かれたと考えられる。次に個々の画材について、見ていきたい。

画材―舟―　舟は、壺肩部、約10.5㎝×3.5㎝の範囲に描かれている。

船体と考えられる大きな長方形の右側が鋭角となり、左側が鈍角となる。船体と考えられる箇所の左側には、左斜め上方へ細い線が描かれ、この線と船体左側の線を結ぶように横線が１本描かれている。船体の形状から、この舟は右向きに描いていると考えられ、船体の左端の斜線と横線（下図①）は櫓・舵などを表現していると思われる。



第49図　絵画土器画材配置図（Ｓ＝１：２）

船体の上には、左側に方形の箱状のものがあり、その右側には短い斜線が17本確認できた。短斜線が描かれている範囲の中央部は器表面が剥離しており、実際はこの部分にも同様の短斜線が描かれていたとみられる。船体右側上部は途切れているものの、長い斜線が２本描かれていたとみられる。なお、短斜線と長斜線の間は何も描かれていなかった。船上左側の箱状のものは左側縦線が長く伸び、船尾部分も表現していることから、積荷というよりも舟の一部分とみられるか[3]。短斜線と長斜線はいずれも船体上部で線が止まっていたため、櫂である可能性は低く、舟の構造物の一部か人を簡略化させたものの表現と考えられる。短斜線と長斜線の間は1.5㎝程空いており、これらが仮に人を表現したものとするならば、例えばシャーマン的な人（長斜線）と一般の人（短斜線）等の描き分けがなされていたと考えられる。

描き順は、判然としない部分もあるが、概ね短斜線→船体→長斜線の順となる。描き順から見ても短斜線と長斜線は表現対象の違いがあるといえる。

画材 ― 鹿 ―　鹿は、船尾から7.5㎝程離れた左側、約8.0㎝×6.0㎝の範囲に１頭のみ描かれている。

鹿は右向きで角を生やしている。頭から尻尾までを三日月状の曲線で表現し、体部は格子文等で充填していない。足と２本の角は、１本ずつほぼ直線に近い形で表現している。なお角は枝分かれしていない。顔部分は内側に２本の線を描き足している。ちょうど口元の部分が土器の接合個所で欠落しており、顔の内側を走る２本の線が口元で繋がるかどうかは不明である。

画材 ― 不明 ―　不明のものは、鹿の左斜め上、約3.0㎝×2.5㎝の範囲に描かれている。

カタカナの「エ」の字状の右側に横線を入れたものを左側が下になるよう斜めに倒し、「エ」の描き始め部分から左下へ斜めに１本線を入れ、下端にはこの線を挟んで２箇所に点が付いている。

これは何を画材としたものなのか。想像を逞しくして、点部分を目、斜線を胴体、「エ」部分を羽と捉えて「飛翔する鳥」、あるいは斜線を腕、「エ」部分を頭上または手に装着した羽と捉えて「鳥装をした人物」と見られなくともない。しかし、前者と考えた場合、鳥の絵画はあるものの飛翔した姿の画材は全国の出土例で確認されていない。また、後者として考えた場合、「鳥装をした人物」は近畿地方の遺跡等で出土しているものの、それらの出土例を見る限りでは、体の一部分のみデフォルメして描かれた例が認められないこと、基本的には円形・円弧状の頭部に羽飾りが付くこと、腕または衣装の袖先から３本の棒状の指先が描かれることなどから、形状が大きく異なる。また、当遺跡出土絵画土器の他の画材との構成を見た時に、舟・鹿は一部簡略化して描かれているが、一部をデフォルメしたような描き方はされていない。果たして一つの画材のみデフォルメして表現するのか疑問が残る。これらのことから、後者として捉えることも困難と考えられる。従って現時点では不明画材とし、今後の出土例の増加を待って判断したい。

画材の組み合わせ　今回の出土絵画土器には３つの画材が確認された。これらの画材の構成―始点・終点がどこになるのか―は、舟・鹿の向きと配置（双方の距離）をみる限りでは、左から右へ、不明のもの・右向きの鹿・右向きの舟と並ぶように捉えられる。これらの構成が何を意味しているのか。

舟と鹿の組み合わせの類例として挙げられるのが、鳥取県稲吉角田遺跡出土絵画土器[4]である。この絵画土器には太陽・船に乗った鳥装の人・建物群・木にぶら下がった銅鐸？・鹿が描かれている。これらの絵の組み合わせは、農耕に関連した思想・神話に基づく儀礼を表現していると考えられている[5]。当遺跡の絵画土器の組み合わせからみると、稲吉角田遺跡例と同様に農耕儀礼に関連したものの一端を示しているように思われる。

絵画の組み合わせで舟と鹿が確認された例は少ない。しかし、全国的にみて絵画土器には共通した画材が用いられており、一連の儀礼に関連した思想・神話などの流れを描いたと捉えるならば、この地でも同種の思想・神話等があり、その中の「舟」「鹿」等が選択して描かれたと考えられる。

今回は、絵画土器の出土状況・画材について整理するに止まった。画材については、細部を含めて何を表現したものか不明のものもあり、今後、検討すべき課題はまだ残っている。

2　ＳＸ190の性格について

この遺構は、竪穴住居ＳＨ63・ＳＨ244・ＳＨ269を切り、土壙墓ＳＸ257に切られる。ＳＨ63・ＳＨ269の所属時期は、出土遺物から天花寺Ⅱ式－２に、ＳＨ244は天花寺Ⅱ式－３にそれぞれ求められる[6]。また、ＳＸ257の時期はＴＫ217並行期である。このことから、この遺構の所属時期は、天花寺Ⅱ式－４(弥生時代後期後葉）～古墳時代終末期の間である。

この遺構が何であるのか。規模及び所属時期から、現時点では土壇状の施設あるいは古墳の周溝が考えられる。しかし、前者として考えた場合、非日常的な行為をした場所と捉えられるが、それに伴う遺物が出土していない点で根拠に欠ける。また、後者として考えた場合、上層の中世墓で削平された可能性があるが、結果的に主体部が確認されなかった点で決め手に欠ける。総合的にみれば、後者の可能性があることを示唆しておきたい。

3　奈良時代の遺構について

今回の調査区では、当該期の遺構がほとんど認められなかった。これは、ＳＸ140・190等の遺構がマウンド状に残存していたため、避けられたのではないかと考えられる。集落の中心は、第１次調査区以西であろう。

4　中世墓について

①　時期の細分と墓の変遷

今回の調査では、中世墓を100基以上確認した。蔵骨器等をはじめとする出土遺物の時期から、概ね13世紀後半から16世紀前半にわたり墓として機能していたと考えられる。約300年間の造墓活動を時期毎に概観し、各時期の特徴を押さえておきたい。

墓の時期は、蔵骨器・墓壙内から出土した共伴資料の時期に、集石の構築順序による先後関係、五輪塔の時期を考慮した。墓の変遷を整理するにあたり、煩雑化をさけるため、墓の時期＝墓を造って埋葬した時期とし、追善供養の期間までは含んでいないことをあらかじめ断っておきたい。

Ⅰ期(13世紀後半～末)

ＳＸ117・125・129・154の出土遺物から、これらの土壙墓が造られた時期と考えられる。他の土壙墓は出土遺物が認められなかったため時期決定の根拠を欠くが、概ね同一時期のものと推察される。

上部を構成している集石は、ＳＸ154でその一部が確認されたのみである。

Ⅱ期(13世紀末～14世紀末)

土壙墓はＳＸ172のみ該当するが、この時期には土壙墓が造られなくなる。

火葬墓は蔵骨器の時期を見る限り、土壙墓とは対照的で、この時期から盛行する。

Ⅱ期はさらにⅡａ期（13世紀末～14世紀中頃）とⅡｂ期（14世紀中頃～14世紀末）に細分される。

Ⅱａ期には、集石５Ａ墓・集石６Ａ墓・集石７Ｃ墓（135・136)・集石22Ⅰ墓・集石23内ＳＫ３が該当し、主に調査区南半で確認される。

Ⅱｂ期には、集石６C墓（140～142)・集石７Ａ墓(138)・集石７Ｂ墓・集石14Ａ墓・集石22Ｂ墓・集石23内ＳＫ７（129)・集石25A北墓・ＳＸ246・ＳＸ248・ＳＸ249・集石27・集石28Ａ墓が該当する。また、集石22Ｅ墓の集石が22Ⅰ墓を包括する形で確認されており、蔵骨器の確認されなかった火葬墓もこの段階には造られた可能性がある。

調査区南半では、Ⅱａ期に造られた墓の周辺に新たな区画を造る傾向が窺え、さらに調査区中央東側への広がりが確認できる。

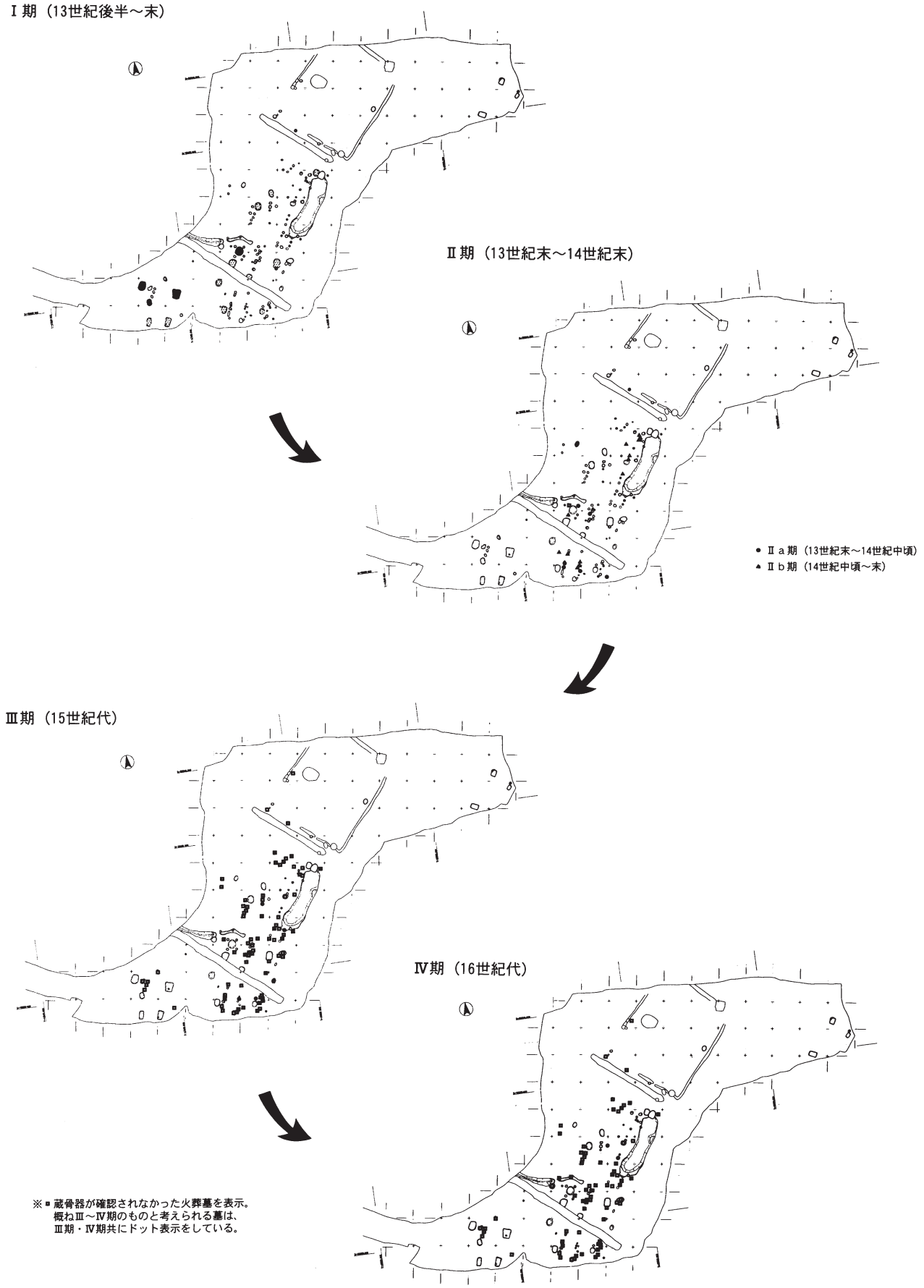
明瞭な区画を有する集石は、この時期に出現する。

Ⅲ期(15世紀代)

ＳＸ181・ＳＸ245・ＳＸ246・集石６Ｃ（139)・集石35Ｂ南墓が該当する。蔵骨器を持つ火葬墓は、Ⅱ期程の造墓活動は認められない。

区画を有する集石は、引き続き認められる。その一方で、区画石を持たない集石も確実にみられ、集石の形態が複雑化するのが、この時期と考えられる。組み合わせ式の五輪塔は、少なくとも当該期の後半には確認されるようになる。当時の位置を留めているとみられる五輪塔地輪の多くは、蔵骨器を持たない火葬墓の直上で確認されており、蔵骨器を持たない火葬墓はこの時期以降には確実に多くなるとみられる。

なお、Ⅲ期の後半以降、集石間から古銭が出土し


Ⅰ期（13世紀後半～末）
Ⅱ期（13世紀末～14世紀末）
● Ⅱａ期（13世紀末～14世紀中頃）
▲ Ⅱｂ期（14世紀中頃～末）
Ⅲ期（15世紀代）
Ⅳ期（16世紀代）
※■蔵骨器が確認されなかった火葬墓を表示。
概ねⅢ～Ⅳ期のものと考えられる墓は、
Ⅲ期・Ⅳ期共にドット表示をしている。

第50図　中世墓変遷図

たり、土師器皿片が一定量出土したりしている。

Ⅳ期(16世紀代)

集石35Ｃ墓と集石25Ａ南墓が挙げられる。蔵骨器を持つ火葬墓は依然少ないが、集石間で土師器皿片が出土すること、一石五輪塔が一定量出土していることから、蔵骨器を持たない火葬墓が引き続き造られていた可能性が考えられる。

墓の終焉時期

これらの墓は、土塁ＳＺ１とそれに伴う溝ＳＤ２に削平されている。この土塁と溝は現在の天華寺に伴う方形区画と考えられる。天華寺は天華寺由緒記によれば、元和元年（1615）にこの地に再建されたとあり[7]、中世墓は遅くとも17世紀初頭には終焉したとみられる。さらに言うならば、再建時に墓域が改変されるとなれば、石塔類は他所へ移動すると考えられるが、今回の調査で五輪塔地輪が当時の位置を留めた状態で多数出土している。また、後世に寄せ集めたと考えられる集石の中にも多数の五輪塔が混入していたことからも、天華寺再建時には墓の荒廃が進んだ状態だったのではないかと思われる。

画期について　墓の変遷を見た中で、２回の大きな画期が認められる。

ひとつは、Ⅰ期とⅡ期の間である。Ⅰ期の埋葬形態が土葬であるのに対し、Ⅱ期以降火葬に転換する。さらに、集石の先後関係をみていくと、興味深い事実が浮かび上がる。土壙墓に伴う集石と火葬墓に伴う集石がそれぞれ確認できたのは集石22墓である。

【集石22墓】　この中で切り合い関係、一部重複関係が認められるものは、集石22Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｈ・Ｉである。

この中で集石の先後関係と墓壙を対応してみると、

①集石22Ｆ　土壙墓ＳＸ154

↓（完全に削平）

②集石22Ｅ・Ｉ[8]　　火葬墓壙（蔵骨器有）

集石22Ｅ墓

↓（一部共有）

③集石22Ｃ　火葬墓壙集石22Ｃ墓、

③集石22Ｈ　火葬墓壙集石22Ｈ墓

となる。②以降の火葬墓を造る時は集石の一部を共有しているが、②の火葬墓を造る時はそれ以前の①を破壊している。他の火葬墓を伴う集石同士が接する場合でも、一部を共有する形で広がっており、前代の墓を破壊して造る例は認められなかった。このことから、①土壙墓と②以降の火葬墓で系譜的な断絶が想定される。

もうひとつは、Ⅲ期の中である。①火葬墓の中で蔵骨器を持つものが急激に減少し、蔵骨器が確認されなかった墓壙が普遍的に見られるようになること、②集石の石の置き方が多様化すること、③五輪塔が確実に見られるようになること、④集石間で遺物が確認されるようになることが挙げられる。これらのうち、③・④の事象が明確な形で確認されるのは概ね15世紀後半であるが、①～④の事象は一連のものであり、その動きは15世紀前半から少しずつあったものと推察される。

しかし、Ⅲ期の中の変化は、集石の先後関係で捉えると、前代のものを生かした形で一部を共有して造設していくこと、蔵骨器が土器・陶器から有機質のものへと変化するものの、いずれも副葬品が確認されないことから、Ⅰ期・Ⅱ期間の変化よりは小さいものと考える。

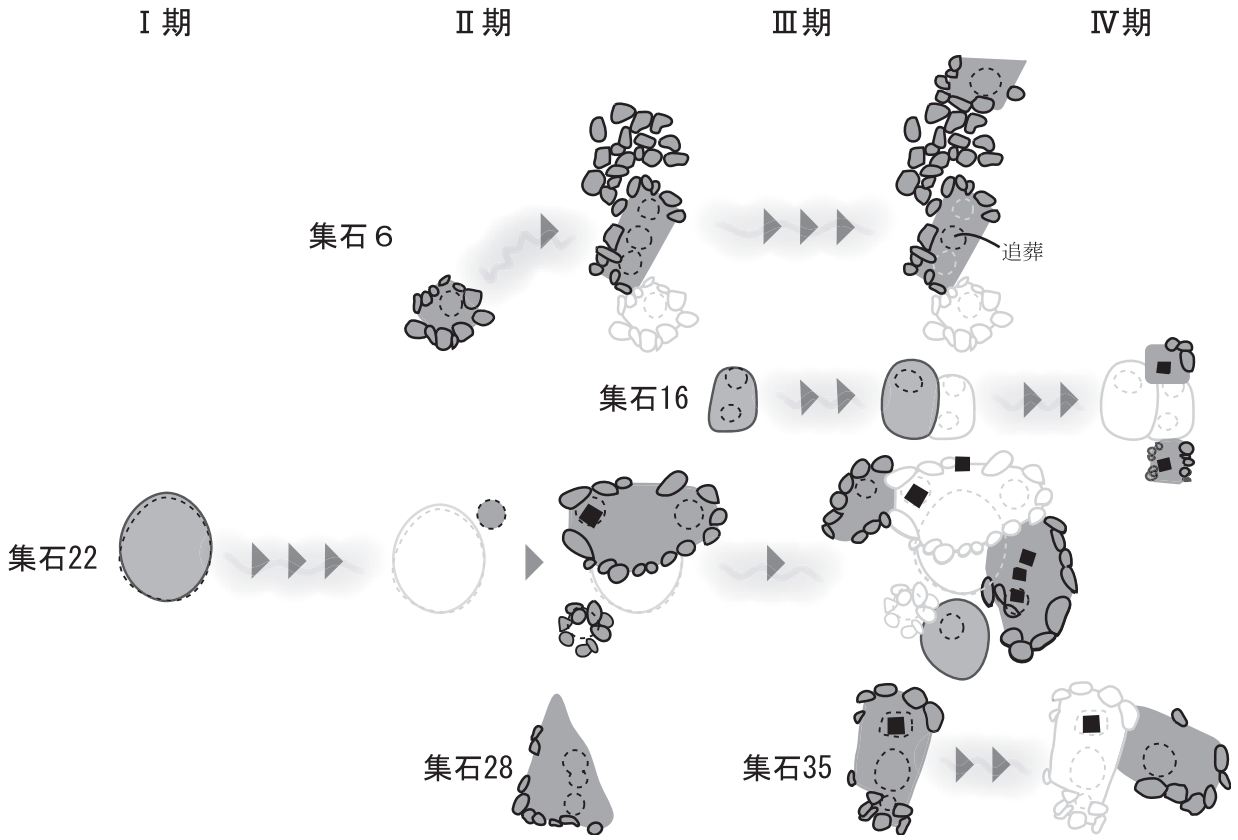
②　下部構造

下部構造は、実際に亡骸を埋葬した部分である。墓壙の規模・蔵骨器の種類によって３区分できる。

土壙墓　一部の墓壙に関しては、釘片の出土が認められ、木棺墓が一定量はあったことが窺える。さらに、一部の土壙墓から土師器小皿・山皿等が出土し、出土遺物の時期から13世紀後半～14世紀初頭と捉えられる。

蔵骨器が認められる火葬墓　蔵骨器として一番多く確認したものが常滑であり、次いで南伊勢系土師器鍋、古瀬戸となる。蔵骨器の生産された年代は12世紀中頃～15世紀後半まである。伝製品を使用したことなども考慮し、蔵骨器として利用されたのは、遡っても13世紀末ないしは14世紀以降と捉えられる。

また、常滑産の蔵骨器は、肩部で「×」や「※」などのヘラ描きが確認されたものが22点中14点を数え、非常に高い比率である。この傾向は、同じ三重県内で蔵骨器を伴う火葬墓が多く確認された鈴鹿市椎山中世墓[9]、松阪市横尾墳墓群[10]でも確認されている。蔵骨器とそのヘラ描きとが、何らかの関係を有する可能性が考えられる。



第51図　集石変遷模式図

蓋には大きめの礫や山茶椀を利用する例が多く確認された。口径の大きい土師器鍋からも焼骨直上で拳大の礫が出土しており、板などで口縁部を覆ってその上に礫を置いたものと思われる。

蔵骨器が認められない火葬墓　調査時には蔵骨器が認められなかったが、集石22Ｃ墓のように木箱に焼骨を納めて埋葬したと見られるものもあり、実際には有機質のものに入れて埋葬したと考えられる。これらの火葬墓は遺物を含まず、詳細な時期は不明である。しかし、集石や五輪塔地輪の位置と合致するとみられる墓壙を多数確認していることから、概ね14～15世紀代の範疇に収まると考えられる。

比率としては低いが、墓壙内上方で径20㎝程の礫が単体で出土する例があり、蓋石としていたとみられるものもあった。

③　上部構造

上部構造には集石・五輪塔が挙げられるが、地表面近くにあるため下部遺構より後世の削平を受けやすく、当時の状況そのままを反映する例は少ない。集石のまとまり・五輪塔地輪の状態からみて、かろうじて良好に残存していると考えられるものは、集石６・７、土塁ＳＺ１直下に所在する集石22・23、集石33である。それ以外の所、特に調査区南西部に位置する集石12・13は、集石の中に五輪塔（空風・火・水・地各部）が完全に混入した形で検出されており、後世に寄せ集められたものである。

集石の分類・変遷　集石のまとまりの中にいくつかの規則性が見出されたため、平面形態・区画石の有無・石の並び方を基に分類した（P72分類図を参照）。

集石は、上述した３要素（平面形態・区画石・集石のまとまり方）の組み合わせで構成され、多様化している。その中でも、楕円形のものは、０－ａ、０－ｂ、２Ａ類が、方形のものは、０－ａ、０－ｂ、１－ａ、２Ａ－ａ，２Ａ－ｂ、２Ｂ－ａ，２Ｂ－ｂの各類型が認められ、平面形態によって類型の偏りがみられる。

しかし、平面形態から質的な違いはみられず、むしろ区画の広さと墓壙の数に関係が認められる。つまり、平面形態が楕円形・正方形のものは墓壙が１基であるものが多いことに対し、長方形のものは墓

壙が２基以上である。

土壙墓に伴うとみられる集石は集石22Ｆのみで確認され、０－ａ類の範疇に入る。一方で、長方形で区画石を持つ２－ａ類が圧倒的に多い。また、五輪塔地輪が当時の状態を留めていると考えられるものは、区画石を持つ２Ｂ類に限定される。後世の破壊を受けやすい上部構造の特質から、残りの悪い０－ａ類は古い様相を示し、区画を持つタイプの集石は新しい様相を示すものと考えられる。

また、区画を持たない０類でも、０－ｂ・０－ｃ類は蔵骨器が確認されなかった墓壙との関係が認められ、新しい要素を示すものと思われる。

石塔類　石塔類は大量に出土したが、多くは散乱した状態での出土であり、原位置を保っていたものは少ない。各部を組み合わせる種類の五輪塔の石材は、一部で花崗岩が認められるものの、ほとんどが近隣で産出する砂岩（井関石）である。地輪の大きさは１辺15～21㎝、高さ10～15㎝と全体的に小さい。また、空風輪の抉りは甘く、火輪の反りが比較的明確であることから、多くは15世紀後半以降の要素をもつものと思われる[11]。

しかし、五輪塔の型式変化は緩やかなもので、細かく捉えがたい点が挙げられる。

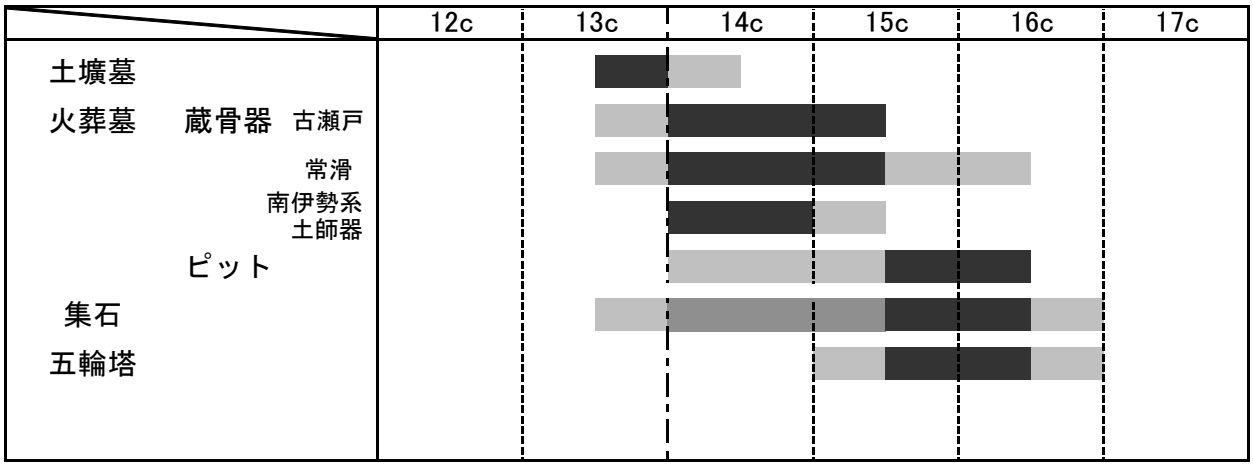
また、当時の状態を留めていると考えられる五輪塔地輪の中で、蔵骨器を持つ墓壙と対応するものが１箇所確認されている（集石７Ｂ墓）。この蔵骨器は、中野晴久氏編年の７～８型式[12]に比定される。土器の生産年代と使用年代の時間差、墓への埋葬から追善供養として塔を建てるまでの時間差を十分考慮しなければならないが、一部の五輪塔の時期は15世紀前半まで遡る可能性も有り得ると見ておきたい。

一石五輪塔は、全体的に各部の削り出しが少なく、作り方が雑なものが多い。中には地輪の幅に対して非常に高さのあるものもあり、17世紀以降に捉えられるものもあった[13]。

出土五輪塔の中に１点のみ、「丙午」と刻字されたものがある（遺物番号224）。地輪の部分に刻まれたものであるが、小片のため、組み合わせ五輪塔か一石五輪塔の部材なのかは不明である。

「丙午」の時期を探る手掛かりのひとつに、調査区近くにある現天花寺墓地でも、多くの石塔類が確認されており、その内１点の石地蔵には、「□□童子」、「永禄四辛酉十月十五日」の銘がある[14]（永禄四年＝1561年）。今回調査した中世墓群の時期から考えると、「丙午」は1486、1546、1606年のいずれかになる可能性が高い。また、この資料が一石五輪塔片となると、その時期は1546、1606年辺りになる可能性が考えられる。

墓道　現時点で墓道と考えられるのは、集石５と集石６の間（墓道１ａ）、集石23と集石24の間（墓道１ｂ）、集石６と集石７の間（墓道２ａ）、集石７と集石８の間（墓道３ａ）、集石22と集石23の間（墓道２ｂ）、集石22Ａと集石22Ｂの間（墓道３ｂ）、集石22Ｈ・Ｉと集石22Ｄの間（墓道４）である。いず



＊　蔵骨器の時期を生産年代でみると、12世紀代・13世紀代のものがあるが、
墓として機能したと考えられる年代を記したものである。

第１表　中世墓変遷表

れも集石の残存状況が良好である調査区中央以南に位置する。

墓道１～３の向きは、N20°～27°Ｅの南北方向に通るもので、幅は0.3～0.6m程度である。いずれも近世天華寺に伴うと考えられる溝ＳＤ２によって分断されているが、１ａと１ｂ、２ａと２ｂ、３ａと３ｂは繋がっていたものとみられる。墓１ａのみ、両側に位置する集石墓に対して凹地状になっていた。

墓道４は東西方向の通路になると考えられるものである。幅は約0.35mと狭い。

南北方向の墓道が多く確認されたことについて、例えば、集石６・集石７・集石23でみられるように、南北方向に墓が広がっていることと関連していると思われる。

また、14世紀後半の火葬墓の広がり方をみても、集石の残りの悪かった調査区北半東寄りで南北方向に分布が認められ、南北方向に墓を広げようとする意識は強かったのではないかと考えられる。

これは、中世墓が丘陵東端部に立地していることに起因すると思われる。より見晴らしの良い場所を占有・拡張することで、墓の広がる方向がおのずと決定され、墓道も同一方向で多く確認されたのではなかろうか。

火葬施設　本調査区では火葬墓が多数確認されたが、当該期の火葬施設に相当するものが確認されなかった。火葬施設は火葬墓から西へ約150m離れた清水谷遺跡第３次調査区で確認された焼土坑が該当すると考えられる[15]。

天花寺城と中世墓の関係　この中世墓は、天花寺城跡の南東[16]に位置する。今回の調査で確認した城に関係するとみられる遺構は、ＳＤ41とＳＤ233である。これらの遺構は出土遺物が少ないが、概ね15世紀代と考えられる。中世墓は天花寺城の造営後も引き続き機能しており、城と中世墓が併存していることが今回の調査でも確認された[17]。

以上、中世墓の変遷・構造等、気づいた点を列記した。しかし、表面的な事象の追跡に終始し、事象の変化に伴う被葬者・歴史的背景までふれることができなかった。さらなる検討を深めていきたい。

〔註〕

⑴　東側斜面は天花寺城跡築城の際に切岸として削られたと考えられ、この住居跡が機能していた頃は、もう少し斜面から離れた場所に住居跡が位置していたと思われる。

⑵　範囲は図示できなかったが、貼床は確認しているため、用途は別として他の住居と同程度の期間は利用されていたと考えられる。

⑶　舟を画材とした絵画は、一般的に横からみた形が左右対称の「ゴンドラ形」のものが多いが、奈良県清水風遺跡出土例・静岡県三和遺跡出土例・千葉県湊富士見台遺跡出土例・天神台遺跡出土例など、船首と船尾の形状が非対象のものも見られる。しかし、船尾に方形状のものが付くのは静岡県三和遺跡出土例が挙げられるが、これが何を示しているかは明言できない。

⑷　佐々木謙「鳥取県淀江町出土弥生土器の原始絵画」『考古学雑誌』67-1　日本考古学会　1989

⑸　春成秀爾「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集　国立歴史民俗博物館　1987

⑹　伊藤裕偉　柴山圭子　豊田祥三『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅷ』　三重県埋蔵文化財センター　2005

⑺　『嬉野町史』昭和56年

⑻　集石22Ｉは集石22Ｅの中に位置するが、集石の並び方が異なるため、あえて区画の名称を分けた。しかし、実際の墓の造り方を見る限りでは、集石22Ｅに包含される可能性が高い。

⑼　伊藤久嗣「椎山中世墓」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』鈴鹿市教育委員会　鈴鹿市遺跡調査会　1978

⑽　田阪仁　宮田勝功「横尾墳墓群」『佛教藝術』182　毎日新聞社　1989　なお、田阪氏には、横尾墳墓群の詳細な状況をご教示いただいた。

⑾　形状の大まかな変遷は、以下の報告書等を参考にしたが、地域差もあるため、詳細な時期決定についてはさらなる検討を要する。

・『白岩西遺跡ー北九州市八幡区白岩町所在の中世墓群の調査ー』北九州市教育文化事業団文化財調査室　1985

・『一の谷中世墳墓群』磐田市教育委員会　1988

・『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター　2000

⑿　中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館　1995

⒀　矢島有希彦　福原圭一　窪田涼子「成願寺・城・五輪塔」『荘園と村を歩く』　校倉書房　1997

⒁　伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996

⒂　木野本和之　川崎志乃『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター　2000

⒃　天花寺城跡の範囲は、天花寺丘陵東部全体と捉えている。前掲註⒁を参照。

⒄　城と中世墓が併存していたことは第一次調査ですでに指摘されている（前掲註⒁）。

※　遺構一覧表、遺物観察表は、三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ－２』2002(平成14年)年報告分も、掲載している。

※　長径（m)、短径（m）の（　）は礫石径の検出範囲を示す。

※　特徴の項目内の底レベルは、それぞれ①北西主柱穴　②北東主柱穴　③南東主柱穴　④南西主柱穴　⑤貯蔵穴の標高（m）を示す。

遺構№	旧遺構№	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(標高：m)	性格	時期	特徴
SZ1		h～k・15～19	―	―	高0.59	35.02	土塁	近世	
SD2		h～k・14～19	―	1.20	0.35	34.93～35.92	溝	近世	
SX24(小谷33号墳)			全長9.50		0.22～0.44	35.78～36.09	古墳	古墳初頭？	前方後方形。主墳部南北約7.0×東西約8.9m
SX39(小谷32号墳)			12.0×12.9		0.41～0.56	35.10～35.43	古墳	古墳中期	方墳。南北約10.6×東西約10.8m
SD41		h14・15	―	0.50	0.39	35.18	溝	中世後期	断面V字。ＳＤ２に切られる。
SH43		j7	5.30	5.10	0.27	35.54	竪穴住居	弥生後期	方形、主柱穴４、貯蔵穴・壁周溝有り。底レベル：①35.18②35.19③35.14④35.19⑤35.11
SH45		g～h・3～4	5.20	4.90	0.08	35.80	竪穴住居	弥生後期	方形、主柱穴３（+２？)、炉跡・貯蔵穴・壁周溝有り。底レベル：①35.49②35.65③35.54④-　⑤35.26最北東35.57最北西35.70
SH63		f15	4.00	4.80	0.33	35.37	竪穴住居	弥生後期	方形、主柱穴２、炉跡・貯蔵穴・壁周溝有り。底レベル：東35.00西34.94⑤35.02
SK70		h17	0.94	―	0.59	35.02	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕
SK71		f19	0.50	0.49	0.19	35.57	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK72		e20	0.35	0.33	0.12	35.62	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK73		f19	0.42	0.38	0.13	35.56	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK74		f20	0.73	0.72	0.13	35.32	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SZ75	SX75	j14	0.28	0.23	0.05	35.72	不明	19世紀	瀬戸美濃産行平鍋
SF76		j14	1.24	0.90	0.18	35.58	火葬施設	中世墓群廃絶後	被熱部分確認。大量の焼骨・炭出土。
SK77		c22	(0.56)	(0.40)	0.06	35.56	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK78		b22	(0.77)	(0.63)	0.06	35.65	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK79		b23	(0.67)	(0.48)	―	35.84	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK80		b23	(0.60)	(0.49)	0.10	35.62	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK81		b23	(0.39)	(0.39)	―	35.90	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕口縁部のみ伏せた状態で出土
SK82		c21	(0.75)	(0.68)	―	35.64	礫石経埋納土坑	18世紀後半	記年銘が記された礫石経出土（天明元辛丑八月□二日)。名号が記された礫石経出土（南□阿弥陀仏など計２点)。
SK83		b22	(0.60)	(0.65)	―	35.59	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SX84	SK84								欠番
SK85		g16	0.42	0.42	0.08	35.57	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK86		g16	0.52	0.43	0.07	35.46	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK87		h16・17	0.82	0.78	0.19	35.37	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK88		h17	0.64	0.62	0.20	35.42	礫石経埋納土坑	18世紀後半	人名が記された礫石経出土（覺了院)
SK89		e20	―	―	0.01	35.59	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK90		c22	0.62	0.58	0.20	35.50	礫石経埋納土坑	18世紀後半	人名が記された礫石経出土（清次良・正木大良太夫など計７点)。名号が記された礫石経出土（南無阿ミタ佛)。
SK91		d21	0.82	0.77	0.30	35.34	礫石経埋納土坑	18世紀後半	名号が記された礫石経出土（南無阿弥匚)。
SK92		e21	0.55	0.55	0.20	35.42	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK93		e21	1.05	0.98	0.52	35.08	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕
SK94		e21	1.03	0.87	0.53	35.07	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕
SK95		e21	0.99	0.94	0.55	35.05	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕
SK96		f20	―	0.77	0.51	35.10	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕
SK97		f20	1.03	0.98	0.49	35.11	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕

第２表　遺構一覧表（１）

遺構№	旧遺構№	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(標高：m)	性格	時期	特徴
SK98		f19	0.51	0.46	0.11	35.48	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK99		d22	0.77	0.66	0.16	35.46	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK100		h19	0.89	0.88	0.35	35.19	礫石経埋納土坑	18世紀後半	記年銘が記された礫石経出土（安永四乙未歳・□□乙未七月五日）
SK101		h19	0.79	0.64	0.30	35.12	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK102		g19	(0.42)	(0.40)	0.33	35.22	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK103		g20	(0.35)	(0.32)	0.17	35.42	礫石経埋納土坑	18世紀後半	記年銘が記された礫石経出土（安永二年 稚児供養 午六月日）
SK104		b21	0.78	0.72	0.12	35.50	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK105		h19	1.01	0.70	0.41	35.13	礫石経埋納土坑	18世紀後半	名号が記された礫石経出土（南無阿弥陀佛）。
SK106		h19	(0.30)	(0.27)	―	―	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK107		i19	(0.66)	0.57	0.43	35.17	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK108		i18	0.65	0.56	0.42	35.20	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK109		g20	0.72	0.66	0.08	35.48	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK110		c・d22	0.62	0.60	0.12	35.48	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK111		c22	0.68	0.66	0.15	35.51	礫石経埋納土坑	18世紀後半	記年銘が記された礫石経出土（□永四□□年）。人名が記された礫石経出土(先祖代々大和家 彦三良・大和家)。
SX112	SK112	k14	0.45	0.44	0.09	35.48	墓	中世？	炭・焼骨多量に含む
SX113		k14	1.34	0.74	0.40	35.22	土壙墓	中世	刀
SH114		j13・14	5.60	4.80	0.33	35.29	竪穴住居	弥生後期	方形、主柱穴４、炉跡・貯蔵穴？・壁周溝有り。底レベル：①34.74②34.74③34.69④34.82　⑤34.78
SK115		k11・12	2.09	0.99	0.27	35.37	土坑		
SK116									欠番
SX117	SK117	j14	1.34	1.11	0.50	35.04	土壙墓	13世紀後半	山皿４点・土師器小皿１点
SK118	SH118	k14	―	1.27	0.26	35.31	土坑	中世	
SX119		j11	0.35	0.30	―	―	墓	中世	焼骨
SX120		k13	1.24	0.62	0.33	35.30	土壙墓	中世	
SK121	SH121	k13	―	2.86	0.25	35.38	土坑	中世	
SX122		h17	0.45	0.40	―	―	墓	中世	焼骨
SX123		h17	0.35	0.25	―	―	墓	中世	焼骨
SX124		h17	0.11	0.10	―	―	墓	中世	焼骨
SX125	SK125	j13	1.32	1.03	0.22	35.40	土壙墓	13世紀後半	土師器小皿１点
SK126	SH126	i14・15	―	―	0.06	35.52	土坑		
SX127									集石16A墓と重複のため、欠番
SX128									集石16B北墓と重複のため、欠番
SX129	SK129	j・k13	1.03	0.69	0.39	35.23	土壙墓	13世紀後半	土師器小皿１点
SK130									集石15墓と重複のため、欠番
SX131	SH131	j14	―	―	―	35.34	墓	近世	蓋付双耳壺
SX132									集石16B南墓と重複のため、欠番
SX133		j13	0.45	0.32	0.12	35.47	墓	中世	焼骨
SX134		J15・16	1.08	0.87	0.31	35.17	土壙墓	中世	
SK135		k15	0.96	0.38	0.15	35.29	土坑		
SX136		i17	0.37	0.33	0.10	35.34	墓	中世	焼骨
SX137		j17	0.35	0.28	0.11	35.23	墓	中世	焼骨
SX138		k17	0.83	0.66	0.42	35.42	土壙墓	中世	
SX139		j16	―	0.56	0.22	35.24	土壙墓	古墳	
SX140(小谷30号墳)		I～j・15～16	径約13.5		0.10～0.37	35.10～35.33	古墳周溝	古墳	円墳。埋葬施設は3.46×1.00mの長方形、深さ0.17m、底レベル35.29m。
SX141		j16	0.34	0.33	0.24	35.21	墓	中世	焼骨
SX142		j16	0.22	0.22	0.18	35.28	墓	中世	焼骨

第２表　遺構一覧表（２）

遺構№	旧遺構№	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(標高：m)	性格	時期	特徴
SX143		k16	0.32	0.25	0.11	35.31	墓	中世	焼骨
SX144		k16	0.31	0.29	0.13	35.30	墓	中世	焼骨
SX145		k16	0.82	0.28	0.09	35.33	墓	中世	焼骨
SK146		j15	1.00	0.47	0.25	35.22	土坑		
SX147		k16	0.68	0.58	0.13	35.27	墓	中世	土師器鍋（焼骨）
SX148		k16	0.37	0.26	0.14	35.26	墓	中世	焼骨
SX149		k16	0.23	0.22	0.19	35.21	墓	中世	焼骨
SX150		k17	0.32	0.21	0.11	35.31	墓	中世	焼骨
SX151		k17	0.45	0.40	0.18	35.03	墓	中世	焼骨
SX152		k17	0.25	0.24	0.22	35.20	墓	中世	焼骨
SX153		j17	0.39	0.38	0.09	35.25	墓	中世	焼骨
SX154		h・i16	1.25	1.10	0.31	35.22	土壙墓	中世	楕円形、土師器皿
SX155		f18	0.47	0.46	0.32	35.47	墓	中世	焼骨
SX156		e18	0.22	0.20	―	―	墓	中世	焼骨
SX157		e18	0.30	0.28	0.05	35.75	墓	中世	焼骨
SX158		e18	0.30	0.30	0.10	35.71	墓	中世	焼骨
SX159		e18	0.32	0.30	0.16	35.64	墓	中世	焼骨
SX160		f・g18	0.32	0.30	0.11	35.49	墓	中世	焼骨
SX161		g18	0.91	0.71	0.16	35.47	墓	中世	焼骨
SK162		i17	―	1.92	0.11	35.35	土坑	中世？	
SD163	SK163	a21	―	0.62	0.06	35.84	溝	近世	
SK164									欠番
SX165		h18	0.41	0.30	0.10	35.41	墓	中世	焼骨
SX166		h18	0.48	0.40	0.09	35.38	墓	中世	焼骨
SX167		h18	0.28	0.26	0.25	35.29	墓	中世	焼骨
SX168		h17	0.24	0.23	0.05	35.43	墓	中世	焼骨
SX169		h17	0.28	0.27	0.09	35.44	墓	中世	焼骨、14世紀中頃の土師器鍋片
SX170	SK170	i16	―	1.03	0.23	35.28	土壙墓	中世	釘片多数
SK171		i16・17	―	0.81	0.33	35.13	土壙墓	中世	楕円形
SX172		f16	0.78	0.59	0.15	35.68	土壙墓	中世	楕円形、土師器皿
SX173	SK173								欠番
SK174		i17	0.67	0.62	0.07	35.37	土坑		
SZ175	SK175	i17・18	1.34	0.92	0.26	35.20	土壙墓	中世	隅丸方形
SX176		i18	0.36	0.34	0.10	35.36	墓	中世	焼骨
SX177		g17	0.33	0.32	0.13	35.49	墓	中世	焼骨
SX178		g17	0.33	0.27	0.17	35.45	墓	中世	焼骨
SX179		g17	0.33	0.29	0.11	35.48	墓	中世	焼骨
SX180		g17	0.29	0.29	0.14	35.43	墓	中世	焼骨
SX181		j18	0.68	0.51	0.23	35.21	墓	中世	土師器鍋
SX182		g19	0.32	0.27	0.25	35.36	墓	中世	焼骨
SK183		h17	5.70	1.10	0.20	35.40	土坑	15世紀後半	
SX184		g17	1.21	0.85	0.43	35.18	土壙墓	中世？	楕円形
SX185		f17	1.11	0.68	0.10	35.48	土壙墓	中世？	楕円形
SK186		e16・17	2.15	0.65	0.22	35.68	土壙墓？	古墳？	
SD187		h16・17	3.72	0.57	0.10	35.37	溝	15世紀後半	
SX188		h16	0.34	0.26	0.09	35.42	墓	中世	焼骨
SK189		h15・16	0.78	0.71	0.17	35.31	土坑		

第２表　遺構一覧表（３）

遺構№	旧遺構№	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(標高：m)	性格	時期	特徴
SX190		a～f・16～20	―	約19	0.47	35.30	同溝	弥生～古墳	
SX191		f19	0.53	0.45	0.21	35.47	墓	中世	焼骨
SX192		h18	0.31	0.31	0.16	35.23	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SX193		h18	0.60	0.45	―	―	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK194		g17	0.71	0.30	0.16	35.46	土坑		
SX195		i18	0.52	0.38	0.07	35.39	墓	中世	焼骨
SX196		g17	0.42	0.35	0.17	35.47	墓	中世	焼骨
SK197		h16・17	―	1.25	0.11	35.36	土坑		
SX198		f19	0.39	0.35	0.15	35.36	墓	中世	焼骨
SX199		f16	0.34	0.32	0.16	35.59	墓	中世	焼骨
SX200		f16	0.32	0.27	0.09	35.66	墓	中世	焼骨
SD201		d～e・17～20	12.40	0.88	0.42	35.36	溝	近世	
SD202		b～e・19～22	―	0.40	0.14	35.54	溝	近世	
SD203		b・c18	―	0.25	0.09	35.76	溝	近世	
SX204	SK204	b19	2.38	1.92	0.48	35.23	土壙墓	近世	焼骨・炭を少量含む、古銭・キセル・小刀
SX205	SK205								欠番
SX206									欠番
SK207									欠番
SX208		b26	1.03	0.73	0.18	35.34	土坑	中世？	炭・焼土を含む
SX209		c26	0.74	0.50	0.11	35.31	土坑	中世？	炭を含む
SK210		c26	2.40	1.90	0.11	35.34	土坑	中世？	
SX211		c・d25	1.13	0.80	0.11	35.26	土坑	中世？	炭を含む
SK212									欠番
SK213									欠番
SK214									欠番
SK215									欠番
SX216		b18	0.46	0.39	0.12	35.78	墓	中世	焼骨
SX217		h18	0.45	0.43	0.19	35.31	墓	中世	焼骨、蓋石？
SK218		k16	1.06	0.79	0.29	35.15	土壙墓？	中世	楕円形
SK219									欠番
SX220									欠番
SX221									欠番
SK222									欠番
SH223		c～d・23～24	5.50	4.80	0.40	35.00	竪穴住居	弥生後期	方形、主柱穴４、貯蔵穴・壁周溝有り。底レベル：①34.66②34.61③34.44④34.70⑤34.54　絵画土器出土。
SX224									欠番
SX225		g17	0.41	0.38	0.11	35.48	墓	中世	
SK226		d15	0.81	0.57	0.09	35.73	土坑	中世？	
SX227		d17	0.58	0.53	0.23	35.72	墓	中世	焼骨・炭
SX228		f18	0.36	0.27	0.17	35.59	墓	中世	焼骨、直上に集石31有り
SX229		h・g18	0.37	0.32	0.08	35.46	墓	中世	焼骨
SX230	SK230	h18	0.38	0.38	0.18	35.36	墓	中世	焼骨
SX231		i18	1.24	0.87	0.10	35.30	墓	中世	焼骨
SX232									欠番
SD233		f～h・18～19	9.27	2.50	0.42	35.13	溝	15世紀後半	
SX234		h18	0.31	0.30	0.08	35.34	墓？	近世	常滑壺（焼骨確認できず）、蓋石
SX235		h18	0.31	0.29	0.18	35.31	墓？	近世	常滑壺（焼骨確認できず）、蓋石

第２表　遺構一覧表（４）

遺構№	旧遺構№	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(標高：m)	性格	時期	特徴
SX236									欠番
SX237									欠番
SK238		f19	0.57	0.49	0.11	35.42	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK239		h18	(0.38)	(0.30)	―	35.45	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK240		h18	0.94	0.73	0.07	35.29	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK241		f19	0.45	0.46	0.08	35.43	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK242									欠番
SK243									欠番
SH244		d16	―	―	0.14	35.75	竪穴住居	弥生後期	方形、主柱穴４・棟持柱？、貯蔵穴・壁周溝有り。底レベル：①35.60②35.23③35.23④35.52⑤35.14　棟持北35.58 棟持南35.61
SX245		j・k17	0.34	0.34	0.06	35.27	墓	中世	土師器鍋（焼骨）
SX246		h18	0.35	0.33	0.12	35.28	墓	中世	土師器鍋（焼骨）
SK247									欠番
SX248		g18	0.34	0.31	0.12	35.22	墓	中世	常滑壺（焼骨）・山茶椀で蓋
SX249		f・g18	0.26	0.24	0.15	35.18	墓	中世	常滑三筋壺（焼骨）
SX250		h19	1.90	0.55	0.08	35.08	土壙墓	古墳	須恵器・土師器
SX251									欠番
SH252		e17・18	5.80	5.80	0.15	35.77	竪穴住居？	弥生後期	不定方形、壁周溝有り。
SX253		d18	0.46	0.40	0.31	35.56	墓？	中世？	炭
SX254		g18	0.52	0.50	0.17	35.20	墓	中世	焼骨
SX255		g19	0.70	0.30	0.27	35.17	土壙墓	古墳	楕円形、土師器杯
SX256		f19	0.30	0.25	0.24	35.12	墓	中世	焼骨
SX257		b18・19	2.30	0.80	0.23	35.67	土壙墓	古墳	方形、須恵器蓋杯
SK258		e16	―	―	0.27	35.52	土坑	弥生？	
SK259		a22	―	(0.88)	―	35.82	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK260		a22	(0.76)	(0.57)	―	35.71	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK261		a22	(0.95)	(0.89)	―	35.80	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK262		a22	(0.86)	(0.70)	―	35.74	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK263		a23	―	0.47	0.22	35.65	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK264		a23	0.90	0.85	0.56	35.34	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕、戒名の記された礫石経有り（□□勇荘居士・法誉妙覺信女など計２点）。名号の記された礫石経有り（南無阿弥陀仏）。
SK265		a23	0.80	0.78	0.39	35.49	礫石経埋納土坑	18世紀後半	常滑甕
SK266		a23	0.76	0.68	0.17	35.68	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK267		a23	0.72	0.67	0.25	35.55	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SK268		a25	―	―	0.19	35.56	礫石経埋納土坑	18世紀後半	
SH269		a19	―	―	0.10	35.68	竪穴住居	弥生後期	方形、貯蔵穴・壁周溝有り。底レベル：①- ②- ③- ④35.29⑤35.37
SH270		a24・25	―	―	0.39	35.29	竪穴住居	弥生後期	方形、貯蔵穴有り。底レベル：①- ②- ③- ④34.95⑤35.03
集石５A墓		k17	―	―	―	35.43	墓	中世	古瀬戸瓶子（焼骨）
集石５B墓-南		j17	―	0.20	―	―	墓	中世	焼骨
集石５B墓-南東		j・k17	0.27	0.27	―	―	墓	中世	焼骨
集石６A墓		k16・17	0.30	0.29	0.23	35.45	墓	中世	古瀬戸四耳壺（焼骨）、蓋石
集石６C墓-北		j16	0.24	0.23	0.21	35.57	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）、蓋石
集石６C墓-中央		j・k16	0.34	0.27	0.37	35.38	墓	中世	常滑壺（焼骨）を２段重ねた状態で確認。
集石６C墓-南		k16	0.31	0.28	0.18	35.58	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）
集石７A墓-北		j16	0.35	0.27	0.28	35.52	墓	中世	焼骨、直上に五輪塔、扁平石（五輪塔の支えか蓋石と考えられる）
集石７A墓-南		j16	0.49	0.25	0.09/0.27	35.70/35.51	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）、蔵骨器外北側にも焼骨確認。
集石７B墓		j16	0.30	0.22	0.30	35.48	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）、蓋石、直上に五輪塔

第２表　遺構一覧表（５）

遺構№	旧遺構№	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(標高：m)	性格	時期	特徴
集石７C-北		j16	0.30	0.25	0.22	35.35	墓	中世	焼骨
集石７C墓-中央		j16	0.34	0.33	0.21	35.31	墓	中世	土師器鍋（焼骨）、蓋石か？
集石７C墓-南		k16	0.36	0.35	0.24	35.35	墓	中世	土師器鍋（焼骨）、蓋石
集石15墓		i～j・13～14	0.70	0.49	0.16	35.50	墓	中世	焼骨ほとんど確認できず
集石16A墓		j13	0.47	0.32	―	―	墓	中世	焼骨、蓋石
集石16B墓-北		j13	0.32	0.33	0.15	35.56	墓	中世	焼骨
集石16B墓-南		j13	0.31	0.25	0.15	35.52	墓	中世	焼骨
集石22B墓		i16	0.38	0.37	0.16	35.66	墓	中世	土師器鍋（炭少量、焼骨確認できず）
集石22C墓		i16	0.31	0.29	0.16	35.50	墓	中世	焼骨方形にまとまって確認、直上に五輪塔（22C南地輪）
集石22E墓		h16	0.36	0.36	0.19	35.45	墓	中世	焼骨、直上に五輪塔（22E地輪ア）
集石22G墓		i16	0.33	0.32	0.07	35.70	墓	中世	焼骨確認できず
集石22H墓		h16	0.26	0.24	0.07	35.58	墓	中世	焼骨（少量）
集石22I墓		h16	0.34	0.34	0.20	35.55	墓	中世	土師器鍋（焼骨）、蓋石か？
集石23墓内SK１		h17	0.38	0.33	0.23	35.47	墓	中世	焼骨、蓋石か？
集石23墓内SK２		h17	0.30	0.30	―	―	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK３		i17	0.33	0.29	0.31	35.42	墓	中世	常滑壺（焼骨）、蓋石
集石23墓内SK５		i17	0.26	0.24	―	―	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK６		i17	0.45	0.41	0.24	35.55	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK７		h17	0.32	0.29	0.24	35.39	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）、蓋石
集石23墓内SK８		i17	0.30	0.28	0.15	35.55	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK９		i17	0.36	0.33	0.08	35.56	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK10		i17	0.35	0.35	0.07	35.60	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK11		i17	0.43	―	0.21	35.60	墓	中世	焼骨
集石23墓内SK12		i17	0.42	0.39	0.27	35.53	墓	中世	焼骨
集石24A墓		i17・18	0.41	0.41	0.19	35.62	墓	中世	焼骨
集石25A墓-北		g18	0.33	0.32	0.13	35.51	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）
集石25A墓-南		g18	0.33	0.32	0.21	35.40	墓	中世	常滑壺（焼骨）
集石27墓		f18	0.27	0.21	0.13	35.67	墓	中世	古瀬戸水注（焼骨）
集石28A墓-北		f19	0.29	0.29	0.20	35.63	墓	中世	常滑壺（焼骨）、山茶椀で蓋
集石28A墓-中央		f19	0.23	0.22	0.09	35.73	墓	中世	常滑壺（焼骨）
集石28A墓-南		f19	0.27	0.25	0.15	35.66	墓	中世	常滑不識壺（焼骨）、蓋石
集石28A墓-南東		f19	0.33	0.29	―	―	墓	中世	焼骨
集石31墓		f18	0.39	0.30	0.10	35.80	墓	中世	焼骨確認できず
集石33墓		e18	0.31	0.27	0.11	36.06	墓	中世	焼骨確認できず、直上に五輪塔
集石35A墓		g17	0.39	0.31	0.22	35.50	墓	中世	焼骨確認できず、直上に五輪塔
集石35B墓-北		g17	0.51	0.43	0.15	35.56	墓	中世	焼骨確認できず
集石35B墓-南		g17	―	―	―	35.63	墓	中世	古瀬戸三耳壺（焼骨）、蓋石
集石35C墓		g17・18	0.41	0.40	0.21	35.58	墓	中世	常滑壺（焼骨）
集石36墓		g18	0.33	0.32	0.16	35.51	墓	中世	焼骨

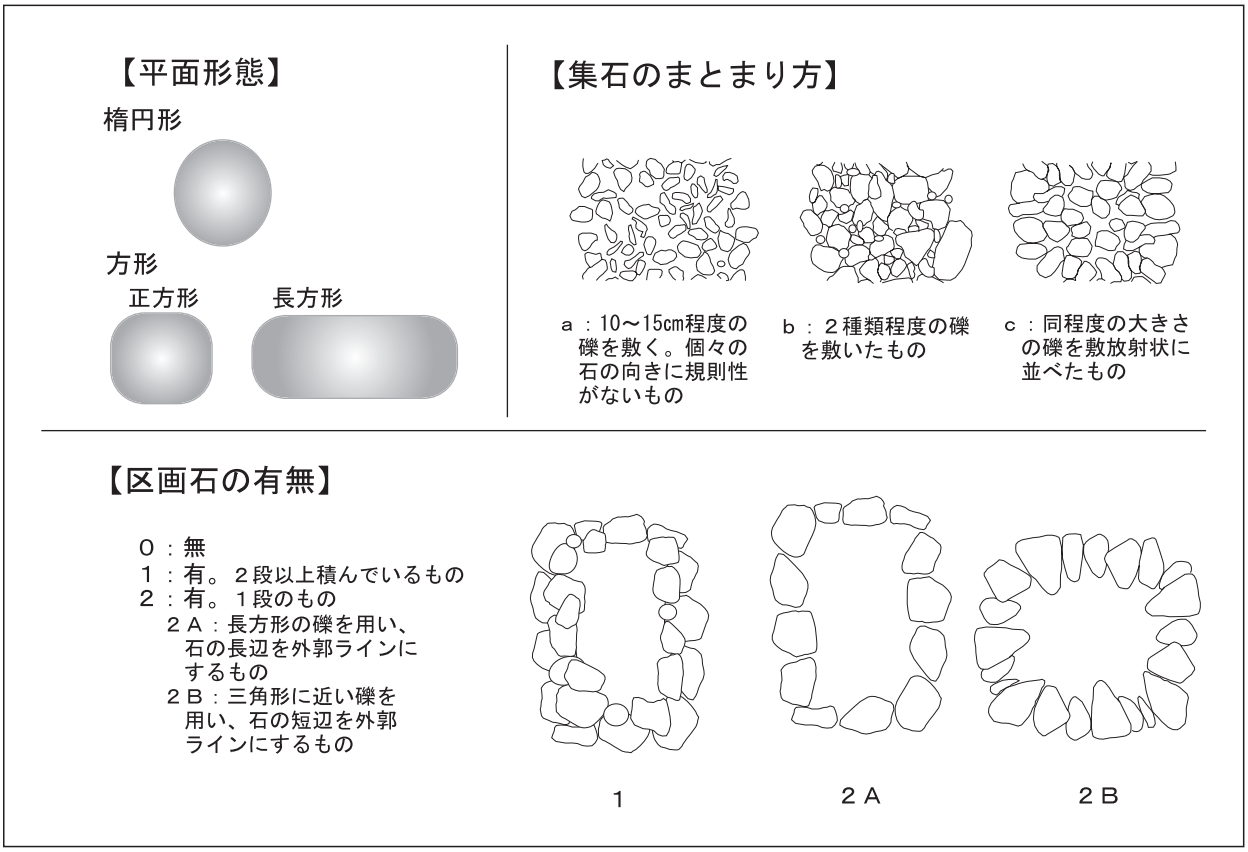
第２表　遺構一覧表（６）

遺構№	地区	長さ(m)	幅(m)	方位	平面形態	集石分類	特徴
集石５A	k17・18	1.52	1.25以上	N10°E	方形？	2A？	区画のみ確認。古瀬戸瓶子。
集石５B	j・k17	1.75以上	1.47	N30°E	長方形	2B-a	北側はSD2に切られる。地輪２基。墓壙２基（SX137・153)。
集石５C	j～k・17～18	1.24以上	1.15以上	N5°E	方形	2B-a	北側はSD2に切られる。
集石５D	k17	0.80	0.77	N28°E	方形	2B-a	地輪１基。墓壙１基(SX151)。
集石５E	j・k17	1.08以上	0.75	N37°E	長方形？	2B-a	東列は集石５Dと共有。土師器鍋。
集石６A	k17・18	0.86	0.81	N21°E	方形	2A?	区画のみ確認。古瀬戸四耳壺。
集石６B	j・k16	1.26	1.45	N12°E	楕円形	2A?	外周のみ確認
集石６C	j～k・16～17	最小1.29	最小0.88	N32°E	長方形	2A-a	外側に１重（一部２重）の区画が巡る最大の区画範囲は2.55×1.15m以上、方位N25°E。常滑壺・不識壺４点。
集石６D	j16・17	0.75以上	0.62以上	N21°E	方形	2A-a	北側SD2に切られる。墓壙１基(SX136)。
集石６E							欠番
集石６F	j・k17	1.08以上	0.75	N23°E	―	―	小礫のみ。集石５Eと集石６C・D間の凹地で墓道のひとつであると考えられる。
集石７A	j16	2.05	1.06	N24°E	長方形	2A-a	地輪１基。墓壙１基(集石7A-北)、常滑不識壺。
集石７B	j16	0.88	0.83	N30°E	楕円形	2A-a	地輪１基。常滑不識壺。
集石７C	j・k16	3.10	1.08	N19°E	長方形	2A-a	地輪１基。墓壙１基(集石7C-北)、土師器鍋２点。
集石７D	j16	0.78	0.60	N20°E	方形	2A-a	
集石８A	j・k16	0.82	0.71	N28°E	楕円形	O-b	
集石８B	j・k16	1.24以上	0.99以上	N23°E	長方形？	不明	西側・北側の一部のみ確認。土壙墓１基(SX134)が関連遺構となる可能性あり。
集石８C	k16	1.00以上	0.75以上	N4°E	長方形？	2B？	
集石９A	k17	1.66	1.11	N23°E	方形	2B？	区画のみ確認。
集石10							欠番
集石11							欠番
集石12	k15	―	―	―	不明	不明	中世墓廃絶後に移動した可能性あり。
集石13	j～k・14～15	4.80	2.80	―	不明	不明	SF76に切られる。中世墓廃絶後に周囲から集めたと考えられる。
集石14A	j～k・13～14	1.42	1.28	N16°E	方形？	2B？	区画のみ確認
集石15A	i～j・13～14	―	―	―	不明	不明	墓壙１基(集石15墓)
集石16A	j13	1.37	0.81	N33°E	楕円形	O-c	墓壙１基(集石16A墓)
集石16B	j13	0.87	0.65	N24°E	楕円形	O-b	墓壙２基(集石16B墓北・南)
集石16C	j13	0.95以上	0.67以上	N25°E	方形？	2A-a	地輪１基
集石16D	j13	0.69	0.65	N22°E	方形	2A-a	地輪１基
集石17	i13	―	―	―	不明	不明	
集石18	j13	―	―	―	不明	不明	
集石19							欠番
集石20	k12・13	―	―	―	不明	不明	
集石21	k11・12	―	―	―	不明	不明	墓壙１基(集石21墓)
集石22A	h15・16	0.89	0.81以上	N35°E	楕円形	2A-b	西側の区画以外は確認。土壙墓１基(SX189)が関連遺構となる可能性あり。
集石22B	i16	0.67	0.66	―	ほぼ円形	2B？	土師器鍋
集石22C	h～i・16～17	1.93	1.02	N22°E	長方形	2A-a	地輪・一石五輪塔計３基、墓壙１基(集石22C墓)。
集石22D	h16	2.00以上	0.81以上	N25°E	方形	2B-a	五輪塔１基、墓壙１基(SX188)が関連遺構となる可能性あり。
集石22E	h16	0.86	0.84	―	ほぼ円形	2？	墓壙１基(集石22E墓)
集石22F	h・i16	0.65以上	0.45以上	―	楕円形	O-a	集石22C・Eに切られる。中～小の礫のみ。土壙墓１基(SX154)。
集石22G	i16	0.90	0.90	―	ほぼ円形	O-a	西側は集石22Bに接する。墓壙１基(集石22G墓)。
集石22H	h16	1.30	0.71	N35°E	楕円形	2A-a	東側は集石22Iに接する。墓壙１基(集石22H墓)。
集石22I	h16	2.10	1.30	約N15°E	長方形	2A-a	区画内に集石22Eを含む。
集石23A	h・i17	1.55以上	1.00以上	N15°E	方形？	1-a	区画西側のみ残存。２～３段、礫を積む。
集石23B	h・i17	2.35	1.90	N40°E	長方形	2A-a	区画内小礫は半分程度残存。南側SD2に切られる。
集石23C	i16・17	1.95以上	1.39	N40°E	長方形	2A-a?	区画内小礫は半分程度残存。南側SD2に切られる。
集石24A	i17・18	0.88	0.80	N24°E	方形	2A？	墓壙１基(集石24A墓)。

第３表　集石一覧表（１）

遺構№	地区	長さ（m）	幅(m)	方位	平面形態	集石分類	特徴
集石25	g18	－	－	－	不明	不明	区画内にあたる小礫密集部分のみ確認。方形の板石を一カ所で確認。五輪塔を据えるためと思われる。
集石26A	f～g・18～19	1.42以上	0.89以上	N44°E	方形？	0-b	五輪塔を据える台に古代瓦使用
集石26B		0.98以上	1.46	N20°E	長方形	2A？	東辺は集石26Cと共有。区画のみ確認。
集石26C		0.86以上	0.53以上	N20°E	方形？	2A-a	西辺は集石26Bと共有。
集石27	f18	0.73	0.44	N52°E	方形？	2B-a	
集石28A	e～f・18～19	1.44以上	0.88以上	N21°E	長方形	2A-a	２区画に細分する可能性あり。墓壙１基(集石28A墓南東)。常滑壺・不識壺等計３点。
集石29	f17	－	－	－	不明	不明	中世墓廃絶後に移動した可能性あり。
集石30	f17	－	－	－	不明	不明	残存度悪い
集石31	e～f18	－	1.20以上	－	不明	不明	小礫のみ残存。墓壙３基(集石31墓・SX159・228)。
集石31A	e18	0.60	0.52	N18°E	ほぼ円形	2A-b	墓壙１基(SX158)
集石32	e18	－	－	－	方形？	2A？	残存度悪い
集石33	e18	1.14	0.88	N16°E	楕円形	2A-a	地輪１基。墓壙１基(集石33墓)。
集石34	f～g・17～18	－	－	－	不明	不明	中世墓廃絶後に移動した可能性あり。
集石35A	g17	1.08	0.85	N16°E	楕円形	2A-a	地輪１基。墓壙１基(集石35A墓)。
集石35B	g17	0.95以上	0.69以上	N16°E	不明	不明	北側は集石35Aに接する。墓壙１基(集石35B墓-北)。古瀬戸三耳壺。
集石35C	g17～18	1.18	1.11	N19°E	方形	2A-a	西側は集石35A・Bに接する。常滑壺。

第３表　集石一覧表（２）



第52図　集石分類図

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
1	057-01	縄文土器	深鉢	c19	SX190 内	34.6			内：斜行沈線 外：押型文	にぶい褐色	粗（径５㎜程度の礫混）	並	口：2	
2	043-03	縄文土器	深鉢	a 22	SK261 内				外：縄文・沈線	にぶい褐色	やや粗(径２㎜以下の礫混)	並	口：1	
3	043-02	縄文土器	深鉢	j 12	SX39 内				外：貼り付け突帯	にぶい黄橙色	やや粗（径４㎜以下の礫混）	並	口：1	
4	043-04	縄文土器	浅鉢	b19	SX190 内				外：区画降帯	にぶい黄橙色	やや粗（径４㎜以下の礫混）	並		
5	062-03	弥生土器	受口状口縁甕	f15	SH63 主柱穴				内外面共横ナデ 口縁端部刺突	灰白色	やや粗（微砂粒混）	良	口：1	
6	066-04	弥生土器	く字甕	f15	SH63	14.8			内：ハケ・横ナデ 外：ハケ・横ナデ	にぶい橙色	粗	良	口：2	
7	067-05	弥生土器	く字甕	f15	SH63	25			内：ナデ・横ナデ 外：横ナデ・クシ刺突	にぶい黄橙色	やや粗（径３㎜以下の砂粒混）	良	口：2	
8	066-08	弥生土器	高杯	f15・16	SH63	22			内：横ナデ 外：ハケ・横ナデ	浅黄橙色	やや密	良	口：１	
9	066-06	弥生土器	高杯	f15	SH63	20			内：縦ミガキ･横ナデ 外：縦ミガキ･横ナデ	橙色	密（径１㎜以下の白砂粒混）	良	口：2	
10	066-07	弥生土器	高杯	f15	SH63	21.4			内：縦ミガキ 外：横ナデ･縦ミガキ･クシ描波状文	橙色	粗	良	口：2	
11	067-07	弥生土器	壺	f16	SH63	10.4			内：横ミガキ 外：不明	浅黄橙色	密	良	口：4	
12	067-08	弥生土器	壺	f15	SH63 貯蔵穴	12.7			内：ナデ 外：ミガキ	にぶい黄橙色	やや粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	底：8	
13	066-05	弥生土器	壺	f15	SH63	15			内：不明 外：横ナデ	橙色	やや粗	良	口：4	花弁状の押圧１箇所あり
14	067-06	弥生土器	壺	f15	SH63	18.2			不明	橙色	粗（径１㎜以下の砂粒混）	良	口：2	
15	066-01	弥生土器	壺	f16	SH63				内：指オサエ・ナデ 外：縦ミガキ・刺突	橙色	密	良	頸：3	
16	062-02	弥生土器	壺	f15	SH63		6.2		内：ナデ 外：不明	橙色	やや粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	底完存	
17	067-01	土製品	土玉	f16	SH63	最大径 3.2	厚 2		不明	にぶい黄橙色	密	良	完存	赤彩
18	067-02	弥生土器	ミニチュア甕	f15	SH63		台：3.5		内：ナデ 外：横ナデ	褐灰色	密（微砂粒混）	良	台完存	
19	067-03	弥生土器	ミニチュア？	f15	SH63		台：3		外：ナデ	にぶい橙色	やや粗（白砂粒混）	良	台完存	
20	067-04	弥生土器	鉢	f15	SH63	8.8	3.4	5	内：ナデ 外：ナデ・ケズリ	橙色	密	良	底完存	
21	066-02	弥生土器	蓋？	f15	SH63	11.9			不明	浅黄橙色	やや粗	良	端：2	２個１対の円形透穴
22	028-03	弥生土器	高杯	j8	SH43				内：指オサエ 外：櫛描直線文	浅黄橙色	やや粗	良		円形透穴　現存１ヶ所
23	077-01	弥生土器	受口状口縁甕	k14	SH114 p34	15.6			内：ナデ・横ナデ 外：横ナデ横ハケ・烈点文	黄褐色	粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	口：5	外面スス付着
24	077-03	弥生土器	く字甕	j14	SH114 p2	13			内：ハケ 外：横ナデ・刺突	にぶい黄橙色	密	良	口：2	
25	079-02	弥生土器	く字甕	j14	SH114 p27	23.8			内：横ハケ・ケズリ 外：刺突	黄橙色	粗（細砂混）	良	口：2	口縁部外面スス付着
26	074-01	弥生土器	く字甕	j14	SH114 p8	15.8			内：ハケ・横ナデ 外：横ナデ	橙色	やや粗	良	口：2	外面スス付着
27	077-02	弥生土器	く字甕	k13・14	SH114 p32･p35	13.7			内：ケズリ・ナデ・横ナデ 外：ハケ・横ナデ	にぶい黄橙色	粗（白砂粒混）	良	口：3	外面スス付着
28	079-05	弥生土器	甕？ 底部	j14	SH114		5		内外面共ナデ	橙色	やや粗（径１㎜以下の白砂粒混）	良	底：4	
29	079-04	弥生土器	小型甕	j14	SH114		台：4		不明	橙色	粗	良	台：2	
30	079-09	弥生土器	甕	j14	SH114		4		内：ナデ 外：ハケ・横ナデ	明赤褐色	密	良	底：3	

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（１）

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
31	077-04	弥生土器	台付甕	j14	SH114 p28		台 7.8		内：ナデ・指オサエ・横ナデ 外：ナデ・横ナデ	橙色	やや密（径３㎜以下の白砂粒混）	良	台：8	
32	077-06	弥生土器	台付甕	j13	SH114 p10		台8.6		内：ナデ・横ナデ 外：横ナデ	橙色	粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	台：4	
33	077-05	弥生土器	台付甕	j13	SH114 p4		台9.8		内：ナデ・横ナデ 外：ケズリ・横ナデ	橙色	粗（径３㎜以下の白砂粒混）	良	台：3	
34	079-03	弥生土器	甕	j14	SH114 p27		8		内外面共ハケ	橙色	粗（細砂多く混）	良	底完存	
35	078-02	弥生土器	甕	j14	SH114 p26	16.4			内：指オサエ・ナデ 外：不明	橙色	密（径２㎜以下の砂粒混）	良	底：6	
36	079-06	弥生土器	高杯	k14	SH114 p36				内：ハケ・横ナデ 外：縦ミガキ・横ナデ	浅黄橙色	密	良	口：2	
37	075-01	弥生土器	高杯	j13・14	SH114 p1・p3	23.7			内：縦ミガキ・横ミガキ 外：縦ミガキ・横ミガキ	にぶい黄橙色	やや密（径１㎜以下の砂粒混）	良	口：5	
38	079-08	弥生土器	高杯	j14	SH114				内：ナデ 外：クシ描直線文・刺突	橙色	やや粗	やや不良		
39	075-04	弥生土器	高杯	j13	SH114 p19				内：横ナデ 外：縦ミガキ・クシ描直線文	明黄褐色	粗（細砂多く混）	良		３方向円形透穴
40	075-03	弥生土器	高杯	j13	SH114 p9・p22				内：ナデ 外：縦ミガキ・クシ描直線文	橙色	粗（細砂多く混）	良		３方円形透穴？×２段(上：現存2箇所下：現存１箇所)
41	075-02	弥生土器	高杯	j14	SH114 p30				内：指オサエ・ハケ 外：縦ミガキ・クシ描直線文	明黄褐色	粗（径２㎜以下の砂粒混）	良		円形透穴 現存１箇所
42	078-03	弥生土器	器台	k14	SH114 p33				内：ナデ 外：擬凹線	橙色	粗（細砂多く混）	良		
43	078-01	弥生土器	壺	j13	SH114	12.2			内：指オサエ・ナデ・横ナデ 外：横ナデ	にぶい黄橙色	密（径２㎜以下の砂粒混）	良好	口：10	
44	078-04	弥生土器	壺	j13	SH114 p15		4.4		内：ナデ 外：縦ミガキ	にぶい黄橙色	粗（細砂多く混）	やや不良	底完存	
45	076-02	弥生土器	壺	j13	SH114 p24	10.9			内：不明 外：横ナデ・クシ描直線文	橙色	粗（細砂多く混）	良	口：9	
46	030-01	弥生土器	壺	j14	SH114	12			内：ハケ 外：ハケ・横ナデ	浅黄橙色	やや粗（径１㎜以下の砂粒混）	良		
47	076-03	弥生土器	壺	j14	SH114 p31	13.8			内：不明 外：クシ描直線文	浅黄橙色	粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	口：4	
48	079-01	弥生土器	壺	j14	SH114 p27		5		内：ハケ 外：ハケ・横ハケ	黄橙色	粗（細砂多く混）	良好	口：5	
49	076-01	弥生土器	壺	j13	SH114 p20・p25	17.3			内：横ミガキ・刺突 外：ハケ・横ナデ・クシ描直線文・波状文・刺突	にぶい褐色	粗（径５㎜以下の砂粒多く混）	良	口：4	
50	076-04	弥生土器	壺	j13	SH114 p22		8.2		内：不明 外：ナデ	にぶい褐色	粗（径５㎜以下の砂粒混）	やや不良	底完存	
51	071-03	弥生土器	く字甕	c23・24	SH223	12			内：ハケ 外：ハケ・横ナデ・刺突	橙色	やや密	良	口：2	体部に焼成後穿孔
52	071-01	弥生土器	く字甕	c24	SH223 p7	13.2			内：板ナデ・横ナデ 外：ハケ・横ナデ	灰オリーブ色	密	良	口完存	
53	070-01	弥生土器	く字甕	c24	SH223 p6	14.6	5.6		内：板ナデ・横ナデ 外：ハケ・横ナデ・ケズリ	浅黄橙色	やや粗	良	口：4	外面スス付着
54	072-01	弥生土器	く字甕	c24	SH223 主柱穴 p5	16.4			内：ケズリ・ナデ・横ナデ 外：ケズリ・ナデ	橙色	やや粗（白砂粒多く混）	良	口：6	体部外面にスス付着
55	072-02	弥生土器	く字甕	c24	SH223 主柱穴 p5		4.7		内：ハケ・ケズリ 外：ハケ	にぶい黄橙色	やや粗（白砂粒混）	良	底：5	体部外面にスス付着・被熱
56	068-02	弥生土器	高杯	c23	SH223 主柱穴 p8		10.6		内：ナデ・横ナデ 外：横ナデ・縦ミガキ	にぶい黄橙色	やや密	良	脚完存	２個１対円形透穴
57	069-04	弥生土器	高杯	c24	SH223 p4		17.6		内：ナデ 外：縦ミガキ・クシ描直線文	橙色	密	良	脚：4	３方向円形透穴
58	068-01	弥生土器	鉢？	c23	SH223 主柱穴 p8	24.8			内：縦ミガキ・横ナデ 外：指オサエ・縦ミガキ・横ナデ	橙色	やや密	良	口完存	外面にスス付着
59	069-01	弥生土器	壺	c23	SH223 p2	9.6			内：指オサエ・ハケ・横ナデ 外：縦ミガキ・横ナデ	橙色	密（砂粒混）	良	口：4	
60	069-03	弥生土器	壺	c24	SH223 p3		4.4		内：指オサエ・ナデ 外：ナデ・ハケ	にぶい黄橙色	やや粗（砂粒混）	良	底完存	

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（２）

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
61	071-02	弥生土器	壺		SH223	13.4			内：不明 外：横ナデ	橙色	やや粗	やや不良	口：1 頸：7	
62	073-01	弥生土器	壺	c23	SH223 p2	12.4	6.6		内：ハケ・指オサエ・ナデ・横ナデ 外：ハケ・縦ミガキ・横ナデ	浅黄橙色	やや粗（砂粒多く混）	良	口：6	絵画土器（船・鹿他）
63	068-03	弥生土器	器台	c23	SH223 p1	17			内：ナデ・横ミガキ・クシ扇文・刺突(円) 外：縦ミガキ・クシ描直線文・刺突(円)	にぶい黄橙色	粗（径６㎜以下の礫多く混）	良	口：9	４方向円形透穴×２段　円形刺突は同一原体
64	069-02	弥生土器	壺	c23	SH223 p2		6.3		内：ハケ・ナデ 外：縦ミガキ	にぶい黄橙色	密（砂粒混）	良	底完存	
65	064-03	弥生土器	壺	d17	SH244	12			内：不明 外：クシ描直線文・刺突	浅黄橙色	やや粗	やや不良	口：2	
66	064-02	弥生土器	壺	d17	SH244	13.2			内：クシ描波状文・刺突(円) 外：クシ刺突(円)	橙色	粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	口：2	円形の刺突は同一原体
67	064-04	弥生土器	ﾐﾆﾁｭｱ壺	c16	SH244	3.6			不明	灰白色	やや密	良	口：4	
68	064-05	弥生土器	ﾐﾆﾁｭｱ壺	c16	SH244		3.6		内外面共ナデ	灰色	やや粗	やや不良	底完存	
69	064-01	弥生土器	高杯	d16	SH244				内：ミガキ、ナデ 外：縦ミガキ・クシ描直線文・刺突	にぶい赤褐色	密	良好		
70	063-01	弥生土器	高杯	a19	SH269 p3	13	脚9.2	9.5	内外面共縦ミガキ・横ナデ	淡黄色	密	良好	口：10 脚：2	杯部端面に炭化物付着
71	063-03	弥生土器	壺	a19	SH269	10.2			内：ハケ・横ナデ 外：ハケ・縦ミガキ	橙色	やや密 (径４㎜の礫混)	良	口：7	
72	063-02	弥生土器	壺	a19	SH269 p2	14.4			内：横ナデ 外：ハケ・横ナデ・刺突	淡黄色	密	良	口：8	
73	063-04	弥生土器	壺	a19	SH269 p1	14			内：ナデ・刺突 外：クシ描直線文・波状文	浅黄橙色	粗（径３㎜以下の砂粒混）	良	口：4	刺突・クシ描直線文・波状文の原体は同じ
74	065-02	弥生土器	高杯	a24・25	SH270	23.5			内：縦ミガキ 外：縦ミガキ・クシ描波状文	浅黄橙色	密	良	口：1	
75	065-03	弥生土器	高杯	a24	SH270 主柱穴				不明	明赤褐色	粗（径３㎜以下の砂粒混）	やや不良		
76	064-06	弥生土器	壺	h20	東おちこみ	8			内：横ハケ・横ナデ 外：横ナデ	浅橙色	やや粗	良	口：3	
77	064-07	弥生土器	壺	h20	東おちこみ		6.2		内：ナデ 外：不明	浅黄橙色	やや粗	良	底完存	底部に焼成前穿孔
78	061-01	弥生土器	台付甕	f16	SX190		台7.7		内外面共ナデ	にぶい橙色	密（微砂粒混）	良	台：4	
79	030-02	弥生土器	高杯	f17	SX190		脚11.4		内外面共ナデ・ハケ	淡橙色	やや粗	良	脚：2	
80	061-02	弥生土器	高杯？	a16	SX190		脚14.4		内：ナデ 外：縦ミガキ・横ナデ	灰褐色	やや密 (微砂粒混)	良好	脚：2	脚端部に炭化物付着・蓋の可能性あり
81	028-02	弥生土器	高杯	k13	SK116		脚12		内：ナデ 外：縦ミガキ・クシ描直線文	浅黄橙色	やや密	良	脚：4	
82	061-03	弥生土器	く字甕	d16	検出中	14			内：ナデ・横ナデ 外：ハケ・横ナデ	にぶい橙色	やや粗（径２㎜以下の砂粒混）	良	口：2	
83	061-04	弥生土器	台付甕	a25	検出中		台7.9		内外面共ナデ	淡赤橙色	密（微砂粒混）	やや不良	台：3	
84	061-05	弥生土器	甕	j・k13	SX129内		4.4		内：ハケ 外：ハケ・ナデ	にぶい橙色	密（微砂粒混）	良	底：8	内面に炭化物付着
85	047-02	須恵器	杯蓋	i 17	SX173 P1	14		3.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	灰～暗灰色	やや粗（径４㎜以下の礫混）	良	完存	
86	047-01	須恵器	杯身	i 17	SX173 P2	13		4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	灰白色	やや粗（径３㎜以下の礫混）	良	完存	
87	047-04	須恵器	杯蓋	b19	SX257 P2	10.5		3.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラ切り	灰白～灰色	やや粗（径３㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	
88	046-05	須恵器	杯身	b19	SX257 P1	10.8		3.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラケズリ	灰色	やや粗	良	口：3	
89	046-01	土師器	椀	g19	SX250 P1	12		5.1	内外面共にナデ	橙色	やや粗（径５㎜以下の礫混）	並	口：4	底部木葉痕
90	047-03	須恵器	杯身	g19	SX250 P2	9.2		3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラ切り	灰色	やや粗（径３㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（３）

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
91	046-02	土師器	椀	g18	SX255 P1	11.5		4.7	内外面共にナデ	明黄褐色	やや粗	並	ほぼ完存	底部木葉痕
92	046-04	土師器	高杯	j16	SX139		6.5		不明	浅黄橙～明黄褐色	粗	並	脚：3	
93	029-01	須恵器	杯蓋	b23	検出中	12	4.1		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	にぶい黄～灰オリーブ色	やや粗（径８㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	
94	047-05	須恵器	杯蓋	a25	検出中	10	4		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラ切り	灰色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	良	完存	
95	029-02	須恵器	杯身	b18	検出中	10	4		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラ切り	浅黄色	やや粗	良	口：4	
96	029-03	須恵器	杯身	f16	検出中	10.2	3.6		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラ切り	灰白～にぶい黄色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	良	口：1	
97	049-02	須恵器	杯身	b19	SX257 東隣	8.8	2.9		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラ切り	灰白色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	やや良	ほぼ完存	底部外面にヘラ記号あり
98	029-08	須恵器	高杯	k17	検出中	10.3			内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後直線文	青黒色	密	良	脚：3	
99	030-04	須恵器	壺	j 16	検出中				内外面共にロクロナデ 外面に施文	灰白～オリーブ灰色	やや密	良	口：1	
100	049-04	須恵器	椀	h19	検出中				内外面共にナデ	灰色	やや密	良		
101	015-01	須恵器	壺	d16	SX190上	9.8	4	11.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	灰色	やや密（径２㎜以下の礫混）	良	口：6	
102	020-01	須恵器	壺	k16	SX251		7.8		磨耗のため不明	灰白色	粗（約３㎜以下の礫混）	不良	体部ほぼ完存	摩耗著しい
103	028-04	土師器	高杯	g16	検出中				内：回転ナデ 外：回転ナデのち面とり（7面）	橙	密	良		
104	080-05	土師器	皿	j14	SX117 p5	7.8		1.1	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	密（微砂粒少量混）	良好	完存	
105	080-01	陶器	皿	j14	SX117 p1	8.5	5.2	2	内外面共にロクロナデ 底部糸切痕	灰白色	粗（約３㎜以下の礫混）	良好	ほぼ完存	見込み部分に指頭圧痕
106	080-02	陶器	皿	j14	SX117 p2	8.7	5.3	1.6	内外面共にロクロナデ 底部糸切痕	灰白色	粗（約２㎜以下の礫混）	良好	完存	見込み部分に指頭圧痕
107	080-03	陶器	皿	j14	SX117 p3	8.9	4.9	1.6	内外面共にロクロナデ 底部糸切痕	灰白色	粗（約３㎜以下の礫混）	良好	完存	見込み部分に指頭圧痕
108	080-04	陶器	皿	j14	SX117 p4	8.4	4.4	1.7	内外面共にロクロナデ 底部糸切痕	灰白色	粗（約２㎜以下の礫混）	良好	完存	見込み部分に指頭圧痕
109	080-09	土師器	皿	h16	SX154 p4	7.7		1	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	灰白色	密	良好	口：9	
110	080-06	土師器	皿	h16	SX154 p1	8.1		1.1	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	密	良好	完存	
111	080-07	土師器	皿	h16	SX154 p2	7.9		1.1	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	密	良好	完存	
112	080-08	土師器	皿	h16	SX154 p3	7.6		1	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	灰白色	密	良好	完存	
113	048-01	土師器	皿	j13	SX129	11.3		2.7	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	にぶい橙～浅黄橙色	やや密	並	口：11	
114	048-03	土師器	皿	j13	SX125	11			内外面共にナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：7	
115	029-07	土師器	皿	f16	SX172	9			内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	灰白色	やや粗	良	口：4	
116	053-01	常滑	不識壺	f19	集石28-南	16.2	13.5	17.6	内：指オサエ・回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	茶褐色	やや粗	良	口：11	印花紋あり　蓋石あり
117	052-01	常滑	玉縁口縁壺	f19	集石28-中央	9.1	8	21.8	内：ナデ回転ナデ 外：回転ナデ・回転ケズリ	にぶい赤褐色	密（径１㎜以下の砂粒）	良	完存	肩部に沈線１条あり
118	051-01	瀬戸	山茶椀	f19	集石28-北	13.5	4.8	5.8	内外面共にロクロナデ 底部糸切痕	灰白色	粗（径６㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	蓋に転用
119	051-02	常滑	壺	f19	集石28-北	13.4	11	25.8	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	灰白色	やや密（径１㎜以下の砂粒混）	良	ほぼ完存	肩部に沈線２条とヘラ記号あり
120	014-01	古瀬戸	水注	f18	集石27		10.5		内外面共にナデ	灰オリーブ色	やや密	良	ほぼ完存	頸部打ち欠き

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（４）

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
121	015-02	常滑	三筋壺	f18	SX249		7.8		内：指オサエ・ナデ・回転ナデ 外：ケズリ・工具ナデ・回転ナデ	灰色	やや粗（径3㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	口縁部打ち欠き
122	009-01	瀬戸	山茶椀	g18	SX248	7	4.7	5.5	内外面共にロクロナデ 底部糸切痕	淡黄色	やや粗（径5㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	蓋に転用
123	009-03	常滑	壺	g18	SX248	11.6	18.5	20	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	にぶい橙色	やや粗（径5㎜以下の礫混）	良	完存	肩部にヘラ記号あり
124	004-02	古瀬戸	三耳壺	g17	集石35B-南	12	9.7	28.4	内外面共ロクロナデ	(地)灰白色 (釉)淡黄～オリーブ黄色	密	良	口：7 頸部から下はほぼ完存	蓋石あり　口縁部に1ヶ所焼成前の切込あり
125	007-01	常滑	壺	g17	集石35C		13.5		内：回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	にぶい橙～灰褐色	やや粗（径8㎜以下の礫混）	良	肩部から下は8割程完存	肩部にヘラ記号あり
126	002-01	常滑	壺	g18	集石25A-南	11.7	11.3	31.6	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	にぶい赤褐色	やや密（径2㎜以下の礫混）	良	口：4 体部ほぼ完存	蓋石あり　体部上半及び下半にヘラ記号あり
127	003-01	常滑	不識壺	g18	集石25A-北	15.6	13.7	17.4	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	灰色	やや粗（径2㎜以下の礫混）	良	口：7 体部ほぼ完存	肩部にスタンプ文あり
128	020-02	土師器	鍋	h18	SX246	25.6		12.5	内：指オサエ・ナデ・ヨコナデ 外：指オサエ・ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	淡黄色	粗（径4㎜以下の礫混）	並	口：6	
129	012-01	常滑	不識壺	h15	集石23-SK7	17.5	12.4	18.3	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	にぶい橙色	やや粗（径10㎜以下の礫混）	並	ほぼ完存	蓋石あり　肩部にヘラ記号あり
130	011-01	常滑	短頸壺	i15	集石23-SK3	13.8	15.7	28.8	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	灰褐色	やや粗（径3㎜以下の礫混）	並	完存	蓋石あり
131	017-01	土師器	鍋	h16	集石22I	29.1		19.8	内：ナデ・ヨコナデ 外：ナデ・ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	明黄褐色	粗（径2㎜以下の礫混）	並	口：2	蓋石あり
132	018-01	土師器	鍋	i16	集石22B	27.1		16.6	内：指オサエ・ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	浅黄橙色	やや密（径3㎜以下の礫混）	並	口：5	
133	019-01	土師器	鍋	j・k17	SX245	24.8		12.4	内：指オサエ・ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	にぶい黄橙色	やや粗（径2㎜以下の礫混）	並	口：11	
134	021-01	土師器	鍋	j18	SX181	31.8		16.7	内：指オサエ・ナデ・ケズリ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	浅黄橙色	やや粗（径2㎜以下の礫混）	並	口：12	
135	008-01	土師器	鍋	k16	集石7C-中央	29.3		17.4	内：指オサエ・ナデ・ハケメ・ヨコナデ 外：ナデ・ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	浅黄橙色	粗（径2㎜以下の礫混）	並	口：11	
136	013-01	土師器	鍋	k16	集石7C-南	30.6		20.2	内：指オサエ・ナデ・ハケメ・ヨコナデ 外：ナデ・ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	にぶい黄橙色	やや粗	並	口：10	体部下半3ヶ所に穿孔
137	005-01	常滑	不識壺	j16	集石7B	15.8	11.6	19.1	内：ナデ・回転ナデ 外：回転ナデ	にぶい橙色	やや粗（径4㎜以下の礫混）	並	完存	蓋石あり　肩部にヘラ記号あり
138	016-01	常滑	不識壺	j16	集石7A-南	16	11.4	18.8	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	灰褐～にぶい橙色	やや密（径5㎜以下の礫混）	良	完存	肩部にヘラ記号あり
139	006-01	常滑	壺	j・k16	集石6C-中上	12.6	10.2	20.6	内：ナデ 外：回転ナデ	暗赤褐色	やや粗（径10㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	肩部にヘラ記号あり
140	006-02	常滑	不識壺	j16	集石6C-北	18.2	11.2	17.8	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	にぶい黄橙～極暗赤褐色	やや粗（径6㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	肩部にヘラ記号あり
141	016-02	常滑	不識壺	k16	集石6C-南	18.4	14.4	17.2	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	にぶい橙色	やや粗（径5㎜以下の礫混）	並	口：11	肩部にヘラ記号あり
142	001-01	常滑	壺	j・k16	集石6C-中下	20.1	14.2	29.6	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ・工具ナデ	にぶい橙～にぶい赤褐色	やや粗（径9㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	肩部にヘラ記号あり
143	004-01	古瀬戸	四耳壺	k16	集石6A		6.7		内：ロクロナデ・指オサエ 外：ロクロナデ・ケズリ	淡黄色	やや密	良	肩部から下はほぼ完存	蓋石あり　口縁部及び耳部分打ち欠き
144	055-01	古瀬戸	瓶子	k17	集石5A		10.3		内：ロクロナデ・指オサエ 外：ロクロナデ	灰白色	密	良	肩：2 体部下半はほぼ完存	肩部に印花文あり
145	029-04	陶器	山皿	g20	検出中	8.2	5	1.6	内外面共にロクロナデ 底部糸切り痕	浅黄色	密（径2㎜以下の礫混）	良	口：3	
146	048-04	土師器	皿	f17	検出中	7.2		1.5	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：9	15c末～16c
147	042-03	土師器	皿	k15	検出中	7.7		1.8	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：3	
148	042-05	土師器	皿	f17	検出中	7.6		1.4	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：4	16c
149	029-05	土師器	皿	j18	検出中(明黄褐色粘質土)	6.6		1.3	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄色	やや粗	良	口：5	
150	048-06	土師器	皿	h17	SD187	7		1.2	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：3	15c末～16c

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（５）

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
151	029-06	土師器	皿	h16	集石22	7.2		1.4	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや粗	良	口：4	
152	042-04	土師器	皿	j18	集石	7.9		1.2	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：2	
153	048-05	土師器	皿	k14	集石14	8		1.2	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：6	
154	042-06	土師器	皿	i17	集石23	9.5		1.4	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：3	
155	042-02	土師器	皿	k15	集石11	10			内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	にぶい黄橙色	やや密	並	口：2	16c　多気報告書D系統
156	048-02	土師器	皿	k14	集石14	12		2.7	内：ナデ 外：指オサエ・ナデ	浅黄橙色	やや密	並	口：5	
157	050-04	古瀬戸	水滴	h18	検出中	2	2.6	3.9	内外面共、ロクロナデ	(地)灰白色 (釉)浅黄色	密	良	完存	灰釉
158	005-02	常滑	壺	k14	14A墓	12	10.4	23.8	内：指オサエ･ナデ･回転ナデ 外：回転ナデ･指オサエ･工具ナデ･ケズリ	にぶい黄橙色	やや粗（径３㎜以下の礫混）	並	口：7	
159	049-01	常滑	壺	f18	集石	14			内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	灰赤色	やや密（細砂粒）	良	口：2	肩部にヘラ記号あり
160	042-01	常滑	壺	h18	SD233上	19.1			内：指オサエ・ナデ・回転ナデ 外：回転ナデ	灰黄色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	並	口：3	
161	056-01	常滑	壺	k12	集石	11.8			内：指ナデ・回転ナデ 外：回転ナデ	にぶい黄橙色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	良	口：3	肩部にヘラ記号あり
162	009-02	常滑	不識壺	k17	SX140上	17.4	10	15.5	内：指オサエ･回転ナデ 外：回転ナデ･工具ナデ	浅黄～黒褐色	やや粗（径５㎜以下の礫混）	良	口：7	
163	030-03	常滑	不識壺	f19	検出中				内外面共回転ナデ	にぶい黄橙～にぶい赤褐色	やや粗	良	口：１	肩部にヘラ記号あり
164	050-02	陶器	蓋	h14	SD2	8		1.1	内外面共ロクロナデ	灰白色	密	良	口：１	
165	050-01	陶器	花瓶？	h15	SD2		6.5		内外面共ロクロナデ	(地)灰白色 (釉)明緑灰色	密	良	底：1	
166	027-01	陶器	皿	d17	SD201	19.9			内外面共ロクロナデ	灰白色	密	良	口：2	
167	026-04	土師器	皿	b19	SX204	8		1.1	内：ナデ・横ナデ 外：指オサエ･ナデ･横ナデ	浅黄橙色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	並	口：3	
168	054-01	瀬戸美濃	蓋	j14	集石	10		2.1	内：ロクロナデ・糸切痕 外：ロクロナデ	灰白色	密	良	口：10	
169	054-02	瀬戸美濃	双耳小壺	j14	集石	9	7	10.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ･ロクロケズリ	灰白色	密	良	完存	
170	026-01	瀬戸美濃	蓋	j14	SZ75	15.8		4.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	灰白色	密	良	口：9	
171	026-03	瀬戸美濃	蓋	j14	SZ75	18.4		4.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	(地)淡黄色 (釉)灰白色	やや密	良	口：4	倒立した状態で出土
172	026-02	瀬戸美濃？	行平鍋	j14	SZ75	16.7	5.8	10.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	(地)淡黄色 (釉)灰白色	やや密	良	口：11	３足　スス付着
173	010-01	常滑	壺	h18	SX235	15.7	15	21.5	内外面共回転ナデ	灰赤色	密	良	完存	
174	010-02	常滑	壺	h18	SX234	16.5	13.7	21.1	内：指オサエ・回転ナデ・ナデ 外：回転ナデ	にぶい橙色	密	良	完存	
175	025-01	常滑	甕	b23	SK81	36.6			内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	浅黄橙色	やや粗（径９㎜以下の礫混）	並	口縁部のみほぼ完存	逆の状態で出土
176	041-01	常滑	甕	h17	SK70	50.5	21	64.5	内：指オサエ・回転ナデ 外：回転ナデ	浅黄橙色	やや粗（径３㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	体部下半に穿孔あり
177	039-01	常滑	甕	e21	SK93	52		67.6	内：指オサエ・回転ナデ・工具ナデ 外：回転ナデ	橙色	やや密	並	ほぼ完存	
178	036-01	常滑	甕	e21	SK94	49.6	20	62.8	内：指オサエ・ナデ 外：回転ナデ	にぶい黄橙色	やや粗	並	ほぼ完存	墨書あり
179	037-01	常滑	甕	e21	SK95	55.4	21	64.9	内：指オサエ・ナデ・回転ナデ 外：指オサエ･回転ナデ	にぶい黄橙色	やや粗（径３㎜以下の礫混）	並	ほぼ完存	
180	024-01	常滑	甕	f20	SK96	69.6	20.7	64	内：指オサエ・ナデ・回転ナデ 外：ケズリ･ナデ･回転ナデ	にぶい黄橙色	やや密	並	ほぼ完存	

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（６）

報告書№	実測№	器種	器形	グリッド	遺構№(p以下は取り上げ№)	法量(cm)			調整等	色調	胎土	焼成	残存度	特記事項
						口径	底径	器高						
181	035-01	常滑	甕	a23	SK264	50	22.4	66.9	内：指オサエ・ナデ・回転ナデ 外：回転ナデ	にぶい黄橙色	やや密	並	ほぼ完存	
182	034-01	常滑	甕	a23	SK265	48.8	22	68.5	内：指オサエ・ナデ・回転ナデ 外：回転ナデ	黄橙色	やや粗（径５㎜以下の礫混）	良	ほぼ完存	
183	027-02	瀬戸美濃	腰折椀	f19	検出中	6.6	3	5.4	内外面共ロクロナデ 削り出し高台	(地)にぶい黄橙色 (釉)明緑灰色	密	良	口：4	
184	027-03	瀬戸美濃	丸椀	k14	検出中	9.2	3.8	5.1	内外面共ロクロナデ 削り出し高台	灰白色	密	良	口：4	
185	027-04	陶器	筒型容器？	j15	検出中	6.7	5.3	3.8	内外面共ロクロナデ 削り出し高台	灰白色	やや粗（径２㎜以下の礫混）	良	口：5	
186	050-03	瀬戸美濃	蓋	k15	集石13	6.7		1.4	内：ロクロナデ 糸切り痕 外：ロクロナデ	灰白色	密	良	口：5	
187	027-05	瀬戸美濃	双耳小壺	k15	検出中	6.5	5	7.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズリ	灰白色	密	良	口：11	

第４表　遺物観察表（土器・陶器）（７）

報告書№	実測№	器種	器類	グリッド	遺構№	取上№	法量(cm)		重さ（g）	特記事項
							長さ	幅		
188	033-01	鉄製品	小刀	j14	SX113		28.4	2.4		一部木質部分残存
189	033-02	鉄製品	刀子	j14	SX113			0.7	372.5	
190	032-01	鉄製品	釘	i16	SX170			0.5		
191	032-04	鉄製品	釘	i16	SX170			0.5		
192	032-08	鉄製品	釘	i16	SX170			0.4		
193	032-02	鉄製品	釘	i16	SX170			0.3		
194	032-07	鉄製品	釘	i16	SX170			0.4		
195	032-03	鉄製品	釘	f18	集石35			0.4		
196	032-05	鉄製品	釘	j14	SF76			0.4		
197	032-06	鉄製品	刀子	b19	SX204			1.5		
198	032-09	青銅製品	煙管	b19	SX204			1.2		吸口

第５表　遺物観察表（金属製品）

報告書№	実測№	器種	器類	グリッド	遺構№	取上№	初鋳(年)		重さ（g）	特記事項
199	031-03	銭貨	景徳元寶	g17	集石35	上から１枚目	1004	真書	2.595	表を上にして出土
200	031-05	銭貨	皇宋通寶	g17	集石35	上から2枚目	1038	真書	3.725	表を上にして出土
201	031-06	銭貨	開元通寶	g17	集石35	上から3枚目	960	真書	3.475	裏を上にして出土
202	031-04	銭貨	洪武通寶	g17	集石35	上から4枚目	1368	真書	3.275	裏を上にして出土
203	031-08	銭貨	咸平元寶	j18	集石24（SZ1直下）		998	真書	3.265	
204	031-02	銭貨	天聖元寶	f20	検出中		1023	篆書		
205	031-07	銭貨	寛永通寶ほか？	b19	SX204		1636	真書		熱変　5枚重なった状態で出土 上から1･4枚目は新寛永
206	031-01	銭貨	寛永通寶	b19	SX204		1636	真書		熱変　2枚重なった状態で出土 上から1枚目は新寛永

第６表　遺物観察表（銭貨）

報告書№	実測№	器種	グリッド	遺構№	取上№	石材	法量(cm)			重さ(g)	特記事項
							長さ	幅	厚さ		
207	060-02	石鏃	j14	検出中		サヌカイト	2.5	2.1	0.4	1.3	
208	060-03	石鏃	h17	pit1		サヌカイト	4.6	1.5	0.6	4.3	
209	060-04	スクレイパー	j13	検出中		サヌカイト	3.7	5.5	0.9	18.1	
210	060-01	石錘	j16	検出中		砂岩	6.5	5.6	13	53.5	
211	062-06	太型蛤歯石斧	a・b18	表土剥ぎ				4.9	4.6		
212	062-05	磨石	c19	ＳＸ190		砂岩	径7.5		4.9	352.2	敲打痕１ヶ所あり
213	059-01	砥石	j14	ＳＨ114	Ｓ３	花崗岩？	15	15	7	2250	
214	058-01	叩石	j14	ＳＨ114	Ｓ２		14.4	7.9	6.7	847.9	敲打痕５ヶ所あり
215	065-01	不明	a18・19	ＳＨ269			9.7	3.6	0.7	43.79	穿孔１ヶ所あり
216	060-05	砥石	d16	検出中		頁岩？			2.0		擦痕４面確認
217	049-05	不明	k14	検出中							
218	043-01	砥石	a・b19	検出中							
219	117-01	五輪塔	i17	集石	1	砂岩	空径12.5		5.0	900	
220	117-02	五輪塔	i17	集石	2	砂岩	風径12.9	火13.0×12.8	8.3	1800	
221	120-02	五輪塔	g17	集石	13	砂岩	空径11.0	風径12.3	14.1	2400	
222	121-01	五輪塔	g18	集石	1	砂岩	空径10.8	風径11.1	15.3	2800	
223	118-02	五輪塔	h18	ＳＤ233底	1	砂岩	空径11.6 風径13.2	火15.5×13.3	25.8	51500	
224	049-03	五輪塔	j13	集石		砂岩					「丙子」と刻字あり
225	120-01	石塔	i・j14	集石15付近		砂岩					
226	119-01	五輪塔	k16	集石	108	花崗岩	20.7	21.1	13	6550	梵字あり
227	111-01	五輪塔	h16	集石	4	花崗岩	空径12.5	風径12.4	19.2	4100	
228	111-02	五輪塔	h16	集石	108	花崗岩	19.4	18.8	12.6	7600	
229	111-03	五輪塔	h16	集石	7	花崗岩	径20.4		16.7	9600	
230	110-04	五輪塔	h16	集石22Ｅ基	ア	花崗岩	21	20.9	14.5	14400	
231	113-01	五輪塔	j16	集石	110	砂岩	空径11.5	風径14	20.9	3500	
232	113-02	五輪塔	j16	集石	106	砂岩	19.6	19.9	10.9	5250	
233	113-03	五輪塔	j16	集石	104	砂岩	径19.4		14.3	7100	
234	113-04	五輪塔	j16	集石７Ｂ		砂岩	18.7	18.9	15.3	9100	
235	106-01	五輪塔	k17	集石	10	砂岩	空径11.6	風径13.5	21.5	3750	
236	106-02	五輪塔	k17	集石	9	砂岩	20	20.4	11.8	6250	
237	104-02	五輪塔	k15	集石	103	砂岩	径18.3		14.3	6000	
238	104-01	五輪塔	k17	集石５Ｂ	ア	砂岩	18.1	19.1	15.6	9700	
239	108-01	五輪塔	j13	集石	6	砂岩	空径9.5	風径11.3	18.5	2000	
240	108-02	五輪塔	j13	集石	5	砂岩	15.5	16	8.8	3000	
241	108-03	五輪塔	j13	集石16-北	3	砂岩	径16.4		12.4	4500	
242	108-04	五輪塔	j13	集石16Ｃ基		砂岩	15.8	15.6	11	5400	
243	116-01	五輪塔	k17	集石	5	砂岩	空径9.8	風径10.9	15.3	2000	
244	116-02	五輪塔	k17	集石	7	砂岩	16.5	16.2	8.5	3400	
245	116-03	五輪塔	k17	集石	8	砂岩	径16.2		10.9	4100	
246	116-04	五輪塔	j17	集石５Ｂ基	イ	砂岩	17.2	16.4	11.8	7700	
247	110-03	五輪塔	h16	集石	107	砂岩	空径11.1	風径12.4	16.8	2350	
248	110-02	五輪塔	h16	集石	1	砂岩	16.4	16.9	9.3	3350	
249	110-01	五輪塔	h16	集石	8	砂岩	径16		12.8	4350	
250	109-01	五輪塔	h・i16	集石22Ｃ基北地輪		砂岩	16.4	15.7	9.7	6100	
251	107-01	一石五輪塔	i16	集石22Ｃ基中央地輪		砂岩	16.6	15.0			
252	105-01	一石五輪塔	e16	集石	4・5	砂岩	10.4	11.3	44.2	7100	
253	120-03	一石五輪塔	k15	集石	9	砂岩	15	15			
254	112-02	一石五輪塔	k14	集石	2・101	砂岩	15.6	15.6			
255	112-01	宝篋印塔	h16	集石	5・9	砂岩	径10.8				
256	115-01	宝篋印塔	e17	集石	1・5	砂岩	径12.2				
257	118-01	宝篋印塔	i16	集石	2	泥岩		24.2	16.3		
258	114-02	仏像	f18	集石		砂岩		20			

第７表　遺物観察表（石器・石製品）

写　真　図　版

巻頭　小谷赤坂遺跡と絵画土器（合成）

図版１

調査前風景（北東から）

調査区から北東方向を望む　写真中央が西山古墳

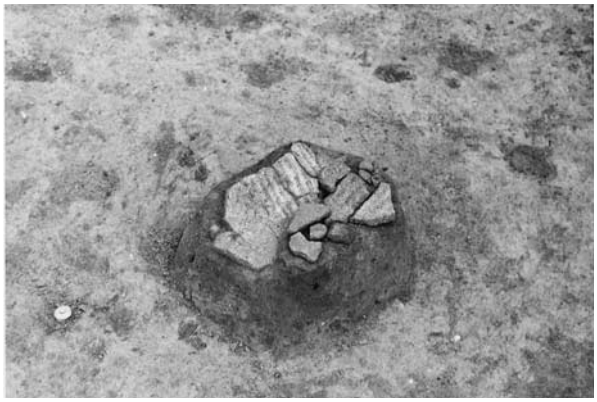
調査区北半完掘状況（西から）

調査区南半完掘状況（西から）

図版 3

調査区北半中世墓検出状況（南から）

調査区南半中世墓検出状況（西から）



縄文土器出土状況（西から）

ＳＨ45（東から）

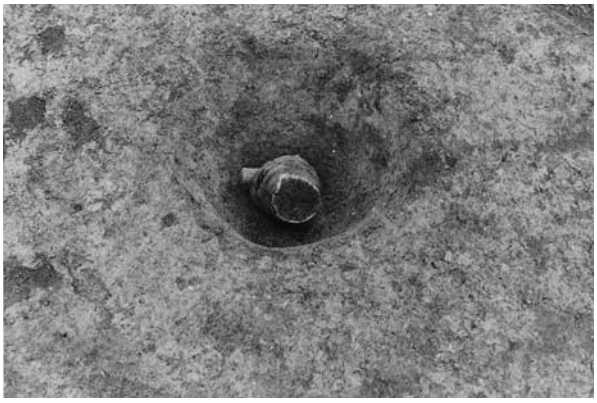
ＳＨ63（北から）

ＳＨ114北西部遺物出土状況（西から）

ＳＨ114（北西から）

図版５

ＳＨ223（北から）



ＳＨ223北西主柱穴遺物出土状況（西から）

ＳＨ43（東から）

ＳＨ269（西から）

ＳＨ270（東から）

ＳＸ39（小谷32号墳）（北から）

ＳＸ140（小谷30号墳）埋葬施設（南西から）

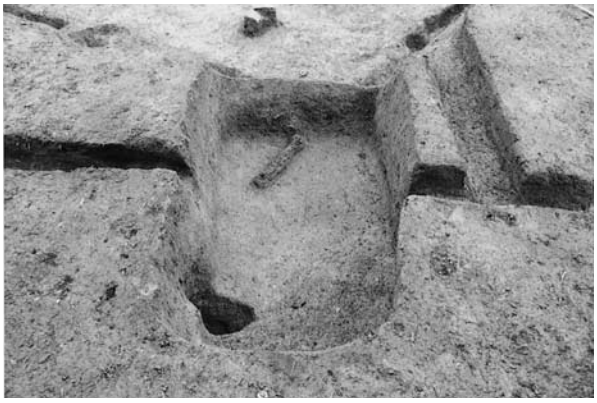
ＳＸ250（西から）

ＳＸ257（西から）

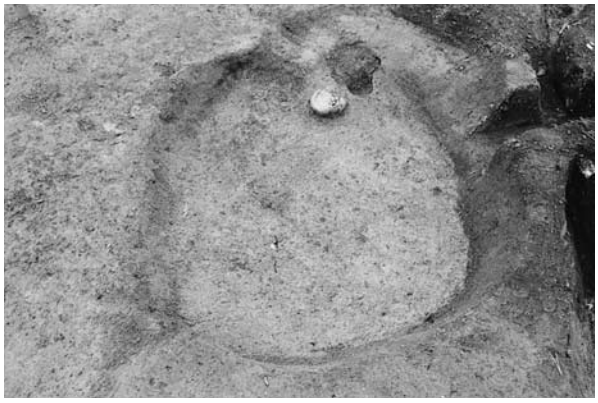
ＳＸ186（北から）

図版７

ＳＸ117（南から）

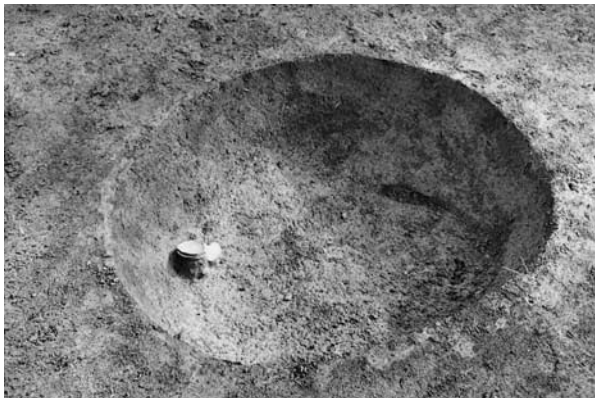


ＳＸ113（南から）



ＳＸ125（南から）

ＳＸ129（南から）



ＳＸ154（西から）

集石５（西から）

集石６・７（東から）

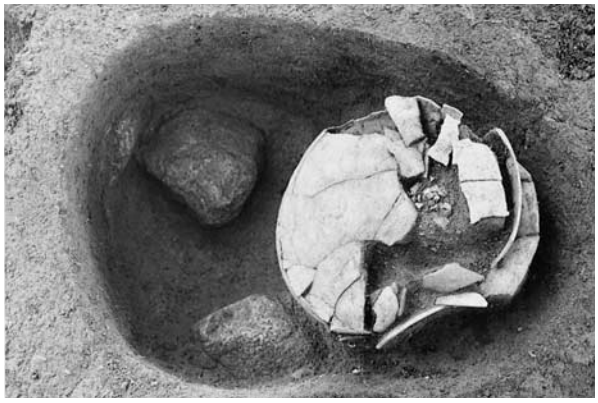
図版９

集石６・７　中央空白部分は墓道２ａ（北から）

集石６Ｃ断面（東から）

集石７Ｃ断面（西から）

集石12・13（東から）

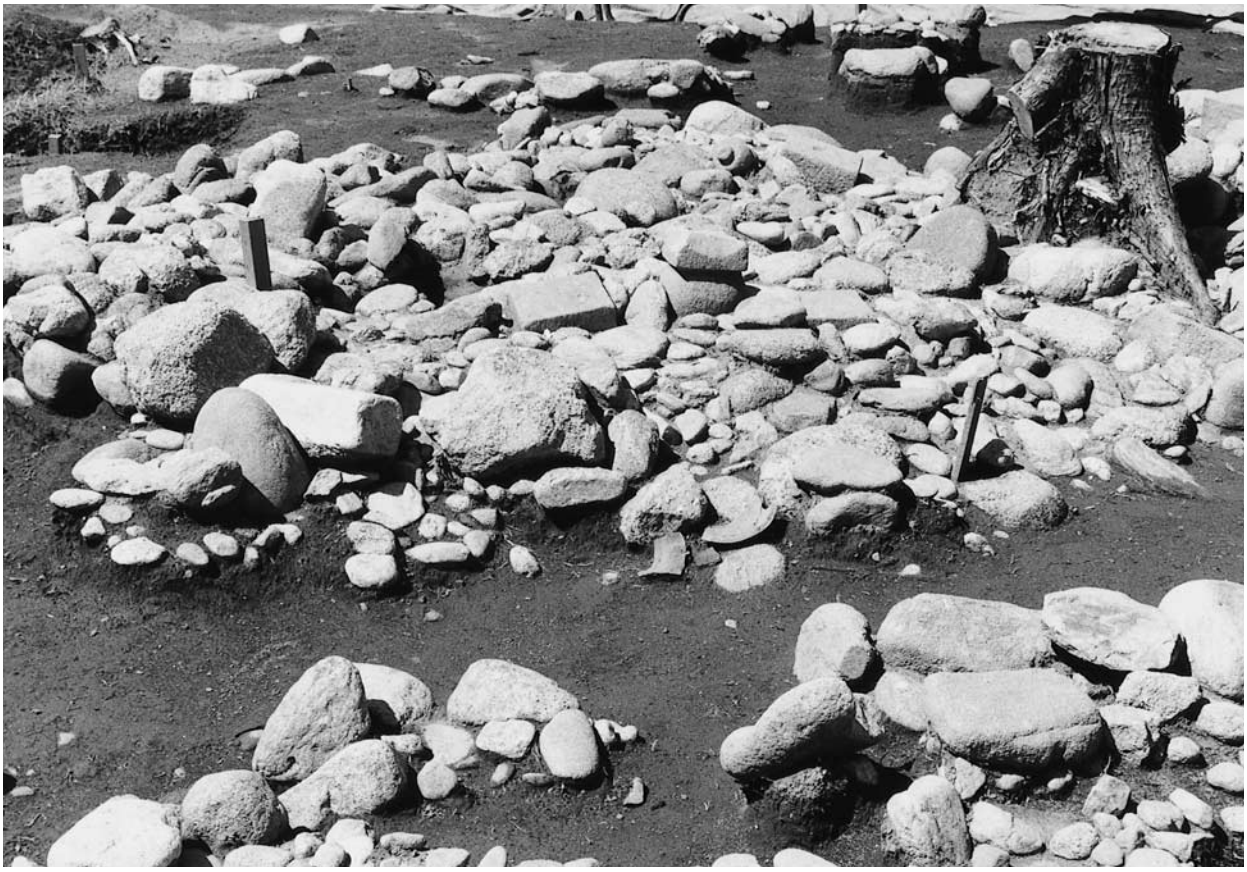


ＳＸ181（東から）

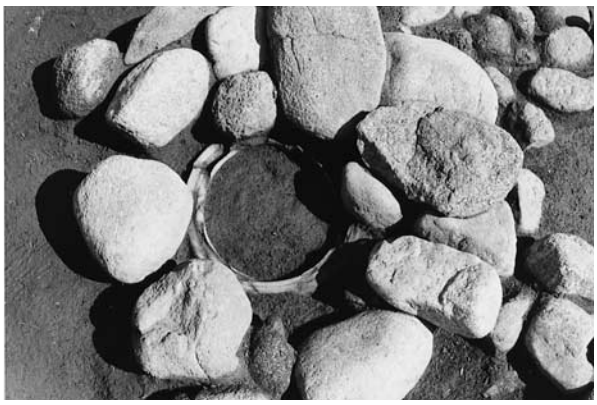
集石16（北から）

集石22　中央の五輪塔は付近に散乱していたものを組み合わせて復元（西から）

図版11



集石22（東から）



集石22Ｂ墓（南から）

集石24Ａ墓（北から）

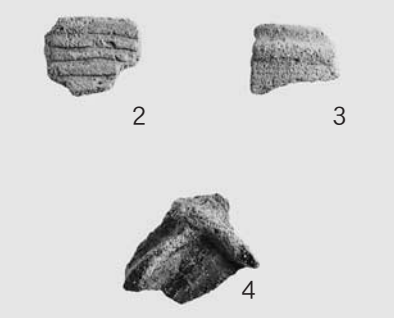
集石35Ａ・Ｂ墓（東から）

集石35内古銭出土状況（北から）

集石28（東から）

集石33（南から）

図版13



出土遺物（1）（17～19・29は1：1、20・21・23・27・31・32は1：2、その他は1：4）

37

38

39

40

41

43

45

47

48

49

51

52

53

54

出土遺物（２）（38～40・51は１：２、その他は１：４）

図版15

55

56

57

58

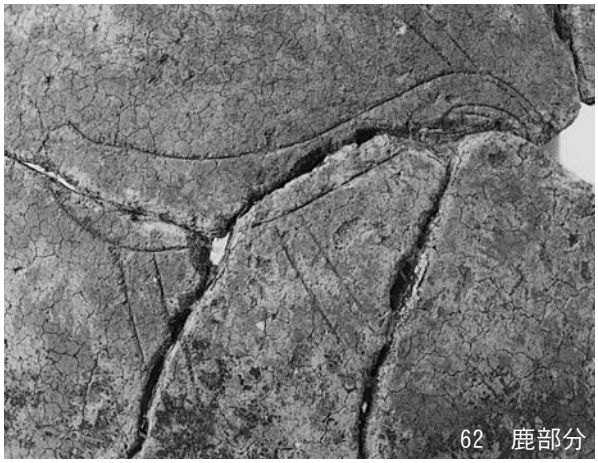
59

60

62

62　不明部分

62　舟部分


62　鹿部分

出土遺物（３）（55～60・62は１：４）

63上

67

68

63

69

70

72

73

74

75

77上

77

82

85

87

90

86

88

93

出土遺物（４）（67・68は１：１、69・74・82は１：２、その他は１：４）

図版17

89

91

94

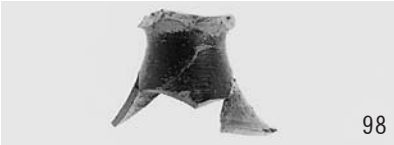
89下

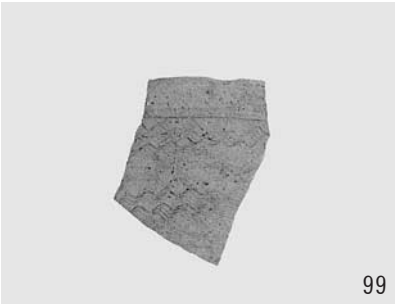
91下

92

95

97


98


99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

146

出土遺物（５）（100・146は１：２、その他は１：４）

116

117

120

121

118

119

123

124

出土遺物（6）（1：4）

図版19

125

127

126

129

130

128

出土遺物（7）（1：4）

131

137

132

138

133

140

134

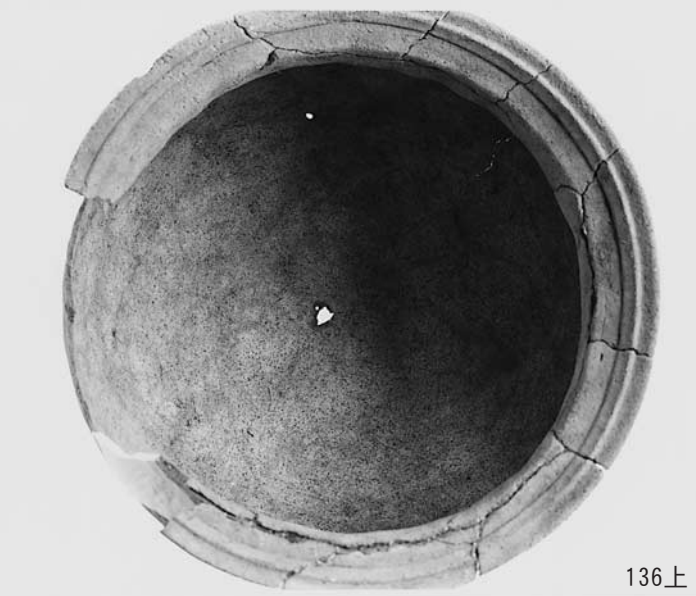
141

出土遺物（8）（1：4）

図版21

135

142


136上

139

136

143

出土遺物（9）（1：4）

144

147

149

150

152

153

155

156

157

159

158

162

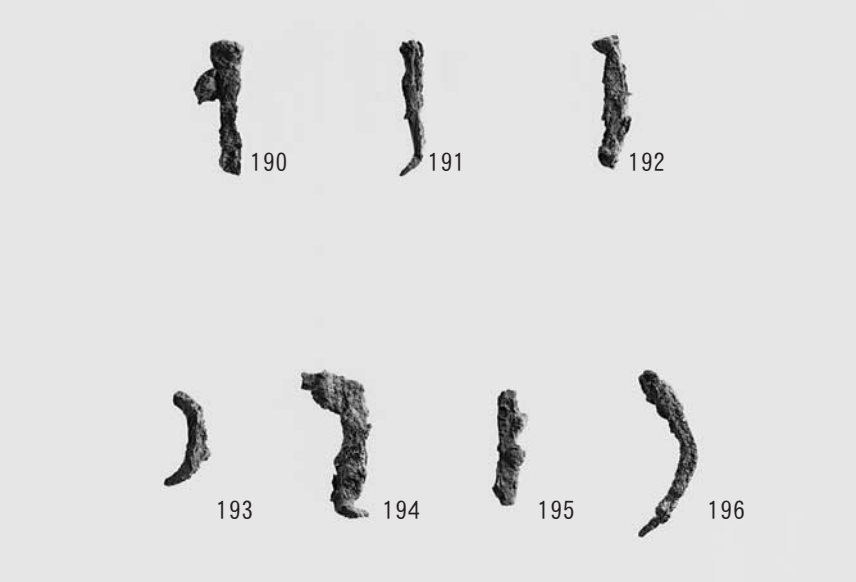
163

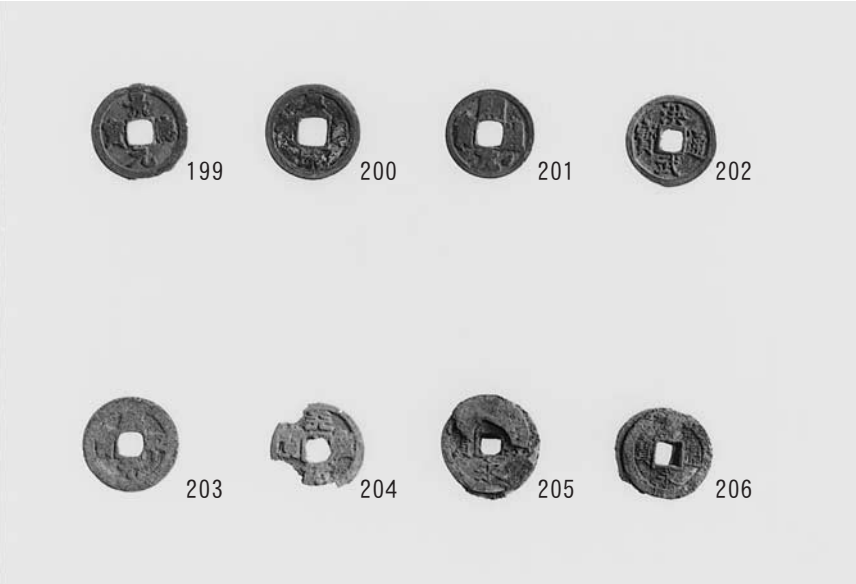
188

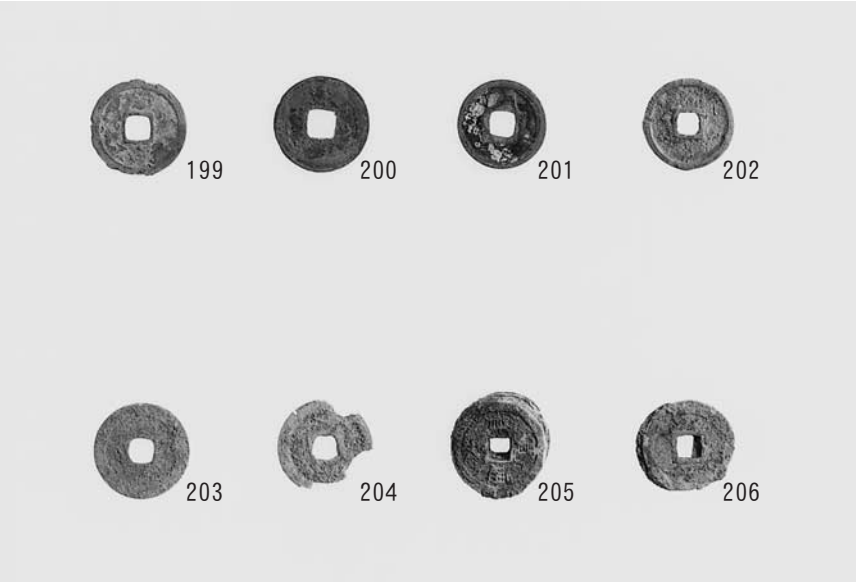
189

出土遺物（10）（147・149・150・152・153・155～157・163・188は１：２、144・158・159・162は１：４）

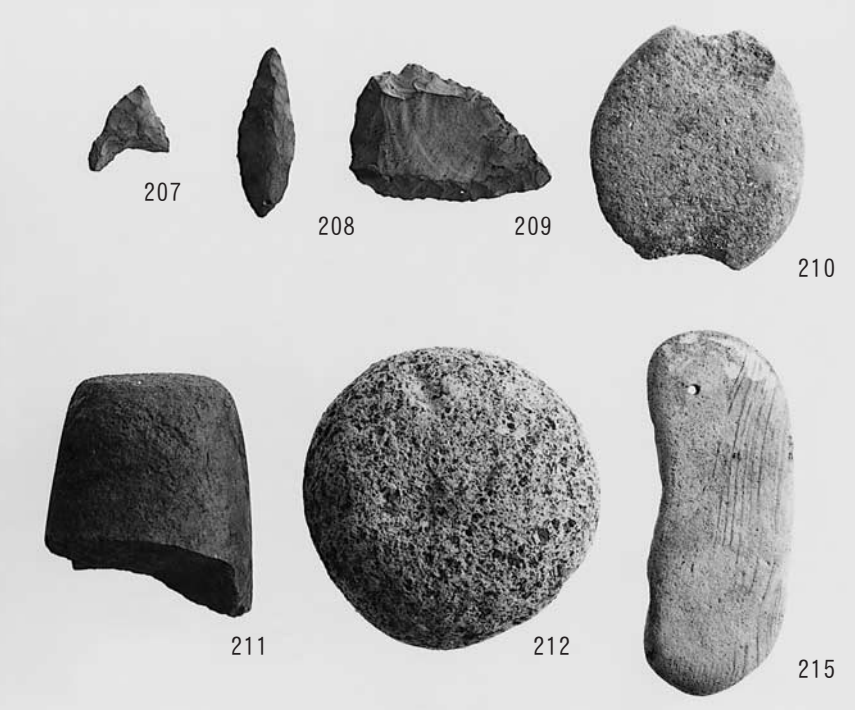
図版23

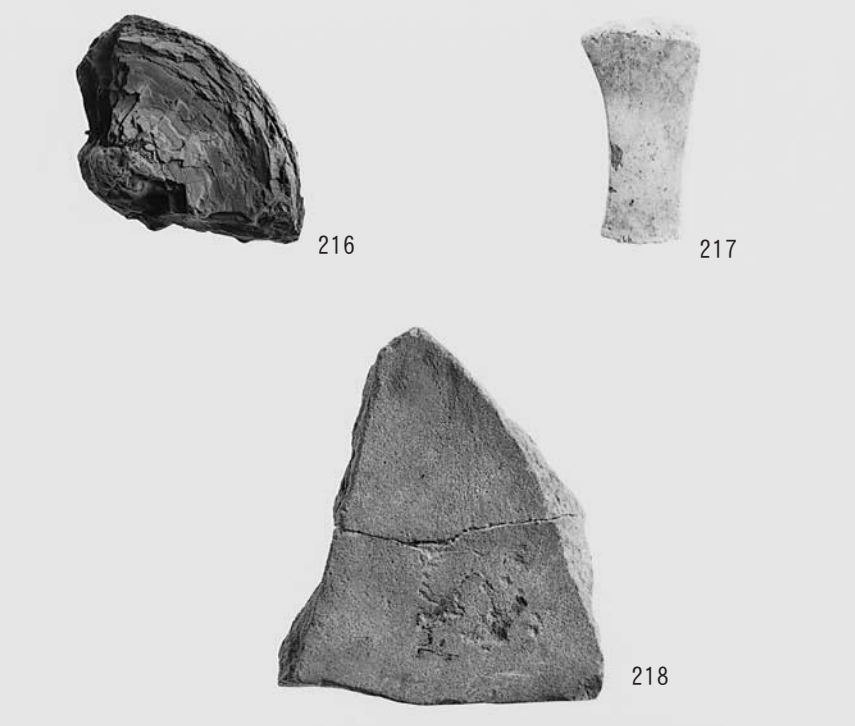

190
191
192
193
194
195
196


199
200
201
202
203
204
205
206


199
200
201
202
203
204
205
206

出土遺物（11）





出土遺物（12）

図版25

227

228

229

230

239

240

241

242

256

257

258

252

254

出土遺物（13）

報告書抄録

ふりがな	てんげいじきゅうりょうないいせきぐんはっくつちょうさほうこくさんのいち
書名	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ－1
副書名	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第４次）　～中世以前編～
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	180-2
編著者名	原田恵理子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）7031
発行年月日	西暦2005年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
天花寺城跡 小谷赤坂遺跡 小谷古墳群	三重県松阪市 嬉野天花寺町 字小谷・赤坂	24405	b90 b94 b391	34° 38′ 25″	136° 28′ 14″	19970506 ～ 19980227	3,500	一般地方道天花寺一志嬉野インター線緊急地方道道路整備改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天花寺城跡	城館	中世後期	溝		
小谷赤坂遺跡	集落跡 墓地	縄文 弥生後期 古墳終末期 中世（13世紀以降）	竪穴住居跡６棟 土壙墓５基 集石・火葬墓・土壙墓	縄文土器 弥生土器・石器 土師器・須恵器 土師器・陶器・五輪塔	絵画土器出土 一部で集石の残存状態が良好
小谷古墳群	古墳	古墳終末期	小谷30号墳（円墳） 小谷32号墳（方墳）	須恵器	埋葬施設を確認
その他					

要約

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群第４次調査のうち、中世までの遺構・遺物をまとめた報告書である。

小谷赤坂遺跡では、弥生後期の竪穴住居や中世墓を確認し、弥生後期竪穴住居からは舟・鹿等が描かれた絵画土器が出土した。中世墓の埋葬施設には土葬墓・火葬墓（常滑・古瀬戸・南伊勢系鍋を蔵骨器とするものも出土）があり、一部では上部構造である集石が良好に残っている箇所も確認した。中世墓の機能していた時期は13世紀～16世紀と考えられ、天花寺城とも時期が重複し、城館と墓の関係を見る上で興味深い例といえる。

小谷古墳群は、30・32号墳の調査で、６世紀末から７世紀頃である。いずれも墳丘は削平されていたが、30号墳は埋葬施設を確認することができた。

三重県埋蔵文化財調査報告180-2

天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-1

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第４次）

～中世以前編～

2005（平成17）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲第一プリント社